
GAME

春生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GAME

【Z-ノード】

Z2624V

【作者名】

春生

【あらすじ】

インターネットで当たった限定数個のゲーム。
起動したら本当にゲームの世界に行ってしまった。

そこから始まる異世界トリップです。

全74話完結予定。

よろしければお付き合いくださいます。

始まりの過去（前書き）

- * 別作品、『encounter』『share the fat
e with . . .』に出る人物たちが出ています。
もともと、GAMEが一番最初に完結出来た作品です。上記二作品
はGAMEから派生しました。数年前に書いた初完結小説…リメイ
クで多少マシになつてゐるとはいへ、やりたいようにやつてます（苦
笑）
- * 過去デンパンブックス様で公開していました。リメイク作品です。
- * イントネーションはやわらげてあります、主人公、関西弁使用
あります。ご容赦ください。

始まりの過去

この夏、自分の身にありえないことが起こった。

インターネットで販売された限定数個のゲーム。その幻とも呼ばれる物が手に入ったのだ。

しかし実際は、あたるわけがないと、遊び半分で抽選に応募していたため、まさかの当選。

それほど固執してゐるわけでもないけれど、とりあえず手に入れた事だしと起動させた。

そうしたら、本当にゲームの世界に行ってしまった。

似た所で例えるなら、中世の町並み。それが一番しつくり来る。そびえ立つ城や、端正な顔立ちの人間。幻想的な雰囲気を持つ魔法使い。魔法陣、剣、諸々・・・

同じくゲームを伝つてその世界に来てしまつた人間が数人いたが、『最高位の魔法使い』とか言う女性に、元いた世界に帰して貰つて、事なきを得た。

元々、そのゲームを作つたのは、俺が遊びに行つてたインターネットのHPの管理人で、実はその管理人、ハンドルネーム『プレイジ』があつちの世界の人間だったなんて、信じろつて言われても、無理な話だつた。

何もかもがまるで夢物語。『実は、夢でした』といわれても、納得できるくらいの出来事だつた。

ま、なんにせよ、今現在は、無事に現代の生活を送れてるんやけど・
・・。

始まり

夏休みも終わり、新学期。

秋も深まってきたころ、電気街で高校一年生の男子が、珍しくニコースというものに耳を奪われて足を止めた。身長170センチほど、前髪が長めの黒髪、見た目に悪そうな印象を持たせてしまう服装。そんな少年が、ニコースに釘付けになっている姿は、少し不自然さが発生するのか、歩く大人たちがちらちらと伺い見て過ぎ去っていく。

そんな視線はお構いなしで、『斎藤 風来』は、展示のテレビに釘付けになっていた。

「おい、風来？　はよいくで？」

時刻は夕刻になろうとしている。パソコンのソフトを買いに来た友人達と居酒屋に行く予定だった。足の止まつた風来に気が付いて、友達の一人が声をかけてきたが、風来はテレビから目を離さない。

「何見てるねん？」

再び声をかける友達に振り向かず、ミネラルウォーターを持つている手を後ろ手に振る。

「先行つとけや。　後から追いつくわ」

「店は分かってんな？」

「前に行つたとこやろ？　大丈夫や」

「ほんなら、すぐ来いよ」

友達が走つていくのを察知しながらも、風来はテレビを見ていた。話題の事件について、メインキャスターが、辛口なゲストと共に話している。

『それにもしても、この奇妙な事件、どう思われますか？』

『うーん、何かの事件に巻き込まれたんですかねえ？　中学生の少年が一人で一ヶ月以上もどこかに出かけるとは思えないし、学校もありますしねえ』

『それにしたって、最近の親は忙しいのねえ？　だって、こんなに長い期間子供が居なくなつていてことに気が付かないなんて、ちょっと異常じゃないかしら？』

『ええ・・・両親とも、会社の都合で長期出張が多くて、留守がちだつたということですが・・・』

『でも、二ヶ月前に一度帰つてきて、自分の子供が居なくなつているのに気が付かないなんて、仕事が忙しいことは理由にならないじゃない？』

『確かにそうですねえ。　今回の事にしても、ゴミ箱の異臭に気づいて、そのゴミの日付とかが余りに前だつたから、おかしいって思つて、やつといないのに気が付いた。　って、ねえ』

『私は行方不明の子に同情しちゃうわ。　こんなに気にかけてもらえないなんて。　こんな両親でかわいそつ』

『そうですねえ。　・・・ハイ。　それでは、少年の特徴を公開します。　中学一年生で、身長は153センチ、細身で、髪はかなりの茶髪です。　少年の友達からは金髪に近いくらい染めてあつたとの情報もあります。　家には少年しかいなかつたので、行方不明時の詳しい服装などは分かつておりません』

『でも、あれですね。　インターネットもかなりしていただようですから、そつちの可能性も大いにありますよね』

『そなんです。　警察もそちらの線も疑つて調べたそなんですが、パソコンのデータが消去されていたそうです』

『それはまた、奇妙な話ですねえ・・・』

『無事に見つかると良いんですけど・・・さて、お知らせの後はスポーツです』

コマーシャルに切り替わった時点で、テレビの前から動いて、友達の待つ居酒屋に足を向ける。人通りの多い、夕方の電気街を繁華街に向かって歩き出す。少しだけ残つているミネラルウォーターを飲み干して、専用ゴミ箱に捨て、脳裏を掠めた少年のことを、ありえ

ないと振り扱う。

中学生、金髪で153センチと低めの身長。行方不明になつた二ヶ月前といえば、夏休みに入ったころ。自分が、限定ソフトで異世界に飛び込んでしまつたころと一致している。同じ境遇だという人間の中に、そんな特徴の少年が一人居たのだ。

だけど、全員こちらの世界に戻つたはずなのだ。現に、自分は今、こうして元の世界で普通に生活をしている。

けれど、風来はあの日以来、問題のソフトを起動していない。異世界に行つた事自体、信じたくなかつた為、ソフトの販売元のホームページにも行つていない。

つまり、ゲームを買う前、異世界に飛ばされてきたメンバーと出合つていたチャットルームにも行つていないわけで・・・確認は取れていらない。

「・・・そんなわけ、あるはず無い。 大体、パソコンのデータが消去されてるわけ無い」

自分を納得させるように、言葉が口を割つた。ゲームソフトを通じて異世界に飛んでしまつたのなら、ゲームソフトの痕跡が残つてゐるはずだし、パソコンのデータをすべて消去なんて、本人以外の誰も出来るはずは無い。出来るとすれば他人のパソコンに侵入するとの出来る高度な技術を持つたハッカーか、コンピュータウイルスくらいだ。それにしたつて、何かしら痕跡が残るはずである。

「オレの知つたことや無い。 チャットナカマでも現実は他人や。 そこまで心配する義理は無い。 ・・・無い。 ありえへん」

自分に言い聞かせるかの様につぶやきながら歩く風来の目に、一軒の電気屋が映る。インターネット無料体験の大きなのぼりを見つけ、数秒考えてから電気屋に入り、無料体験のコーナーでパソコンに向かう。ここからなら、この電気屋からのアクセスが残るだけで、自分がアクセスした経路はどこにも残らない。もしかしたら、あのホームページの掲示板にゲームを手にした人間の書き込みがあるかも知れない。

少し緊張しながら椅子に座り、マウスに手を置く。

ホームページにアクセスし、個人判別の為の登録IDとパスワードを入力する。いつもの通り、会員用の画面に切り替わった。が、その後、操作をしていないのに勝手に画面が切り替わっていく。

「・・・?！」

切り替わった先の画面に映し出されるその光景に、心臓が高鳴る。マウスを動かしていないのに、カーソルはチャットルームに入室してしまう。

入室者は、先に一人居た。

ハンドルネームは『プレイジ』、ホームページの管理人、つまり、あのゲームを作ったと言われている人物だ。

画面で、言葉が語りかけてくる。

プレイジ：ここにちは。レイス。

「・・・」

自分のハンドルネーム、『レイス』で、語り掛けられた見慣れたチャットルームは、異世界の空気そのものを漂わせていた。RPGのゲームで、ストーリーの重要な場面に出くわしている、そんな気分の高揚と、緊張感があつた。まるで、ここで選択が、今後のゲームの主人公達の運命を変えてしまう。そんな空気。

ここで、無視を通して席を立つてしまうこともできる。出来るが、この現象は一体何なのか。会話を続ければどうなっていくのか。恐怖と興味が更に混ざった気持の葛藤かつとうが、数秒の間を作った。

（いやいやいや・・・！ 待て！ ありえへん・・・。）この現象も何かのエラーか、プログラムミスか、そんな感じやろ・・・？ 相手が異世界の住人やなんて・・・ありえへん・・・）

異世界に飛んでしまったこと自体、いまだに信じ込みたくないと思っていた風来の指は、危険を悟りながら、初心者のようにぎこちなく言葉を話す。

空気に気圧されている事など、そこにはないかのうに、文字は順調に会話をする。

レイス：「んにちは、プレイジ。管理者があるなんてめずらしいやん？」

プレイジ：君がアクセスしたからだよ。レイス。

レイス：その後勝手に動いたけど？ バグか何かか？

プレイジ：ずっとこないから、どうしようかと考えていたんだよ。君をこちらに呼ぶ方法をね。

レイス：まだそんな事・・・〔冗談やろ

プレイジ：まだ、信じていない？ ありえないと思つていい？

プレイジ：一人残つてたけど？

プレイジ：でも、自分には関係ないか。友達面しても、所詮は他人。傍に居てもそつなんだから、チャットナカマなんてどうでもいい？ 冷たいねえ。でも、だから、そちらの世界の人間は扱いやすい。

風来は心を見透かされている気がしてならなかつた。沸き立つ怒りをやる場所もなく、マウスを動かすと、今度は意のままに動いてくれるカーソルを動かして、チャットを突然退室する。そのまま、足早に電気屋をして、友人達の待つ居酒屋へと足早に歩き出す。が、チャットの文字が焼きついて、苛立ちが収まらない。

「・・・あかんわ」

吐くようにつぶやいて、風来は携帯電話で先に店に行つている友達に連絡を取つた。ごねる友達に謝り倒して予定をキャンセルし、帰路を急いだ。

始まり（後書き）

拝読ありがとうございました。

一つ不安なのですが、『「る』って全国共通でしょうか…。辞書で引いたら一応意味は出てきましたが…。

危険

自宅に戻り、ゲームソフトのスタート画面までパソコンに表示して、風来はマウスから手を離した。画面は、黒一面、その真ん中に大きく『盗賊の書』と書かれている。これをスタートさせると、次の瞬間、異世界に飛んでしまって、ゲームの中で存在する、盗賊のような服装をしている。

前回、これを『よく普通のゲームだと思ってスタートさせたときは準備も無くて大変だった。今回は、とりあえず役立ちそうなものを力バンに詰めて、斜めに背負つてから、スタートをしてみるとした。荷物も異世界に持つていけるのかは謎だが、もし荷物ごと行けたら、何かの役に立つかも知れない。

「・・・」

画面を再度見て、クリックするのを少し躊躇する。ちゅうしゅうちよ

全く違う世界に飛んでしまうなど、本当に現実に有り得ない話で、できれば夢物語で終わらせたい所なのだ。確かに、漫画やゲームで見る世界に多少の憧れや魅力はあるが、別に現実にそこに立ちたいとまでは思わない。

静かな部屋に、時計の秒針の音だけがしばらく響いた。

行方不明の中学生をこちらに引っ張つてでもつれて帰る。それをするだけにいくんだと、風来はもう一度心に思い、ゲームをスタートした。

直後にパソコンから放出された光に包まれた後、荷物を背負つたまま、風来は異世界にいた。

居たのはいいのだが・・・。

(・・・なんや、ここ・・・)

それが風来の心の第一声だった。ほほ、闇に近い中に立っていた。とりあえず、見える視界の中確認すると、服装だけは以前と同じようになっていた。風来は、うつくりとなじんで広がりを見せてきた視界で、周囲を確認をする。

建物の中のようで、ほのかな明かりは壁の等間隔に設置されている蠟燭からだつた。大きく歪な形の岩が積みあがつて出来ている建物の中で、自分が立つているところは狭い廊下の様子。壁に触れてみると、湿つていて、水気が確認できる。それを確認して、初めて、風来の意識が湿気を感じ取つた。暑いわけではないが、気持ちのいいものではない。重くなつた黒髪をかき上げて、風来は毒づく。

「・・・ていうか、嫌な感じやな」

前回こちらに来てしまつたときは、『最高位の魔法使い』がどこかに飛ぶはずだつた自分達の軌道をまげて、安全な町の中に変えてくれていた事を、風来は思い出した。つまり、あのゲームは元々ここに来るようになつて設定されていたと言つことだ。

これがもし、ゲーム機を通じて自分がコントローラーを握つているなら、間違いなくこの建物を出る事を優先する。こういう暗い感じの場所にはなにかしら、嫌な者が居ることがゲームの定番だからだ。そして、戦うことに関してレベルが低いキャラでは、敵う相手ではないことも分かつている。

(そやけど・・・)

頭で考えをめぐらせて、風来は肩を落とした。出口が分からぬ。今しがた、異世界から飛んできたのだから。

道はとりあえず一本道。前に進むか、後ろに進むか。後ろに行くのは性格的に嫌だと風来は前に一步踏み出そうとした。が、先に動かした左足に運動して、動くはずの右足が動かない。

「 ？ ！」

バランスを崩しかけて、あげた左足を何とか地面に着き、同時に異変を感じた右足を見る。

「 手・・・？！」

思わず声を上げる。右足は床から生えた手首より先の泥のような手にしつかりと握られていたのだ。手は容赦なく足を締め付け始める。

「 いってえ。 まじ痛いって！！ 離れる！！」

振り解こうと足を動かしても、泥の手は微動だにしない。それどころか、もがけばもがくほど、締め付ける力が強くなる。

段々痛みに焦りを覚え始めた風来の脳裏に浮かんだのは、一本のナイフ。異世界に飛んだとき、『盜賊の書』で飛んだ自分はそれなりの装いに変わっている。確か、腰にナイフがあつたはずだ。

無我夢中で柄を探り当て、鞘から引き抜き、床から出ている手首に刃を走らせる。

床と切り離された手は、音もなくボロボロと崩れ、やがて腐食を始める。そんな泥の手首の変化を確認してから、風来は荒れていた呼吸を整えた。ここは、確実にまずい。それだけが、理解できていた。恐る恐る掴まれた足首を動かしてみると、思ったほど重症ではないようだ。曲がるし、回せるし、痛みも落ち着いてきた。ほつと一息ついて、ナイフを鞘に戻したら、異様な気配を察知する。見たくなりが確認せざるを得ない。背後の道の奥に、目を凝らす。

床が、うごめいていた。

いや、無数の泥の手首が、明らかに近づいてきていた。

「 ・・・ マジで？ そら無理や！」

自分でも顔が引きつっていることが分かるくらい、引いて言葉を吐いてから、風来は廊下を走り始めた。

走つて、走つて、見つけた階段を駆け上がる。螺旋のようになっていった階段が様子を変えたのに気がついて、風来は足を止めた。たどり着いたのは、天井が大きなホール状の階。どうやら最上階らしい。階段から離れ、状況を確認するために少し歩く。だだっ広い階は蝶

燭が設置されている壁 자체が遠いため、更に視界が悪い。泥の手はもつ出てこないらしいが、石造なんかが飾つてあつたら、それが敵になつて襲つてきそうだと、現実世界のゲームを思い出して苦笑いした。

異世界に来ると服装も変わるが、潜在能力もうんと引き出されることは、以前に来た時に確認していたが、まさか自分がこれほど走れるとは思つていなかつた。現実の世界でこれが出来たら世界新記録は間違いない。

泥の手を振り切つて安心したせいもあつて、そんな事を考えたりしたが、その安堵感は次に襲つてきた感覚に一掃された。変わりに、背中を寒気が走る。

何かが居るのだといふことが、直感で感じ取れた。冷や汗というものが初めて頬を伝う感覚を覚えながら、風来は気配の方に目をやつた。

広い空間になつてゐるフロア、その中央に、気配の元が居た。

それに気がついた直後、中央に設置されていた数個の蠅燭が一斉に火を灯した。並んだ蠅燭がほのかに照らし出すそこには、少し段差があつて、その上に王座のような椅子があつた。

暗くてよく見えないが、確かにそこに人が居る。

「こんばんは、レイス」

かけられた言葉に思い出したチャットの始めの言葉が重なり、同時に、認識する。

あれが、ブレイジだ。ど。

「・・・こんばんは、ブレイジ」

風来は気圧されているのが癪で、あえてチャットと同じ言葉を返事とした。その意識を察知したのだろうか、ブレイジが愉しそうに微かに笑つた。

いや、正確には暗くて視覚で見て取れて居ない為、笑つたと感じたといったほうが確実だろ。

「そんなに怖がらなくてもいい。危害を加える気は、今のところ

は、無い」

（・・・今のところは・・・ね・・・）

僅かに強調されたかに聞こえた言葉を、風来は心で繰り返した。そんな意味ありげな言葉を含ませるという事は、今後どうなるかは分からぬという事だ。

警戒して黙っていると、ブレイジが動く気配を見せた。足元の部分にあまつている布が、床を擦る音が僅かに耳に届いた。ゆっくりと段差を降りて、レイスの前に立つたブレイジの姿を見て、思わず声を出す。

「子供・・・？」

見下ろした姿は身長から考えても、10歳位の子供だった。黒い布で体を覆い、フードで深く頭を覆っている為、顔はまだはつきり見えないが、相手が自分より小さいという事に多少の余裕が生まれてくる。

「なんや・・・こんな小さい奴やつたんか・・・」

闇と気配に勝手に想像していた姿との余りのギャップに、素直な感覚を乗せた言葉が口を割った。その言葉に、ブレイジはフードの陰から紫の瞳でレイスを見上げ、今度は確實に笑つた。

「今、だったらなんとかなるかも。って思った？」

言葉が先か、レイスの前髪が僅かな上昇気流に煽られたのが先か？その後、レイスの数メートル後ろで爆発が起き、爆風に背中からあおられる。

「・・・？！」

驚いて、後ろを振り返る。立ち込めた土煙はあつという間に外気に吸い込まれ、壁に開いた大きな穴が視界に映る。最初に触った岩壁の感触は、かなりの巨大さを感じさせるものだつた。それが完全に穴を開けて、見える夜空に三日月が姿を見せていた。冷たい風が、吹き込んでくる。

「今のは、ほんの下級黒魔法。・・・お前じや、どうにもならない」言葉をかけてきた紫の瞳を再び見下ろしたレイスは、唾を飲まずに

はいられなかつた。これが、プレイジの放つた魔法。一瞬の出来事、一瞬の破壊力。対処出来る出来ないの話以前の問題だ。

間をおいて、レイスは自分を落ち着けるために深く息を吐いた。

「別に、どうこうする気もないけど……」

そう言つて何気なく両ポケットに手を突つ込む。ゲームを起動する前、ポケットに入れておいたものが、ちゃんとある事を確認しながら言葉を続ける。

「どうこうされる氣も無いねんけど……。オレはアイツを連れ戻しに来ただけやし。なんて言つても、逃がしてはくれへんやんな？」

「オレがお前をどうにかすることは出来ても、お前には出来ない。ここに来た時点で、お前はオレの言つことを聞くしかないという事だ」

「……オレには自由が無いって事や？ そんじや、ま、これをお近づきの印に……」

そう言つてレイスが左のポケットから出したのは数個の爆竹。右のポケットから出したのはライター。当然、こちらの世界の住人のプレイジは初めて目にする。導火線に火を灯す姿を不思議そうに見るプレイジに、それが稼動するぎりぎりのところで放り投げてやる。瞬間、けたたましい音と、暗闇の中で明るすぎる火花が散る。さらにリュックのポケットから取り出した煙だまの花火を持てるだけ持つて、火をつけ、投げ散らかす。効果が切れそうな爆竹も、もう一回、数個火をつけ追い討ちをかける。

煙だまの煙も、爆竹も、たかが子供だまし。そんなこと、元の世界では常識で、当たり前だ。だが、誰しも初めてそれらを耳に、目にしたとき、ものすごく驚き、少し、恐怖した事を覚えている。安全なものだと分かっていても恐怖を与えるそれらは、ほんの一瞬でも相手の動きを鈍らせ、判断を遅らせてくれるだろうと、レイスは考えたのだ。そして、それらが、思惑道理の効果を發揮してくれている数秒の間に。

レイスは先ほど開いた壁から夜の空へダイブした。

危険（後書き）

拝読ありがとうございました。

魔法使いに花火って…ねえ？（苦笑）
でも、爆竹って不意に音聞いたらびっくりしませんか？
小心者の作者だけでしょうか。
花火の仕組みを知らなければ、花火は魔法のようだと思ったことが
ある作者です。

僅かに、甲高い音が発生する。

次いで、魔法力による上昇気流が彼のフードを煽り、脱がせた。闇には溶け切らない赤黒い髪が、落下していく肢体を見下ろす顔の両側で揺れた。

「…駒にも玩具にもならなかつたな…」

濃く深い黄金色の球体が下へ向かつて開いた手のひらに宿つた。たつた5ミリにも満たないそれは、強い破壊力を持つ魔力が凝縮された魔法の姿だった。

その魔法が構成され始めてすぐ、魔法力を断ち切るような強い横風が上空を駆け抜けた。

「 」

以前、夏休みにこちらに来たとき、身体能力も、潜在能力も、うんと引き出された自分は町の屋根から屋根に飛び移れたり、普通じゃ出来ない動きが出来た。自分が、知りえる『盗賊』というもの動きが出来ていた。

何もせずに殺されるより、選択した行動。一か八かで、三日月に向かってダイブした体は、重力に従い、落下を始めた。

建物は、思った以上に高かった。

周囲は、うつそうと木々が多い茂る森。その木々の刃のような枝に身を切り刻まれながら、レイスはただ、身を縮めることしか出来ずに落下した。

何度も何度も木々の枝にぶつかり、折りながら、時には太い枝にぶつかり、呼吸が止まる位の衝撃に襲われた。

最後に一番大きな衝撃が来た後、ようやく落下が止まつた。着地どころか、受身すらまともに出来てないわけが無い。錯乱状態のまま、

天地を探し、両膝、両手を地に着いたら、上手く取り入れられない酸素を吸い込もうと、脳も体も必死になる。

むせ返りながら呼吸を繰り返していると、今度はなんともいえない気持ち悪さがこみ上げてくる。流れのまま吐き出すと、口の中は鉄の味で一杯になる。たまらず、唾液で絡めてそれらを吐き続ける。その間も、激しく揺れている感覚が止まらない脳が、酷い眩暈を誘い、更なる吐き気を催す。

森の中は蠟燭などなく、弱い三日月の光も差し込んでこない真の闇だった。

短く荒い呼吸音が、闇に吸い込まれる。感覚は僅かに正常に戻り、地に付いている腕が一の腕まで湿った落ち葉に埋まっていることにようやく気が付く。これが無かつたら死んでいたかもと、頭のどこかでそう思った。

近くの木の枝が、小さな音を立てて折れた音で、そちらを見る。落ち葉のクッショーンの上に、自分の鞄が今頃落下してきていた。それに体勢はそのまま、四つん這いでたどり着く。運が良かつたのか、どこも破損せず、無事なりュックサックを背負う氣にもならず、ひと時、眺める。体のどこが痛いとか、そんな局部的な痛みなら、処置も出来たかも知れない。だが、今、脳が訴えてるのは、ただ、だるさ。体を動かすのに、これほど精神力を使うことは既無に等しい。

（・・・生きてる・・・）

相変わらず気持ち悪いが、眩暈も先ほどよりはマシになつた。生きている限り、じつとしているわけにも行かない。本能から、思う通り早く、少しずつ体を動かし始める。

まず、指を動かし、それから腕に力を少し入れてみる。それから、ゆづくりゆづくり、いつか来るかも知れない痛みにおびえながら上半身を起こしていく。鞄の紐を掴み、すぐ脇の木に背中を預け、空を仰ぐ。そこで、ようやく悪い視界の中、辺りを見回すことを思い立つ。

数歩先は木。360度、木。それも、かなり背の高い木ばかりで、

それに絡んで幾つもの氣味の悪いツタが絡みあつてゐる。地面はすごい量の落ち葉に埋め尽くされていて、座つた今は、腰まで埋まつてゐる。それなのに、木々の上の方は葉が沢山ついていて、月明かりが差し込むことを一層、拒んでゐる。

そう遠くないところで、夜だというのに鳥の羽ばたく音も聞こえた。鳴き声も聞こえるが、決して美しい鳴き声とはいえない、気味の悪い不安を煽るこえだ。

とにかく、動かないよ。

そう、思う心に反して、脳は体を動かすことを同意してくれない。氣味の悪い鳥達の声も動きも止み、辺りはまるで生き物が居ないかのように静まり返り、静寂に覆われる。

薄く浅い呼吸を繰り返し、意図せず目を閉じそうになつた時、ふと、

卷之三

もう一度、闇に耳を凝らす。

『聞こえる？』
レイス

使いの声だ。

闇の中、自分がどうどうおかしくなつたのかと思つて、声の中の名を口にする。ヒ、闇の中から返事が返つてくる。

『ああ、よかつた。無事なのね?』

かけられる人の声に、少しだけ口元が緩んだ。

「最惠」

『レイス、以前あなたが泊まつた部屋を覚えているかしら?』

「……記憶力は悪いほうやない。……ど、思うけど？」

なるべく鮮明に部屋の様子を思い浮かべて欲しいの。こちらに

あなたを移動させるわ』

言われて、半信半疑なのはもちろんだが、それに賭けるしか手はない。レイスは目を閉じ、以前泊まった部屋を思い浮かべる。

来客用だとは思えないそろつた調度品、それらに飾られている高そうな装飾。縁に綺麗な彫りが入っているベッド。そのクッショーンは最高にやわらかくて、テーブルは綺麗な石で出来た、傷も埃も一つもないもので、足元は靴で踏むのが申し訳ない柔らかな絨毯・・・。それから・・・。

思い描いて、思い描いて・・・。

まぶたの向こうが、明るいと感じたレイスは、恐る恐る目を開けた。暗闇の中に居たせいで、光がまぶしすぎて、なかなか瞼が上げられない。

ようやく開いた視界の中に、白い法衣をまとった女性が居た。電気がまぶしいだけではない、彼女の白が、更に視界を眩しく見せていたのだ。

顔を見上げたが、光に慣れていないせいか、焦点が定まってくれない。

「・・・

何か言葉を口にしようとしたレイスの額に手をかざして、彼女が微笑んで語りかけてくる。

「もう、大丈夫よ。少し、眠りなさい」

言葉を聞き終えたレイスは、深い眠りに誘われた。

魔法使い（後書き）

拝読ありがとうございました。

現状

各国の王が出席した会議が、つい先ほど終了した。全員が出て行くのを確認してから、一番最後に部屋を出たレオンハルトは小さくため息をついた。

彼、『レオンハルト・ヴァルス』は、世界を統括するスカイゲートの城の王である。

晴れ渡つた穏やかな空を連想させる髪色と瞳、過去は剣士として名を馳せた、鍛え上げられた体躯。

強さと優しさを持ち備えていると評価されるが、本人は大きな会議が一つ終わるたび、つぐづぐ自分が王というものに合っていないと胸中で毒づいていた。

先ほどまでの会議の主題は『黒魔法使いプレイジについて』

黒魔法についての彼の才能は秀でていて、師について学んでいたころからその進歩は目を見張るものがあった。

だが、秀でた力は、元々彼が持ちえた探究心と合わさり、外部に漏らすことを禁止としていた禁断の魔法を手にしてしまった。それから、あとは、彼自身が気づかないうちに彼の心が『黒』の引力に飲まれてしている。持ち備えた器用さで、その力を異世界にまで影響させ始め、少々の事では自体は收められなくなつていた。

各国とも、プレイジを抹殺することを早々から話しに盛り込み、当然のように戦いに、世界の魔法使いの頂点の証である、最高位の称号を持つ、『スイ・レン』を狩り出せと。魔術使いには、魔法使いを当てる。

そんなに殺したかつたら自分の国で何とかすればいいの?。

レオンハルトは喉まで出たその言葉を、幾度飲み込んだとか。だけど、どの国もプレイジの黒魔法を恐れて兵を出すどころか、足

踏みをするだけだった。

事実、数百ほどの兵がブレイジに襲い掛かつたとしても、彼の魔法の前にはあつという間にやり返されてしまうだろ。そんな馬鹿げた事は、さすがに誰もやろうとはしないが。

（・・・いや、ある意味それくらいやろうと言い出す国があつたほうが世界の活力にはなつたかもな・・・どうせ止めるけど）

廊下を歩きながら物思いに耽る。

どこの国も、手を出した後の報復を怖がつて何もしようともしない。たつた一人の黒魔法使いに対しての、各国のなんとも情けないことが。

だけど、それは自国も例外ではないと、レオンハルトは先ほどのため息をついた。勝てないと分かっている相手に兵を向けて、無駄に命を落とさせるなんてばかげている。それはただの命の無駄遣いなだけであつて、称えられる事ではない。

自室に戻ると仰々しい上着を取り装飾品をはずして、ソファに身を預ける。襟元を締めている飾り布を緩め、シャツのボタンを2個ほど外すとようやく肩の力が抜けて、深い溜息が落ちる。会議のやり取りが、もう何度も頭の中で勝手に繰り返されている。

『魔法使いの最高位であるスイ様なら、ブレイジと渡り合えるのは?』

『過去、魔族の主を倒した実力のあるスイ様なら・・・』

王達にさえ、『様』を付けられる魔法使いの頂点に立つている魔法使い、『スイ・レン』は、レオンハルトの城、スカイゲートに住んでいる。彼女の実力は、レオンハルトもよく知っている。『魔族の主を倒した』とき、共に戦つていたのだから。

彼女も自分も稀に見る特殊な種族で、不老長寿の命をそれぞれの属性の精霊達に授かっている。それと同時に、精霊達の力も与えられ

ているので、並の人間よりずっと能力は高く、秀でている。

そんな人間に対して、各国の期待を集めなというのは無理な話であって、だけど、国々をまとめているレオンハルトに万が一のことがあつては困るという、各国の思惑もあり、視点は、スイ一点に注がれているのだ。

スイは頼めば必ず動く。そういう性格を皆が知っているからこそ、皆、彼女に願いを集める。

不老長寿の種族には、レオンハルトと、スイと、あと一人。『クレージュ・クライシス』という男が居る。この三人以外は、すべて戦いにその命を絶たれてしまった。不老長寿は不死ではないのだ。それをどうも、理解してもらえていない。

『しかしご存知の通り、スイは過去の戦いにおいて魔力をかなり消費してしまつていて、回復にはまだ時間がかかる状況に居ます。その彼女をプレイジに向かわせるのは、あまりにも分が悪すぎる話です。』

『『風竜の騎士』は？ まだ行方不明なのか？』

『・・・全力を尽くしていますが、未だ、行方不明です。申し訳ありません』

風竜の騎士・・・つまりクレージュのことをつつかれて、レオンハルトは苦い思いをした。彼もまた、過去の戦いで共に戦つた一人だが、現在行方不明である。ひとところにじつとしていられないのは、彼の昔からの本質だった。レオンハルトは今更彼にずっと城に居るとは言わない。だが、プレイジ討伐に、当然彼の名も挙がっているのだ。

まあ、城内に彼が居たところで、討伐の命を下すかといわれれば、答えは「ください」なのだが、どちらにしろ、その放浪癖のせいで、現在も行方知れずという結果だ。

結局、すべての国をまとめ上げているはずのレオンハルトが、一番

突かれ放題、苦い思いをして、会議は前に進まず終わってしまった。
「オレが動くわけにもいかないしな・・・」
もう一度ため息をついて、立ち上がったレオンハルトは、部屋の窓を押し開けた。秋の風が舞い込み、晴れ渡った空の色の髪を流していく。

ようやく落ち着いてきた空氣の中、ドアをノックする音が響いた。あまりに楽な姿すぎて、普段から『王らしくない王』のレオンハルトも、さすがにあせる。そんな部屋にドアの向こうから響く声はよく知った声だった。

「レオン、私よ。入つていいかしら?」
「スイ?」

少し急いでドアに寄り、ひき開ける。そこには、白い法衣、白い髪の最高位の魔法使いが微笑んでいた。

とりあえずと、部屋に迎え入れ、ソファを勧める。

「一息ついてたところだったのね?『ごめんなさい。』

姿を見て、スイは申し訳なさそうに言葉を口にした。レオンハルトはそれに、緩やかな笑みを返す。

「いや、別にかまわないよ。それより、今日はあまり部屋から出歩かない様に言つておいたはずだけ? 姿を見られたら、プレイジについて声を掛けられてしまうからって・・・」

「ここに来るまでに5人ほどに言われたわ。適当に返しておいたから平気よ」

そういうつてスイが小さく笑つた。こうつた臆すことない一面は彼女の魅力の一つだ。

そのスイの顔色が少し悪い事に気が付いて、レオンハルトは彼女の体調を伺う。

「どうかした? 顔色が余り良くないけれど・・・?」
「・・・実は高度の転移魔法と、回復魔法を使つてしまつて・・・」
「どうして? あれほど魔法力の回復に時間を費やすようになつて言つ

ておいたのに……」

「ごめんなさい、ちゃんと理由はあるの。以前、異世界から来た子達を覚えている？あの子達の中に居た一人、レイスの気配をブレイジの近くに感じ取ったの。それで急いで保護をしたのよ。そのために転移魔法を……保護をしたら、彼、命が危なかつたのよ。それで……」

「……それで、回復魔法を……確かに回復魔法は誰それと使えるわけじゃない。けれど、即座に完全回復させなくても良いなら、医師に見せることでも人間の体は回復する……！」

「本当に危なかつたのよ！見捨てるわけにいかないじゃない！たとえそうでなくとも、治癒できる私が居るのにそれを放つておけとでもいうの？！」

強く言い返されてレオンハルトははつとした。スイを気遣つあまりとはいえ、酷いことを口走つてしまっていた。

ここ数日、過密な日程が詰まっていたせいもあり、疲労のため視界が狭くなってしまっていたようだ。

そんなことではないと外では気持ちを立て直していくつもりだが、よく知った相手で気が緩んでしまっていたらしい。

考えなくとも分かるはずだ、自分が治療の術をもっているなら、傷ついた誰かをそのままにしておくなんて出来るはずもない。

傷ついた相手、彼に遭遇したスイの事を考えるより、スイを心配する自分を優先してしまった落ち度の結果だ。

「……ああ、そうだよな。すまない」

「……私こそ、キツイ言い方してしまってごめんなさい。……ブレイジのせいであつたく関係ない彼があんなに傷ついてしまって……なんだか、申し訳なくて……」

「それは、スイが一人で抱え込む事じゃないよ」

一瞬、部屋の空気が沈んだ沈黙に包まれた。その中でスイが立ち上がり笑顔を見せる。

「休んでたところにごめんなさい。レイスがきた事を報告しなきゃ

と思つただけだから、部屋に戻るわ」

そいつてドアに向かつて歩き始めたスイに、見送る形で後に付いたレオンハルトが声をかける。

「魔法力が尽きれば、また、魔法を使うのに生命力を使わないといけなくなる。あまり無茶をしないでくれ」

「無茶はお互い様でしょ？ あなたもこの所忙しすぎるわよ、レオン」

言葉に驚いて返す言葉を失つたレオンハルトに、スイは緩やかな笑顔を見せた。

彼女の長い髪と、床に引きずるほど長い法衣のすそが見えなくなり、ドアが閉まつても、レオンハルトはしばらくそこから動けなかつた。城内の誰もが見破れない自分の疲労を見抜かれてしまつた事に、本気で驚いていたのだ。

今も昔も、彼女だけには何もかもを見透かされる。

「・・・ほんとに、かなわないな」

僅かに笑みを含んだ呟きが、溜息と共に漏れた。

現状（後書き）

拝読ありがとうございました。

じゃまに何度も読み返し修正するんだろうか…。
軽く2時間はそうして過ぎていきました。

赤い法衣の脇に、一冊の書物を抱えた少年が客間に忍び込んだ。少年の髪色はその赤に不釣合いなほど金髪だった。反して瞳の色は黒い。

もともと、百科事典ほどの大きさのある魔道の書はそれなりに大きい物だが、少年の幼い顔つきと体つきのせいで、より大きくみえた。幾つもの窓から秋の緩やかな光が差し込み、部屋中を柔らかに照らしていた。部屋のベッドに見える黒髪に、そつと歩み寄つて顔を覗き込む。

大変傷ついて、一時は命も危なかつたらしいと聞いたレイイスの寝顔は穏やかだった。傷も完治されて、跡すらない。

数ヶ月前、初めて顔を合わしたレイイスとは、チャットで頻繁に顔を合わせていた。定期的に会話をしていたので、もう、ずっと知り合いだつたような感覚を覚えていた。チャットルームの中では目立たないくせに存在感のある人間で、居ないと皆が気にするような存在だつた。そんなレイイスが、以前こちらの世界に飛ばされてしまったと知つた瞬間に、すぐにもとの世界に帰ることを要求し、全員、帰る事が決定した。

誰もが同じ意見だつた。現実でどれだけ嫌なことがあつて、チャット仲間と一緒に居心地がいいと言つても、存在自体が全く違い、知り合いすら居ない異世界に居座り続けたいとは、誰も思つていなかつた。

まして、誰もが最初、作り物のゲームの世界だと思い込んでいたのだから。ここが全くの別世界で、作り物ではない世界だと知つたときの驚きは想像を絶した。

そんな中、ソルだけ、嬉しくて声を殺して笑つた。

帰る準備が着々と進められ、魔法を使う時になつてスイが皆に言い渡した。

『帰るべき場所をイメージして、帰りたいと強く願つて。 その意思があつて、初めて私の転移魔法は成功する』

俺は願わなかつた。帰りたいと思える場所が無かつたから。 皆は帰つて、俺はこっちで生きる。

そう思つてたのに。

「・・・どうしてまた来たのさ？」

チャットハンドルネーム、そして、異世界での名、ソルは寝息を立てるレイスに言葉をかけた。

魔法で穏やかに眠り続いているレイスからは、返事はもちろん返つてこない。沈黙の間が、ソルの中に僅かに疼いている思いを大きくした。

けれど、ソルはそれを押し殺す。元の世界で、自分にとつて期待と いう思いは、いつも打ち砕かれていた。だから、誰かに打ち砕かれる前に自分の中でそれを壊すことは、当たり前になり始めていた。 起きたレイスが、期待通りの言葉をくれるなんて誰も保障してくれない。だったら、最初からそんな物もつていなければいい。

ソルが部屋を出ようとしたその時、窓の外のざわめきが微かに響いてきた。いつもは静かなスカイゲートの城で、ざわめきなどめずらしい。

ソルはそつと窓から中庭を見下ろし、騒ぎの種を探した。そして、 驚き、見開いた瞳を輝かせた。

「 ドラゴンだ・・・！」

城の広い中庭には、一部だけ、芝生の場所がある。それは、稀に 帰つてくるただ一人の竜使いの着地の場所だった。周りの植物が強風で負けてしまわないよう、巨大な竜がゆつたりと降り立ち、その背中から青年が芝生に着地した。

淡い水色の髪色と瞳、例えるなら浅い水溜りのような色だらうか。澄んだ綺麗な髪色だつた。

瞳は少し大きくて、そのせいで童顔に拍車がかかる。竜を見上げて微笑む表情は少し幼く見えた。

青年が首の辺りを優しく叩いてやると、竜は頭を下げ、青年と頬を擦り合わせる。そして、空氣に溶け込むように姿を消した。

芝生の周りには兵士や女官らが集まつて、ざわめきをもらしていた。

「クレージュ様だわ」

「今までどこに居られたんだ？」

「何度見てもすごいよな、あの竜」

「帰つてこられたのかな？ またすぐ出て行かれるんじゃ……？」

「……」

取り巻きのざわめきが色を変えて一瞬大きくなつて、次の瞬間、静まり返つた。姿を見つけて駆けつけたスイが、クレージュに歩み寄つたからだ。

柔らかな風がクレージュの淡い水色の髪を通り、スイの長い髪を通り抜けしていく。

「スイ！ 迎えに来てくれたんだ？ うれしいなあ」

クレージュが誰もに好評である人懐っこい笑顔になると、集まつてきていた女官達が見惚れてため息をついた。ただ、スイ一人だけが、クレージュを見上げて表情を緩めない。

「あれ？ もしかして怒つてる？ いつもの事じゃん？」

そう軽い言葉を続けるクレージュの頬をスイの右手が叩こうと動く。が、囁つたように後数センチのところで手首を捕まれる。

「・・・相変わらず氣の強い事で」

にっこりと笑つたクレージュに初めてスイが口を開く。

「クレージュの放浪癖なんて、怒る対象になつていないわ。プレイジの側に近づいたでしょう？」

スイの言葉に周りのざわめきが再び起こり、クレージュのニヤついた表情も一瞬硬くなる。が、その表情と声色はすぐに茶化したもの

に摩り替わる。

「さつすが、最高位の魔法使い様。魔法力を持つてゐる人間は駆け落ちもできないなあ。バレバレじゃん？ オレの行動。探るくらいい心配してくれた？」

「誰もあなた心配なんてしてないわよ。私は、レイスの転移をするとき、傍にあなたの魔法力を感じ取つただけで……」「えー、心配してくれてないの？ それはそれで寂しいなあ」

「人の話は、最後まで聞い！」

捲し立て始めたスイの唇に、クレージュが自分の人差し指をそつと押し当て、言葉を堰きとめた。あまりに意外な行動にスイが毒気を抜かれると、唇から離した指に自分も軽く口付ける。

「帰つてきたのに、怒つてばっかり。すねちゃうよ？」

「・・・もう、そうやつてすぐに茶化す！」

「小言はたつぱりレオンにもらうよ。疲れてるんだろ？ 魔法力が前より落ちてる。それなのにここまで出向いてくれてありがとう。部屋まで送るよ」

「…相変わらず察しはいいのね」

「風が教えてくれるからね」

会話をしながら城内に入つていく2人を見送つた兵士や女官達が、眉を下げる会話をする。

「相変わらず、手が早いというかなんと言うか・・・。すごいなク

レージュ様」

「ホントだな。 だけど、オレには耐えられないけどなー」「何が？」

「あら、知らないの？ スイ様は、純潔を失つと精靈の力がなくなつてしまつという噂よ。 キス一つもだめなのよ」

「え？ ジゃあ、相思相愛でも手が出せないって事じやないか」

「そうなんだ。だから、オレには耐えられないって」

「クレージュ様はまだいいわよ。 ああして気持ちを表現できるんだから」

「さうよね、一番つらいのはレオンハルト様だわ。王だもの、手
どころか言葉も出せないわ」

「つらい恋ねえ・・・」

「切ないわ・・・」

女官達が夢と憧れをこめて遠い田をかるのを見て、兵士達は複雑な
表情で顔を見合わせた。

風竜の騎士（後書き）

拝読ありがとうございました。

城に仕える人たちはきっと仲がいいと思うんですけど。
通りがかりとか休憩室でちょっとと噂話したりとか..
休暇が重なつたら仲間内できっと、広場でバーべキューとかしてゐ
と 思い ま す。

そういう本編にない楽しげなところも想像したりします（笑）

クレージュが城に帰つてきている。

レオンハルトは面過ぎにその報告を受けた。クレージュには出かけることには口づるをく言わない代わりに、帰つたら必ず報告に来ることを約束させていた。

だが、待てども待てども一向に姿を見せない。

もしかして、またすぐに出て行つてしまつたのではないかと思い、レオンハルトが彼の部屋を訪れたのは夜遅くなつてからだつた。いくらノックをしても返事が無いので、ドアを開けて部屋に踏み込む。

姿を探して寝室を覗き、ベッドで気持ちよがりつて寝息を立てているクレージュを発見して、思わずため息をつく。

「起きる」

もちろん、声をかけただけでは起きる事は無い。それを知つてはいるレオンハルトは、クレージュの頬を掴むと強めに引っ張つた。

「んん…いひやい…」

「おはよう。夜だけどな

痛みに涙目で起きたクレージュは間近で聞こえた声に、はつとしてレオンハルトを見上げた。笑つているが明らかに怒つているレオンハルトと目が合つた瞬間に、じまかすように笑つ。

「・・・あれ？ レオンじゃないか どうしたんだ？」

「どうしたんだじやない！ 帰つてきたら報告にくらい来いつて言つてるだらつ！ せめてこれぐらい守れ、何回言つたら分かるんだ？」

「『めん』めん、行いつと思つたんだけども、つい寝ちゃつて…

「それから、プレイジのそばに近づいたそつじやないか。何を考えてるんだ」

「何つて…ほら、…放つとけなくて？」

「何があつてからじや遅いんだぞ！」

「ちゃんと無事に帰つてきたじやん」

「帰つてきたから言つてるんだよー言えない状況に居たらどうするつもりだ」

「…はい、すみません…、…とか言つて、自分も絶対助けるくせに…」

「何か言つたか？」

「いえ、何も…」

「お前に万が一があつてみる、今の均衡が崩れればプレイジはますますやりたい放題になるし」

「まー、そうカリカリすんなつて、折角のいい男が台無しだぞ。そうだ、お土産があるんだぞ、レオン」

「またお前はそやつて逃げる…、話はまだ終わつてないぞ」「いそいそとベッドを逃げ出してクレージュは寝室を出る。レオンハルトが後を追つと、クレージュは早々と『お土産』を棚から出してきてテーブルの上に運んでいた。

「今日、仕事は？」

「いいよ、もう大方済ませたし明日でも平氣だ。…、そんな物出してから聞くか？」

ワインボトルをテーブルに出しながら聞くことでは無いだろうと、レオンハルトは呆れて笑つた。

クレージュだからこそ、許される。そんな独特のものを、彼は持ち合わせている。風の力を持つためか、非常に場の空気に敏感なクレージュは、場を悪いほうへと流したことはあまり無い。

「仕事詰めもいいけどさあ、疲れすぎるといいことないぞ」「大して疲れてなんていないさ」

「目に見えるとこを隠すのうまいからな、レオンは。でも人の変化つて、しばらく離れていたほうがよくわかる事もあるんだぞ。お前少しやつれたよ」

「そうか？」

「うん。痩せた。だから太れ」

綺麗な曲線を描くワイングラスに、赤いワインがゆるりと注がれる。そして、悪びれず自分の前に座つて、グラスを軽く持ち上げたクレージュの笑みにレオンハルトの怒りも静められる。こうやってくださいた雰囲気で話せる人間は、レオンハルトの周りには少なかつた。「とりあえず、無事帰還したことに乾杯だな」

二人はワイングラスを掲げた後、一口、喉を潤した。少し甘めの後味を残し、すばらしい香りがいつまでも続く。一緒にお皿に出したチーズを食べながらクレージュが言葉を切り出す。

「いいワインだろ？ 最高峰の地方でお土産に買つてきたんだぜ。あ、買い物ばっかりしてたわけじゃないからな？ ちゃんとやる事はやつてきた」

「やる事？」

「そう、南の方角の魔物退治。あっち方面、ちょっと問題になつてたじやん？ 陸路じゃ兵の皆が行くの大変な場所だし、こりや、空から行くしかないかなと思って。とりあえず大型の噂がつくる所は手当たり次第につぶして来たよ」

「そうか、ご苦労様。怪我は？」

「魔物」ときに怪我なんてありえないね。樂勝

「いつも言わずに出て行くから、どの辺に何をしに行つているのかさつぱりなんだが・・・」

「だつて出て行くときは何も考えてないから、行つて来るつて言いようが無いんだよな。ちょっと散歩程度の気持ちで出て、思い立つて動くんだしさ」

「散歩の長い犬の飼い主は気苦労が増えるよ」

「悪い事はしないし、いいじゃんよ？」

久々に会つた旧友。そんな雰囲気にワインも進み、会話も途切れることはない。

クレージュが外出していた間に、双方にあつた苦楽を話し分かち合う。半々とまでは行かないが、それでもこうして会話をする事が、

色々な事の最高の薬になることをお互いが理解していた。その証拠に、数時間も経つと、久しぶりにレオンハルトの顔に自然の笑みが戻ってきていた。

そうして些細なことを話しあると、自然と話題はプレイジの話、国同士の話に変わってくる。

ふとクレージュが真顔になつてレオンハルトをまっすぐに見た。

「スカイゲートの城の王として、風竜の騎士に下す言葉があるんじやないのか？」

つまりは『プレイジ討伐の命』を示すその言葉を聞き、レオンハルトはクレージュから目をそらした。

「・・・確かに、お前ならプレイジと渡り合えるかもしない。だけど、一人で行つても必ず勝てるという保障はない・・・」

「かといって、スイは、今は当然無理だろ？」

「分かつてゐるんだ、分かつては、居る。・・・だけど、俺はもう、仲間を失いたくない。何かあればすぐに狩り出されるのはオレ達の中の誰かだ・・・。そのたびに、俺は動く事も許されなくて・・・。ただ、誰かを戦いに向かわせるだけだ。先に死んでいった仲間も、俺が殺したも同然に思えてくる」

搾り出された声にクレージュは奥歯をゆるくかみ締めた。クレージュは持ちえた風の力のせいで、風が運んでくる他人の内情を肌で感じてしまう。今のレオンハルトからは重く痛い風が吹いていた。

「先に逝ってしまった奴らが戦いに行くときに、俺、居合わせないこと多かつたからな。居たところで、あいつらのほうが強かつたし手出すなつて怒られただろうけど…。レオンがそう言つて自分を責めるなら、俺は自分の実力の無さに悔いて生きなきやならないな」

「お前には責任は無いよ」

「俺も、同じ事を思つてる」

即答された言葉に、レオンハルトはクレージュを見た。正面には、いつもと変わらず笑顔のクレージュが居る。

「な？ きっとスイも同じ事を思つてる。皆同じだつて。堂々胸を

張つてくれよ、王様なんだからさ。レオンがそんな顔してたら、皆が不安になるだけだぞ！」

「・・・ああ、そうだな。全くだ・・・ありがとう」

「酔いが覚めてきたな、まだ飲めるだろ？」

ぶつかつてくる風を避けながら、クレージュは違うワインを取り出すためと棚に向かつた。背を向けた立ち居地で、僅かに眉を寄せ、レオン・ハルトに顔を見せる次の瞬間のために、笑顔の準備をする。なにより、誰より、風竜の騎士が人気を集めるのは、その平和を運ぶ雰囲気のためだつた。彼に笑顔を分けてもらう人は、城にも町にも溢れかえつている。

クレージュは振り返ると、穏やかな笑みで重い空気を振り払う。

「切り出しどいてなんだけど、ややこしい話はこれで終了！」

言いながら、レオン・ハルトのグラスにワインを注ぐ。風は、まるでクレージュの意思を継ぐよつて、穏やかな空気を創り出した。

風竜の騎士 2（後書き）

拝読ありがとうございました。

小ネタです。

スイに「小町はレオンにたつぱつわいわよ」といったクレージュさん。

レオンの小言もわざととかわしました。

その辺のところ、どう考へたのかクレージュに聞いて見ました。

返事はこうでした。

「え？ 小言なんでもらひはあるわけないじやん」「やつ、計画的犯行でした…。

結果として、レオンハルトはクレージュにブレイジ討伐の命を下さなかつた。

過去、大掛かりな戦いの時には同じ種族の仲間を3名失つていた。3人とも、精靈の力を授かつていて、長い長寿の人生を共に生きるはずの仲間だつた。

小さなことには『わが国の優秀な兵をお使いください』なんて、媚を売りに来る王も多いのに、敵が大きいとなると、どの国も、どの人間もそんな言葉は吐かなくなる。

言われたところで負ける戦に命を払う気は毛頭無いのだが、それでも、そのクルリと方向転換する王達の性質は、レオンハルトにとつて許せない事柄だつた。

国を、国民を大事に思うからこそ、そう言つて来ないというのなら、レオンハルトにだつて胸中は分からなくない。でも、では、各国が手を組んで動きましょう。とは、どこも話しに出さない。

利益、不利益が王達の脳内を占領している。だから、どこもが牽制けんせいし合い、状況を見守る側に立つていて。

（一国の王としては、当然といえるべき行動なのかもしれないけど・・・）

そう思いがよぎつて、心が押し黙る。

血族から代々王となつてゐる人間なら、歴史上、国に最悪の事態を招いた人物とは書物に名前を残したくないのは当たり前なのだろう。様々な思惑と思想が絡み合い、ブレイジ討伐という責務は精靈の力を持つものへと確実に投げられたのだ。

能力の差、力の差。

目に見えて大きいそれらが、種族が違えど何も変わらない所を見えなくしている。

もしくは、ちよつとよい田くらましをしているのか。

後数ヶ月もすれば、どうしてクレージュを動かさないのかといつてくる国が出てくるだろつ。

書類に走らせているペンを止め、窓から青空を見上げる。

プレイジが名を通すようになつてから僅か数年。

行方知れずになるまで、プレイジは、スイの下について魔法を学んでいた一人だつた。

すぐにプレイジの強い黒の力に対する性質を見抜いたスイは、プレイジに魔法を教えることをやめた。もちろん、全世界の魔法使い達にプレイジに魔法を教える事を禁じた。

だが、どこにでも私利欲だけで動く裏の職業は存在する。

裏社会に潜んでいた黒魔法使いがプレイジの手を取つてしまつた。それを知つた時には、すでに関与していた黒魔法使いはプレイジによって殺されていて、プレイジは再び行方を眩ませていた。その沈黙の間に恐ろしい力を手に入れた事が知れたからこそ、レオンハルトは各国に手配書を出し、プレイジの行方を追つていた。

なかなか見つけることが出来ない間に、プレイジは異世界に手を出し、異世界の人間を操り、恐ろしい事件を起こさせてしまつていた。異世界にまで手を出せる人間は稀にしか現れない。魔法力が著しく高くなれば、まず成功しないからだ。プレイジは数年でそこまで上り詰めてしまった。

現実的に、クレージュとスイと自分、3人かかつてならプレイジに勝てるだろう。けれど、命を懸けた戦闘に『絶対』という言葉は無いのだ。

レオンハルトが世界を治めるまでにらみ合つていた国も、今はようやく戦わずに手を取り合つてゐる。やつと安定した平和な世界に、自分達が魔族の主を倒す前のよつた暗闇の世界は、もう訪れさせたくなかつた。まして、それが人の手によつて訪れるなどもつてのほ

かだつた。

だから、レオンハルトは動けずにいた。

スイは魔法力が完全に回復していないし、クレージュも一人では勝てない確立のほうが高いとレオンハルトは見ていく。よつて、向かわせる事は出来ない。

レオンハルトは、ただひたすら、そのときを待つことにした。

プレイジは、まだ若い。

若くして力を手に入れた者は、そのほとんどが力におぼれ、敵が動かなければ自分から動く。

その動きを止める人間も、プレイジの周囲には居ないはずだ。プレイジから見れば、敵とは自分の魔法力を凌駕する力を持つ、最高位の魔法使いであるスイだ。彼女が魔法力を回復させられるほど、それはプレイジにとつて脅威になる。黒魔法使いにとつて、属性が光のスイほどやっかいな敵はない。

いつか必ず、出てくるはず。

それも、早い時期に。
機会はそのとき。

誰に何を言われようと、それが誰も命を落とさない、プレイジ討伐の方法なのだ。

「・・・そろそろ、イライラしてるんだろう？ レイスにも逃げられて、自分の居場所は知られて。 けど、討伐指示が出ない限り、こちらの戦力は削れないし・・・あぶりだしてやるよ。 早く殺されに来い」

瞳を細めてレオンハルトは一人つぶやいた。

策略（後書き）

拝読ありがとうございました。

今回ちよつと短いです。すみません。

ちょうど区切りがいいもので…。

レオンハルトさんは、意外と怖い方ですよ。（たぶん）

ソルとレイス

数日後、ようやく目が覚めたレイスは自分の体を確認した。うつすらと残っている記憶ではかなり重症だったはずだが、体に傷など一つもなかった。それどころか疲労すら吹き飛んでいるらしく、普段より体が軽く感じられた。眠りにつく直前に、白い魔法使いを見た記憶がある。彼女、スイの魔法で回復したと思われたが、やはり何か、恐ろしいものだとレイスは思った。

体を起こすが、幸か不幸か部屋には人がいなかった。

（相変わらず広い部屋やのぉ…）

驚きはしないものの、半ばうんざりという感じで客間と呼ばれる部屋を見渡した。

元の世界の自分の家もかなり広かつたつもりだが、ここにいるときは部屋が自慢でもなんでもなく感じてしまう。

高い天井、アイボリーの壁紙。窓には柔らかな日差しが差し込み、外の木々が葉の影を部屋の床に落としている。その床には、絨毯が惜しげもなく敷かれていて、その感触は芝生のように柔らかでやさしい。

靴で絨毯を踏む日常を送つていなかつたため、悪いことではないと分かつていても申し訳ない気持ちが消えなかつた覚えがある。

そして、この城のすごいところは、それらのすべてから高級感が漂い、埃や塵がない事だ。

とにかくもこちらに来た目的を果たす為にレイスはベッドから降りようとした。そのときになつて、ベッドの横に靴が数足そろえてあるのに気がついた。微妙にサイズが違うようで、合つものを履けといふことだと理解する。

靴を選ぶと絨毯を踏み歩き、棚のガラス扉を鏡代わりに自分の姿を確認してみる。白いシャツと濃い青の布のズボンを履いていた。こ

ちらの人間がよく着ているゲーム世界のような服装を着せられてい
ないのはありがたかった。

そして、半そでを着ている自分に違和感を覚える。

元の世界では長袖ばかりだった。

腕を返してその理由があつた手首辺りを見おろす。

「…

魔法は外側の傷をすべて癒していた。

傷のなくなつた箇所にそつと触れてみる。

喜んでもいいはずなのに、嬉しさはこみ上げてこなかつた。逆にあ
がつてくる気持ちは、違和感ばかりだ。

見える傷がないのが、不安を煽つてしまつ。

「…いやいや、ここまで来てそれはないやろ…」

こんな現実味のない世界にきてまで、現実に襲われるなんて。

湧き上がる感覚を押し込めて、苦笑いする。この感覚を抑えるため
に一番効果があるのは、自分を心配してくれる友人を思い出す事だ。
自分が傷つくと悲しみ、怒つてくれる相手を思い出して、風来は深
呼吸をすると要らない気持ちを振り落つた。

癖で首もとのボタンを2つほどはずしてから、レイスは廊下に出
た。一度来て見ているとは言え、磨かれた床や、豪華な額に入つた
絵画などに目が奪われる。元の世界のテレビ番組で見た、海外の歴
史的建造物などを髪^{ほつ}髪^{ふつ}とさせる城だ。それらが目新しい為、しばらく
長い廊下を歩いていたが、数分もするとソルの居る場所の検討も
付かないことに気が付いた。彷徨うように歩いていたところで出会
った女官にソルの部屋を教えてもらい、案内までしてもらつて、よ
うやく部屋の前に到着する。ノックをして入室許可の声が届くと、
ドアを開け踏み入る。

「広つ・・・！」

ドアを開いた瞬間、レイスは思わずそう言葉にした。テレビで見た
ことがあるホテルの最高の部屋・・・いや、それよりもっと広いだ

ろう部屋がそこにあつた。明らかに一人で使うには広すぎるリビングルームの大きいソファに、ちゃんと金髪頭のソルが座っている。その金髪頭がレイスを見上げて笑顔を見せた。

「レイス！ 来てくれたんだ！」

「来てくれたんだ！ やないわ！ このアホ！」

声をかけてきた笑顔に、眉間にしわを寄せたレイスは返事をした。

「まあまあ、そんな怒らないで。これ、見てよ…」

手招きされて、レイスは渋々テーブルへと歩み寄る。そんなレイスに差し出しだされた一冊の本は、ソルがこちらの世界に来た時から小脇に抱えていた『魔道の書』だった。辞書くらいの分厚さがあり、少し重い。

前回こちらの世界に来たときの記憶が正しければ、開いた1ページ目にしか文字が書かれていなかつたはずだ。そして、一文を読み上げると、実際に魔法が発動してしまつ。当時のソルが読み上げても、魔法とは呼べない程度のものしか出なかつたが、初めて魔法が発動した時は驚いて混乱したものだった。

その本をテーブルに広げて、少し得意げに話しだす。

「この本、魔法力が上がると次のページの文字が浮かび上がる仕組みになつてたんだ。最初はレベルの低い炎の魔法だけだつたけど、頑張つたおかげで、今、中レベルまで読めるようになつたんだぜ！」さすがはつい半年と少し前まではランドセルを背負つていた子供らしく、なんとも楽しそうに話をする。この2ヶ月足らずでソルはレイスから見れば、非現実的すぎる世界にかなりなじんで居るようだ。

「それからさ…」

「ちょっと待て。別にそんな話をしに来たわけぢやないんや」

「…」

2ヶ月、新発見が多くて話す事が沢山ある様子のソルの言葉を、レイスが途中で断ち切つた。ソルが敏感に空気の変化を感じ取つて、言葉を止める。

「回りくどいのは苦手や 直球で聞くで。なんで2ヶ月前、一緒に

もどらんかつたんや？もとの世界では中学生が行方不明やつて大騒

ぎやで

「・・・帰りたく、なかつたんだ」

「お前、あの時全員一致で帰るつて言つたやろ？」

「帰りたくなかったんだ！」

レイスの言葉にソルが叫びかえした。予想外の強い反論に少し驚いてしまつたが、なるべく落ち着いて次の言葉を探す。

「お前、家族も居るやろ？ 今頃心配してるので」

「心配なんかしてないよ。母さんも父さんも仕事で忙しいし、オレはただの飾りなんだから！ 有名な学校に入つて、優秀な成績で進んで・・・礼儀正しくして、親の言つままの将来のために生きて・・・！ そんな勝手な親の元に帰りたく無かつたんだ！ あんな親、要らない・・・だつたらいつそこつちで生活してた方が・・・つー」

そこでソルが肩を竦めて言葉を止めたのは、レイスが拳でテーブルを殴りつけたからだつた。

静まり返つた部屋の時間を、レイスの呟きが再び動かす。

「お前がこんな子供や無かつたら、マジで殴れるのに・・・」
レイスは小さく震えた声でつぶやき、拳をやり場なく左の手の平に収めた。少しおびえてしまつたソルの様子に気づきもしないで言葉を続ける。

「親が居るだけ、有難いと思え」

「・・・え？」

「オレは、お前よりもっと小さじこじろに両親を「くしたんや。だから、お前みたいな奴を見ると、心底腹が立つー」

「・・・」

「どうせ、なんも意思伝えもせんで愚痴口いつてるんやろ？ なんでもつと親と分かり合おうとせんのや？ 嫌なら嫌やつて言えればいいやろ！ それに大体、親が子供のために生きるつて、誰が決めたんや？ 子供が親のために生きて、それはそんなに不幸な事か？！」

「・・・」

思つたことも無い考えだつた。その言葉にソルは驚いたが、それでも、固まつてしまつてゐる心はそう簡単に違つ感覺に塗り替えられたりしない。うつむき、唇を噛んだら、自分の想いが否定されてしまつたことに腹が立ち始める。

「親が居るのにどの行事にも出てもらえないくて、帰つても誰も居ないなんて寂しい思い、知らないでしょ？ 帰つてくる日を楽しみにしてたのに、話す事も何度も何度も考えて待つっていたのに・・・仕事であつという間に打ち消し。そのショックを分かる？！」

「だけど帰つてくるんやろ？ やつと帰つてきたのに、お前が居なくて親はどう思う？ 親もお前と同じ気持ちかもしれんやろ？ ・・・確認した事ないんやろ、親の気持ちなんて。お前はまだ確認できるんや、幸せやんけ！」

迎えてくれる場所があるのに帰りたくないなんてふざけるな！

そう叫んでやりたかつたが、ソルが自分より年下だという事がそれをさせなかつた。そして、その頃になるとソルが少し怯えててしまつているのにも、レイスは気がついていた。

押し黙つてしまつたソルは、今、おそらく必死に涙を堪えている。自分より大きなものに怒鳴られて怖い感覺は、痛いほどレイスには分かつてしまつ。

「・・・あくまで、俺の考え方から。お前がどうするかは自由やけど」そう言って立ち上がると、レイスは窓を開け放つた。秋の少し冷ややかな風が部屋に吹き込んでくる。けんそう喧騒を含まないこぢらの世界の風は、とても穏やかだつた。部屋の中の重くなつてゐた空氣も、吹き込む風に流されていく。

振り返つて窓辺に凭もたれてソルを見る。

孤独といつ点では、ソルとレイスはとても似ていた。ほしい言葉も、期待してゐる気持ちも分かる。

「俺はお前迎えに来たんや。ソル、一緒に帰るつや

言われた言葉にソルの表情が驚いて、その後とても嬉しそうな笑顔を見せた。

あきらめていた期待が、ソルの中で実った瞬間だった。

「…「ん」

小さな声で返事をして頷いたソルに安堵する。他人に対して笑顔を見せられる、期待を持てるだけ、ソルはまだ大丈夫だ。後はスイに元の世界に送つてもらえばすべて片付く。

そう思つてほつとした次の瞬間に、それらは一掃された。部屋中が異様な空氣に包まれて、ビリビリと建物が軋むような音が響くと、部屋が小刻みに振動し揺れ始めたのだ。

まだ実力が浅いとはいえ、魔法力を持つソルが青ざめて辺りを見回した。

「・・・なんだよ、この「魔法力・・・!」?

おぞましい空氣に圧倒されながらも、レイスは思い出していた。石の城の最上階で出会った人物を。

ソルとレイス（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

一度UPボタン押したら、タイム何とかエラーで全部消えてびっくりしました；

別作品「encounter」を読んでいる方とそうでない方では全く感じ方が違うお話だらうと思われます。読んでいない方にとつて、レイスの過去つて謎だらうなど。

ちなみに、昔はGAMEが先行公開、encounterが後公開でした。

作者も驚きましたが、レイスがencounterの頃より成長していました（笑）

オープニング終了

『お前に決めた』

突如割つて入つた第三の声に驚いた時には、レイスの首が後ろからつかまれていた。

「レイス！」

ソファから立ち上がりソルは叫んだ。そして、その手がどこから来ているのかを確認して、ゾッとする。窓の外の空間にヒビが入り、その裂け目から手が出ていたのだ。

「お前に決めた。より深い負の力がお前の中に見えた」

窓の外から低い声が聞こえた。腕に窓から引き出されそうになり、レイスは窓枠に手をかけた。引き出そうとする腕の強さは半端なく、指先が首を圧迫する。首に触れている感覚から、手の平、指があり、大きい人型の手だという事は分かる。爪が皮膚に食い込んで、独特の刺すような痛みが首に走った。

「・・・・・」

大して動かない首を少しだけ捻つてみるが、それだけではもちろん離してくれない。首を持つ手を解きに動きたいが、窓枠から片手でも離せば、それこそ力負けしてしまう。

こう着状態が続くが、その場に耐えているにも、強くなる痛みに堪えるにも、限界が近づいていた。何より、異常に大きな手はレイスの首を完全に掴んでいたため、呼吸がままならない。その事がレイスを一番追い詰めていた。

そんな状況の中、レイスは背中に強い風を感じた。それは、狭い範囲で下から上に向かつて起こった、自然ではありえない風だった。それと同時に手から開放されたレイスは、反動で数歩、窓から離れてから、居た場所を振り返った。自分の身に何が起こっていたのか、そこで初めて視覚を使って確認する。

空間の裂け目から出ていた腕は浅黒く手の甲に深紅の宝石が埋まっていた。さらに、明らかに人間としては大きすぎる手で、それに掴まれていたことを認識し背筋を凍らせる。鈍い痛みを感じ、掴まれていた首に手を触れると、爪の食い込んでいた辺りから血の感触を確認できた。

空間の裂け目から現れた巨大な手は、風により裂傷を負っていた。大量の流血に、ソルは直視できずに顔を背けた。

間もなく手が空間の裂け目に消える。その時、ドアが開けられて、スイが部屋に入ってきた。迷うことなく空間の裂け目に向け、魔法を放つ。

白い光が一筋、スイの手の平から打ち放たれて、まっすぐに空間の裂け目を射抜いた。もう完全に手が入り込んだ裂け目から鮮血が噴出した。もともと閉じ始めていた空間の裂け目はすぐに消え、普段の風景が戻つたその場所に、クレージュが姿を見せた。

窓から見える空中に、風を操り浮いている。漫画の世界でもなく、映画の世界でもなく、現実に目の前で行われていることが最早信じられない。

だが、緊迫した時間は突き進む。

「囮だ！」

叫びながらクレージュが窓から部屋に飛び込む。同時に、部屋に居たソルとレイスもその気配に気が付き、スイのほうに視線を向けた。先ほどまで人影など無かつたスイの後ろに、黒い法衣をまとつた男が立つていた。

「プレイジ・・・！」

クレージュがうめく様に名を呼び、召喚した剣を手に持つたが、スイの首にナイフを付けられてしまい、そこから先の動きが封じられてしまう。

（プレイジ・・・？ 僕が見たのはもつと子供・・・）

レイスは驚いて相手を凝視した。状況的に、クレージュはスイにナ

イフを突きつけていいる男がプレイジだと言つてゐる。確か、つい先日レイスが見たプレイジは、小学生ほどの子供だつたはずなのだ。なのに、そこに居るのは20歳前後の男にしか見えない。

細身の長身、紫黒色の長髪と同色の切れ長の瞳。持つてゐる存在感が、引きずり込まれそうな重さをかもし出していた。

一目見るとすぐには忘れられそうにもない、強烈な存在感。そのプレイジの視線がレイスを捕らえた。

「少しばまともに物事が見れるようになつたようだな。かけていた低級の幻の魔法は効かなくなつたか」

「幻・・・?」

「…ああ、違うな。さすがは最高位の結界がめぐらされた城というわけか」

プレイジが愉しそうに笑つた。その表情から発せられる空氣は、石の城の暗がりの中で感じ取つた空氣と同じだつた。

いつから幻などを見せられていたのか? 愕然とするレイスの髪が、ふわりと風に吹かれた。それに気が付いた次の瞬間、強い風が巻き起こる。強風の元に視線を向けると、そこにはクレージュの姿があつた。いつもの笑顔のかけらも見られないクレージュの表情を見て、プレイジが魔法力を高め始めた。

本来なら魔法力を持たないレイスには、その力は見えない。だが、あまりに強力な魔法力はレイスの視界にさえ、しつかりと現れていった。

プレイジの周りに、黒い魔法力がオーラのように見える。それは、空氣を伝い肌を震わせる。

「そう怒るなよ、風竜の騎士。用事が済んだらすぐに帰つてやるさ」「スイから離れろ」

「慌てるな」

ニヤリと笑つたプレイジの魔法力はスイに刃を向けていいるナイフに集中し始める。それを感じ取つて、スイが口を開いた。

「魔法封じでもするつもり? 私も甘く見られたものね。 そのナ

イフを突き立てたとき、貴方にも私の魔法力が伝えられる事は知っているでしょう？」

「一つも焦りを見せないスイに、同じく焦りのかけらも見せないプレイジがその言葉をせせら笑う。

「確かに、これをお前に突き立てれば俺にもお前の魔法封じがまとわり着くんだろうな。だが、今の弱りきった魔法力では、俺に押し負けるくらい理解しているんだろう？」

「さあ、やつてみなければわからないわ。それに、どちらにしろ

あなたの魔法力は明らかに低下する。その後は・・・」

そういつたスイは一瞬クレージュに視線を向けた。その視線の意思を受け取り、クレージュが何か言つより早く、スイは行動を起こした。

「?！」

レイスとソルは驚きで声も出なかつた。スイは突きつけられたナイフをに手を伸ばすと、自分の胸の中心につき立てたのだ。

時が止まつたように静まり返る中、白い魔法力と、黒い魔法力が互いに、火花を散らし始めた。互いが繋がるナイフの表面で、大気の中で、触れる場所全てで音もない魔法力の戦闘が展開される。部屋中の空気がその対立に振動し、レイスやソルの肌を直接震えさせ、部屋中を揺らした。

その威圧感から恐ろしく長く感じたが、実際は僅か数秒の出来事。

やがて魔法封じのつなぎに使われたナイフが鞘と刃の付け根で真つ二つに割れた。それは魔法力の戦闘が終了した合図だった。

柔らかな絨毯の上にスイが倒れこむ。

ほぼ同時にクレージュの剣がプレイジの左胸を貫いていた。

プレイジとクレージュの視線が交わる。ここで、倒れるはずである

プレイジが倒れない。その表情が、勝利を確信したよつに口角を上げた。

「ざんねん。オレの心臓は、右なんだ」

笑つたその表情が、一気に苦痛の顔に変わつたのは直後だった。プレイジの背後から、右胸をもう一本の剣が貫いたのだ。

「来るのを待つていたよ、プレイジ。お前は、力を過信しそぎた」
プレイジの背後から、レオンハルトの声が聞こえた。

「終わりだ」

レオンハルトの持つ、黄金色の大剣の周りに小さく稻妻が走るのが見えた刹那、クレージュがスイを抱え、素早くそこから身を退く。それと同時に、窓からまっすぐ大剣めがけて雷光が走つた。レイスもソルも、そのまぶしさに目を開けて居られなかつた。地響きを伴つた音と光が収まると、レオンハルトがゆっくりと剣を引き抜いた。

プレイジはその身がこげる異臭を立てながら、膝から崩れる。

終結した？

少し開いた視界で、状況を見たレイスはそう思つた。いや、誰もが思つた直後、プレイジの声が木霊した。

・ 契約を結びし導きのナイフよ、我が魔法力と共に鳴し封じし魔法力を散らせ！・

「・・・！？」

「しまつた！」

プレイジの言葉が終わると同時に、スイの体に残つたナイフの刃から白い球体が6個浮かび上がつた。それらは高速の光となり、散り散りに壁を通り抜け、窓を潜り抜けて遙か彼方に散らばつていつた。

それを見届け、プレイジの体は完全に崩れ去った。
その表情は、最後の最後まで、口元に歪な笑みを浮かべたままだつ
た。

オープニング終了（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

状況を説明できているだらうか…この章だけは何度読んでも、何度修正しても、それを心配しながらHPに至ります。

修正しきてわけ分からなくなります（汗）

とりあえず、10話目にしてオープニング終了、です。

ここから、長い長い異世界生活が始まります…。

この展開、脳内でプレイジからいつも苦情がきます。
どうせ殺され役なら、せめてもう少し遊びたかったと…

GAME START

プレイイジが死んでから一週間とちよつとが経過した。

オレはまだあの世界に居る。

PCのゲームソフトの中…もとい、剣と魔法がはびこるとしてもリアルな異世界。

プレイイジの死は、俺にとつて、ものすごく衝撃的な事件やつた。それはオレと同室にしてほしいうて言って聞かなかつたソルも同じらしい。怖くてしようがないんやとか。

こんなとき、子供つてのは楽やよな。…正直ちょっとうらやましい。

あれから数日は残像が記憶から消えなくて寝付けんかつたし。

横でソルは思いつきり寝てたけど。

スカイゲートの城は、このごろバタバタ忙しく人が動き回つてゐる。そして、今夜は夕刻からさらに騒がしい。

プレイイジを倒した祝いの宴が、スカイゲートで開かれてるからや。レオンハルトが言い出したわけやないらしいけど、プレイイジを倒した事でいろんな国が盛り上がり過ぎたらしい。どこかで歯止めをかけるためにもこういう機会が必須になつてしまつたとか。

そういうば、一つ一つの国や貴族が何ヶ月、何年に渡つて何か送つてきたりするよりはマシかつて、兵士が話してゐるのを小耳に挟んだ事があつた。

世界を統一する城、その王様つていうのも、結構大変なんかもな。一応、俺にも正装が用意された。とりあえず着て、会場にまぎれてみたけど、じつじつ社交辞令の飛び交う大人の世界は、正直、大の苦手や。

ソルのやつは、さつさと城内のどつかに消えていつたし、レオンハルトは次々話しかけられてて、取り付く島もあらへん。

つまらんから、適当な酒と果物のジュース、氷、グラスを押借して、オレはパーティ会場を抜け出した。

あれから、一つも顔を上げへんあいつにも、酒を飲ませてやろうと思つたから。

白い髪、白い肌、白い法衣。唯一、僅かに灰色の瞳は開かれる事は無く。

魔法力の大半を失つてしまつた最高位の魔法使いは、眠つていた。電気もつけず、部屋の中、ベッドの横で絨毯に座り込み、クレージュはその横顔をただ、見つめていた。

真つ暗な部屋の中では、あの淡い水色の髪と瞳は、光を浴びずに黒一色で、終始笑顔が絶えなかつた風竜の騎士とは別人のよう見え

る。

彼は悔いていた。

ブレイジとの戦いのとき、スイと目が合つたとき、彼女が出ようとしていた行動を読めていた。それなのに、静止の言葉さえも間に合はず、行動を起こしてからも、静止に入れなかつた自分を。

どうして、静止できなかつたのか？

あのときの自分の中には、答えがあつた。スイがブレイジの魔法封じを始めた瞬間、止めに入ろうとする自分と、それを阻止する自分があつた。

魔法封じでブレイジの魔法力が弱れば、必ず倒せるじゃないか。

スイが魔法封じをされても、ブレイジがが死ねば、奴の魔法効力はなくなるから、スイの魔法力はすぐに戻る。ほんの数分だけ、スイが魔法を封じられるだけ。

スイとブレイジ討伐を秤にかけた自分。まさか、死後も効力の残る魔法分散をされるとは思つていなかつた、浅はかな自分。どこまで、違法とされた魔法を習得していたのか。

他人の魔法力を分散させる魔法は、もう知る人間も少ないというのに。

だが、だからといって自分がその魔法を知らなかつたわけではない。そのことがクレージュを更に悔やませていた。

結果として、プレイジに一步先をとられて戦いは終わってしまった。スイの魔法力は、今、世界中に球体の固体となつてちらばつてしまつた。それが、どこに行つてしまつたかは、スカイゲートが国力を上げて調査中だつたが、まだ良い情報は入つてこない。自分には魔法力のありかを探知する能力はない。あまりにも無力だつた。

クレージュにとってスイが自分の視界で動かなくなる事など、予想もつかない事だつた。

それは、考えもつかないほど、ありえない事だつたからだ。

「オレは・・・スイが居るから、こっちの人間になつたのに・・・つぶやいて、この現実は自分のせいじゃないかとうなだれる。

スイがもし、自分より先に死んでしまうような事があつたら、そのときは精霊の意思に反していようと、輪廻に乗れなかろうと、自分も命を落とそうとまで思つていた。

「・・・この状態は、どうすればいい・・・？」

返事の来るはずもない質問をして、クレージュはベッドの端に顔をうずめた。

レイスがドアを開けると真つ暗な部屋に光の道が一本出来上がつた。何も聞かずに電気をつけると、クレージュが口を開く。

「何をしに来た？」

「何つて、入つたらあかんのか？」

そういうながら、両手に持つたドリンク一式の入つた木箱を床に置く。氷と酒をグラスに入れて、果物のジュースで割り、簡単なカクテルを作るとクレージュに差し出す。

受け取つてもらえないので絨毯の上に置き、自分の分を作り始める。

「それ、お前の分な」

「こらない」

瞬間で断りを入れられるが、それはなんとなく分かつてていたので軽く流す。

「そう言わんと飲めよ。せっかく人が入れたんや。飲むのが礼儀やで」

「頼んでないが」

「頼まれた覚えもないし。まあ美味しいから、俺の作る酒。だまされたと思って飲めて」

そのレイスの軽い口調に、クレージュが少し眉を寄せた。

「・・・お前、かなり飲んでるな・・・?」

「ん? んー・・・まあ、そうやな。ストレートの酒はもういらん。つてぐらいは飲んでる」

言いつつ、レイスは自分のグラスの中身を半分ぐらじまで減らして言葉を続ける。

「あのせ、スイがこいつたのつて、半分ぐらいは俺のせいなんやろ?」

「…は?」

「オレを移動させるのつて、かなり高度な魔法で、さらに回復もかなり大変やつたそやん? すごい負担やねんてな。スイがプレイジなんかに負けてしまつたのはお前のせいだつて、スイのファンらしき兵士に言われたわ。オレ、そんなん全然知らんつてな」

早口でしゃべつて、笑つた後、一呼吸おいてクレージュに問い合わせる。

「いつまでへこんでる気や?」

「お前に言われる筋合いはない」

「それが大いに関係ありなんや。聞くところによると、オレとソルを元の世界に帰せるのつて、スイだけじゃないらしいやん?」

「転移魔法の事か? 確かに、オレとレオンにも出来ない事は無いけど・・・。命の保障は出来ないよ」

「・・・え?」

「転移魔法つてのはものすごい技術と精神力と集中力と魔法力と…早い話が総合的に高度な魔法なんだ。スイほど確実な転移魔法が出来る人間を俺は知らない。オレとレオンは、スイほど細かい魔法の構成は出来ないんだ」

「・・・え？ ちょっと待て。それはつまり、オレとソルは帰られへんって事か？ それは困る！」

驚いたレイスが直球の言葉を投げかけた。それは、クレージュの行き場のない苛立ちに火をつけてしまった。明らかに語調を強めた言葉が返ってくる。

「困る？ 自分から来ておいて勝手な事ばかり言うなよ」

「勝手か？ 大体、プレイジみたいな奴をいつまでも野放しにしておいた、こっちの世界が悪いんやろ？」

「一度、スイに帰してもらつたんだろう！？ どうしてまた来たんだ！」

「それはソルを連れ戻す為に・・・！」

「聞けばあいつは勝手にこっちに残つたんだろう！ それをお前がどうして、お前の意思で連れ戻す事が出来るんだ！？」

「連れ戻す事が道理やろう！？ オレ等の世界で行方不明扱いされてるあいつは、このままやつたらあかんはずや！」

「ダメだと気が付いたら自分から帰るだろう？ それをワザワザこつちに飛んできて、プレイジに殺されかけて、拳句にスイに高度な魔法を何度も使わせて・・・！ 大体飛び降りるとか、どういう考えしてんるんだ、お前！？ その後動けなくなることくらい明白だろう！」

「結果的に、上手く逃げれたやろ？！」

「動けなくなつてスイに助けてもらつた、が事実だろう！ 逃げれてなんてないよ、お前は！ あの時・・・お前が森に飛び降りたとき！ 僕が上空でプレイジに睨みをきかせてなかつたら、お前は森の一部と共に、魔法で欠片も残つてなかつたんだからな！」

「・・・？！」

いつの間にやら立ち上がりて今にも掴み合いそうになつていた2人は、事実を聞かされたレイスの引きで、ほんの少し間を作つた。ストンと絨毯に座りなおして、クレージュが口を開く。

「・・・俺は、何度も・・・そう、何度も何度もプレイジの居場所に行つてたんだ。 だけど、オレが一人で動いて何かをする事は、レオンの判断が遅かつたと回りに思わせてしまう。 オレがそこで死んでも、レオンやスイが非難されるかも知れなかつた。 だけど、こんな結果になるんなら、全てを捨ててもプレイジを殺せばよかつた！」

クレージュは左手で絨毯を一度だけ殴りつけた。しつかりとした厚手の絨毯なのに、かなりの力で殴つたらしく、その下の硬い床が鈍い音を響かせた。

「スイが死んだなら、オレも死ねる。 だけど、この状況は・・・スイはただ眠つているだけで、生きている。話せない、笑わない、怒らない、動かない・・・！ オレが現場に居合わせたのに！」

絨毯の上のこぶしが、更に固く握られた。

そんなクレージュの様子を一部始終を見てしまつたレイスは、他人に対しての思いの強さに、驚いていた。

元居た世界では、こんなにも他人のことを思つ人間が居ただろうか？ 大抵の人間には、そんな物見たことがない。

自分も含めてだ。 友情とか、愛情とか、眞面目に考える方が毛嫌いされる世の中で、そんな事をいう奴は、ほとんどが集団から突き放されつた。

自分も、周りがそういう流れになると体裁だけでもと、それに習つ。それが、生きる術なのだと認識していた。ここは、元居た世界なら、笑うところだ。 相手が強かつたんだからとか、適当な、もつともらしいことを並べて、責任を緩和する状況だ。

なのに、目の前で他人を守れなかつた事を深く悔いでいるクレージュを見て、そんな言葉が口に出来ない自分が居た。

かけていい言葉が分からぬ。

戸惑つていると、うつむいたままのクレージュの手が酒瓶に伸びた。握つたと思うと、蓋を開け、ストレートでそのまま飲みだす。

「！？ お、おいおいおいおい！ それ直飲みは幾らなんでもやばいって……！」

あせつたレイスの静止の言葉など届かず、三分の一ほど一気に飲み終えたクレージュが、口元からこぼれた酒を袖口でふき取りながらレイスをにらみ見る。

「こんな奴に誰にも見せてない言葉を吐いてしまった事にも腹が立つてきた。お前が酒持つてきたんだから、付き合えよ」

「えええ・・・マジでえ？ オレちよつと酔い覚めてきたんやけど・・・」

そんな言い訳は聞くはずも無く、クレージュのヤケ酒が始まり、それに付き合つレイスは、元の世界では考えられない量を飲む事となつた。酒が切れると取りに行く事を繰り返し、2人はそこで飲み続けた。

その翌朝、二日酔いのレイスと、ケロリとしているクレージュと、寝不足のソルは、えっけん謁見の間のレオンハルトの前に集結した。

「クレージュはもう聞いてると思うけど、スイの魔法力のある場所が割り出せたんだ。探しに行つて欲しいんだが？」

レオンハルトの言葉にクレージュが不満げに答える。

「オレに頼むのは分かるけど、オプションの2人はどうして？」

「ソルが昨日オレに言って來たんだ。スイの回復のために何か手伝えたら、つて。で、ソルが行くなら、レイスも行くんだろう？」

「・・・そうみたいや」

気持ち悪いのに耐えながら、そう答えて、横に立つソルを見る。視線を見返してきたソルが、なぜか得意げな笑顔を返してきた。投げやりに答えたレイスに、クレージュがますます不安気に言葉を口にする。

「オレだけで行つた方が早いんじゃ・・・？」

言葉を聞いたレオンハルトが、満面の笑みを浮かべる。

「しつかりリードをつけてないと、帰つてこないかも知れないからね」

いくらなんでもスイの事が関わっているのに、どこかに立ち寄るなどするわけがない。しかし、放浪癖の話をされると、普段の行いを否定できないため、クレージュは言い返せない。そのことを把握してのレオンハルトの言葉に、勝てないと踏んだクレージュの抵抗はこれで終了した。

「そういうことで、準備が出来次第、出発してくれ。地図は後でクレージュの部屋に届けさせるよ」

「了解ー」

ため息交じりの返事をしたら、三人は謁見の間を後にした。

数時間後、出かける準備を整えて、ソルとレイスは城門に来ていた。二人の姿はお互いが見慣れてしまった魔法使いの法衣姿と、盗賊衣装、に似せた布の服だった。

よく考えれば当たり前である。一国の城に盗賊の衣など存在するものではない。

城内のコーディネーター達が色々と頑張つてくれたようだが、もともと上品な服を扱う職人達のためか、一人の想像する『盗賊』の衣装には何かが足りない。

そんな小奇麗な盗賊衣装だった。

どうせならもつとジャラジャラと何かつけたほうが様になるんじやないかと話す一人の後ろに、軽装備ながら鎧を身に付けたクレージュが現れる。

「徒歩で往来するつてのに宝飾着てどうするんだ…。ま、なるべく、足手まいにならないようにしてくれよ」

言い放つたクレージュにソルがムツとしているが、レイスが一番に城門を潜り抜けた。

「とりあえず、オレとソルにとつては元々ゲーム始めるつもりやつ

た訳やし。 いこうなつたからには楽しませてもらひつ事にしたで。

G

A M E S T A R T や「

レイスに続いてソルが駆け出し、 納得いかない表情のクレージュが

最後に続いた。

GAME START（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

ちょっと小話です。

この一話、ソルがどうして寝不足になっていたのか、気になりました。

作者は気になつたので、脳内でソルに聞いて見ました。
作者「ソルはどうして、パーティの翌日、寝不足だったのか教えて？」

ソル「見張りの兵士やお手伝いさん?の控え室で、夜中までボードゲームとかして遊んでたんだ。それでだよ。町の話とかも沢山聞いたよーw」

だそうです。それはそれで、ワイワイと楽しそうだなー。
いつか小話で書けたらいいなあーと思つてしましましたw

最初に割り出せた場所は山脈が連なる方向。城から半日ほど歩いた先の山々は、昔は沢山の人が商用のために使っていたため、一応、山道がある。しかし、昨今は魔物が頻繁に出没するようになつたため、人通りは無くなつてしまつていた。草は生え放題で、枝は突き出し放題。そんな荒れた山道を歩きながら、クレージュは一人を伺い見る。

昨夜飲み明かして気分が悪そうな方は、こちらの世界ではあまり見ない黒髪、黒い瞳で、年齢は十六歳だとか。「こちやこちや文句をよく言つてはいるが、結局のところ、盗賊の衣が動きやすいらしくてそれを纏つて軽快に歩を進めている。その後ろで、一冊の本を持つて、ヒヨコヒヨコとついて歩いてるのがソル。金髪の髪に、黒い瞳。来た当初から魔法使いの法衣を着ていたので、職業は魔法使いらしい。年齢は十三歳、まだまだ幼い顔をしている。魔法を少し覚えたらしいが、それは本を開いてやつとのレベル。正直、どちらも全然、頼りになりそうには見えない。

そんな二人に、呆れた目を向けて声をかける。

「ところでさ、なにしてんの？ おまえら」

「何つて、お菓子食べてるんや。向こうのやつ、来るとき鞄に詰めてたらもつてこれたんや。食う？」

「いや、あのさ・・・ハイキングじゃないんだから。お菓子とか食べるのやめてくれないか？」

「気持ち悪くて朝食べてないんや。腹へつてきてさ・・・」

「いいから、しまえ。何かあつたときに動けないだろ」

「・・・誰のヤケ酒のせいで朝食えなかつたと思つてるねん・・・」
ブツブツ言いながらも手に持つていたラムネ菓子をしまうレイスを見届けて、ソルに目を向ける。

「オレのは、片せないじやん」

そう言つたソルがくわえているのは棒つきの飴だった。クレージュはイライラするのを抑えながらソルに尋ねる。

「お前は戦闘になつた時、唯一できることはなんだ？」

「・・・」

「・・・」

「・・・まほり」

すばりしく考へる間を作つて答えたソルの言葉は、飴のせいでちやんと発声できていない。

「おまえはまだ魔法書の文を読まないと発動できなんだろう？　その口に飴をくわえてどうする？」

「・・・でも、食ってる最中・・・」

「捨てる」

「えー、好きな味なんだけどなあ・・・」

「・・・」

「・・・わ、わかつたよ。怒らないで。なるべく早く噛める様に努力するから・・・」

「まつたぐ。俺一人なら『風竜』^{フウ}に乗つてこに来るのもあつとう間だつたつて言つのに・・・」

クレージュがぼやいた言葉に反応して、ソルが早足で駆け寄る。

「『フウ』つて、帰つてきたときの？　あの、ドラゴン？」

「見てたのか。あれは、風の竜だ」

「乗れるの？　なあ？　俺も乗れる？　乗つてこいつよ？　乗りたい」

「あれは主に戦闘用の竜だ。それに、乗り物じゃないからな」

「・・・でも、さつき自分ならつて・・・」

「あれは、俺の竜。俺がどう使おうと勝手なの。分かつたら、さつせと飴を噛む」

「チヒッ。けち」

半分すねたソルに変わつて、レイスがクレージュに視線を向けた。

自分の目線にちよつどのとじりに見える淡い水色の髪を見て不思議そうに尋ねる。

「お前の髪の色って、生まれつき？」

聞かれた言葉を聞き流すように、一瞬前から風が吹いた。まるで、操られたように吹いた風は、スカイゲートの風竜の騎士を呼び戻したようだつた。端整というには少し幼い顔立ちの好青年が、風が過ぎ去つた後、緩んだ笑顔を作る。

「どうして？」

「城の他の人は金髪とか茶系やつたし、俺等の所では皆黒が基本やから・・・」

言われて、クレージュはソルを見る。

「あれは？」

「あれは、染めてるんや。あんなに金髪はめつたにないわ

「・・・ふうん。皆黒なんだ？」

「そ。俺の髪が基本」

「そか。・・・俺も元は黒かつたよ。昔の話だけどね。風の精霊の力を授かつたら、こんな色になつたんだ」

「レオンハルトの髪色も、似たような感じやんな？ むこひのほつがちょっと青いか・・・？」

「お前、仮にも王を目の前で呼び捨てに・・・・・・ちょっと、止まれ」

会話の途中、不意に真剣な目になつて、クレージュが一人を静止する。

何かあつたのかと聞こいつとしたソルの言葉も、眼前に手を差し出して静止されてしまった。クレージュは風が葉を鳴らす中、耳を澄ました。

「・・・何か、来る」

3秒ほど間をおいた後、まだ遠くの空に小さな影が見えた。それが、巨大な鷲のような鳥だと認識できた頃には、三人めがけ、降り落ちるよう猛スピードで襲い掛かつて来ていた。慌てる一人を尻目にクレージュは左手に剣を召喚し、大鷲めがけて上空に飛び上がつた。人間のものとは思えない跳躍力で飛んだクレージュは上空で大

鷲の首を両断した。

大鷲は地面に落ちる前に腐食し、その身を失った。それを見あげていたソルの腰に何かが巻きつく。

「なに……？」

腰に三重ほど巻きついたのは植物の薦だつた。ただし、巨大に育ち、魔物と化した植物だ。巨大な花の薦を頂点につけた植物は、同じく巨大な葉を手のように何枚も揺らしながら、周囲の木々をなぎ倒して、姿を現した。捕らえたソルを、空高くに引き上げる。

（なんて大きさや……）

レイスが薦部分を見上げると、空が後ろに見えるほど大きな植物。その顔と言える分部の薦からは刺々しい不ぞろいな歯を覗かせている。そこから垂れる濁つた大きな水滴は、触れた地面の雑草たちを溶かしていく。

大鷲を倒しに離れたクレージュとの距離は、少しだつたが、とても遠くて、植物がレイスに向かつて猛スピードで襲い掛かつてくる事を阻止するのは不可能だつた。

「・・・！」

一気に距離を詰められて、手のように葉が振られる。レイスはそれを紙一重でかわすことが出来たが、かわした先にも葉の起こした風圧が届く。レイスの足が地面から離れ、軽々飛ばされ始めた。どこかに強打するしかなかつたレイスの背を、追いついたクレージュが受け止める。

「よく避けた」

軽く肩を叩かれたレイスは、体から緊張が解れて行くのを感じた。強風が正面から吹いたため、無意識に体を縮め、体の前で交差していた腕を解いた。そこでようやく風圧によつて手の甲に出来た一本の深い裂傷に気が付き、痛みを覚えた。そんなレイスの横をクレージュが走り抜ける。あつという間に巨大植物の前に行つたかと思うと、茎を蹴りながら花をのぼり、剣で斬りつけて行く。薦付近まで上がつたと思うと、茎を強く蹴り、ソルを捕らえている薦を断ち切

つた。

ソルを抱きかかえ、レイスの正面に着地すると、ソルの体から薦の先端をはずして呼吸を確認する。

「頼んだ」

無事を確認したソルをレイスに差し出して、レイスが受け取ると即座に魔物に向き直り、駆け出していく。そして、地面を強く蹴り、高く、魔物の上空まで跳躍すると、一瞬そこで、クレージュの体が滞空した。手に持っていた剣が消え、その手にランスが現れ握られる。刹那、クレージュの体が恐ろしいほど早く落下を初め、鈍い音の後に植物は真っ二つに裂け、腐食臭と共に消えてなくなつた。

（・・・すごい。 ホンマにすごい）

クレージュの動きに、ただ、レイスはそう思った。圧倒的な強さというものを、肌で感じたというのか、着地したクレージュが立ち上がるのを見たときに、全身が総毛立つた。

ランスを手から消した後、クレージュはレイスからソルを再度預かると、薦が撒きついていた箇所を確認するために服を捲りあげた。腹部が強打したように広範囲で赤黒く腫れていることがレイスからも見て取れた。この分だと、背中も同じ状況だと推測される。その箇所に手を添えるように触れて、クレージュが呟く。

「癌になつてるけど・・・大丈夫そうだな」

ソルは地面から急激に高く吊り上げられた為に、気を失つていただけのようだつた。呼吸も、とても穏やかに続いている。何度も幹部に触れてソルの様子を確認したクレージュは、ようやく肩の力を抜いた。

そんな様子を見ていたレイスは視界に光るものを見つけて、そちらへと歩み寄つた。見つけたものを拾い上げると、ソルを地面に寝かせたクレージュに声を掛ける。

「敵のおつた場所に、こんなもん見つけたけど？」

そういうて見せたレイスの手には、スイの魔法球が握られていた。

一つ目の魔法球（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

植物の魔物は、作者の中ではRPGで出てくる弱いボスキャラの基本イメージになっています。踏み台というかなんというか…（笑）魔法使いがとても強い人であれば、炎の魔法とか効果があるんでしょ、きっと。

芽生えた焦燥

戦闘が終わって数時間後、ソルは目を覚ました。

目が覚めて、見上げていた天井は三角だった。ビリヤード台の中のようだと、頭が理解した。

夜なのだと、肌が感じる。独特的の静けさが周囲を覆っていた。身を起こして、動かした体に痛みが走る。

「・・・痛・・・」

鈍痛を感じる腹部をさすっていると横から声がかかる。

「目覚めたんか？ 寝てた方がええで。癌になつてるから」

「癌・・・？」

「お前でつかい花の魔物の薦に巻きつかれとつたんや。覚えてるか？」

「・・・あんまり・・・」

聞かれて考えてみたが、そんな記憶はほとんど無いに等しい。記憶にあるのは、すごい速度で地面が離れて行つた事ぐらいだった。それが、吊り上げられたせいでとか、魔物のせいだと、理解する前には気を失つてしまつていた。

「・・・魔物、だつたんだ」

横で自分と同じ、携帯用の寝袋に体を預けているレイスをチラリと伺い見て、ソルは独り言とも取れる言葉を口にした。一瞬の間に、レイスの返事は無い。

「・・・怖くなかった？」

今度は確実に疑問文として成り立つ口調で聞かれた問いに、レイスは落ち着いて答えてくる。

「怖いっていうより、『驚いた』って言うほうがピッタリくるわ」鳥類の魔物が襲ってきた事、植物の魔物がとても巨大だった事、そして、それらをあつという間に寸断したクレージュの事も。レイスは恐怖するより先に、驚いていた。

そして、考えていた。

自分が初期から持つてている刃の大きなナイフで、どう戦うかを。恐怖の変わりに驚きの横にあったのは、戦闘意欲だった。

何も出来ずに終わつたけれど、長引けば何かしたかもしない。けれど、あの時、自分は敵の攻撃をかわすことが精一杯だったうえに、触れる事も無く、体は軽々飛ばされてしまつていった。背を支えてもらつて、クレージュに肩を軽く叩かれたのは、自分の体が震えていたのをクレージュが見抜いたからだ。まるで子供をあやすような行動に、自分でも気が付いていなかつた、極度の緊張と困惑が、ふと、解かれたのを思い出す。

「ねえ、クレージュは？」

戦いを思い返していたレイスの意識をソルの問いかけが呼び戻した。

「ああ。外にあるつて。そのうち寝るからほつといてくれつて言つてた」

「ふうん・・・。良くわかんない人だよね。冷たかったり、優しかったり・・・」

「会つてすぐの人間の何がわかるねん。つまらん事考えてんと早よ寝ろよ。日が昇つたら出発するらしいから」

「・・・うん」

促して、こちらに背を向けたレイスを見て、ソルも寝袋に身を預けた。

やはり疲れていたのだろう。しばらくして聞こえてきたソルの寝息を聞きながら、レイスはテントの布壁を見つめていた。

意識が張り詰めて、ひとつも眠れなかつた。

こちらに来たとき、泥の手を倒したときは、相手も小さかつたしナイフでも十二分だつた。だけど、大型の魔物が出たとき、自分のナイフはあまりに頼りなさすぎる。どう考へても、クレージュのように、敵に致命打を与えることは不可能だ。考へていくと、魔法が幾分使えるソルよりも役に立たない気がしてならない。足手まといと

言う事になる。

現実に居た『風来』もパソコンの中に居た『レイス』も、それは嫌いだった。自分が出来ない事があるのは気に喰わない。何でもそれなりに、器用にこなす。それこそが、自分の描く自分なのに……。

「・・・」

この世界で繰り広げられる事は、ただの喧嘩勝負じゃない。致命傷も受けてしまう戦いだ。

何か、決定的な・・・自分を確立する何かが欲しい。

外の風に吹かれて、テントの入口の布が少しだけ口を開いた。その先の焚き火の傍に、スカイゲートの城の竜騎士が見えた。

倒木を背もたれに、地面に座つて焚き火の色に煽られる横顔は、見た目、自分とほぼ変わらない年齢をしている。背も全然高くないし、体格も自分と大して変わらなく、別段がつちりしているわけでもない。普通にしていれば童顔なためか、そんなに強そうにも見えない。戦っている時と、今の彼はまるで別人のようだつた。雰囲気も何もかもが違う。今の和やかな空気は、嘘のように一瞬で消えうせて、戦闘の空気へと変わる。

そんなことが、こちらの世界では当たり前なのだろうか。

考えながら火の傍を見詰めていると、いつから視線に気がついたのだろうか、クレージュの顔がこちらを向いた。そして、手招きをする。

どうやら、こちらに来いといいたいらしい。

ソルを起こさないように、そつと寝袋から出ると、レイスはテントをしつかり閉めて焚き火の傍へと歩み寄つた。

ほんの少し、夜は冬の気配がする。

秋の夜風に、レイスは無意識に腕を擦りながら、クレージュに問い合わせた。

「・・・何か用か?」

「それは俺の台詞。ずっと見られてると気になるんだけど……座れば？」

視線で横の位置を進められて、レイスは少しだけ隙間を空けて、隣に腰を下ろした。焚き火から流れてくる空気が触れて、肌に熱が伝わる。

「で？ 僕に何か用？」

「用つて訳でもないけど……」

「ああ、それが見惚れた？」

「アホか……ああ、そうや。ソルが目覚ましたで」

「具合はどうだつた？」

「痛がつてたけど、吐いたりするようなことなかつたし、今まで寝てる。大丈夫そうや」

「そうか、よかつた。……それで？」

クレージュは会話を最初の問い掛けに戻した。それに対し、レイスは焚き火に視線を逃した。

「……別に」「よく避けたつて、俺、褒めたよな？」

同時に言われたクレージュの言葉に、レイスは驚いた顔で見返した。クレージュは得意気な笑みを浮かべて繰り返す。

「俺、褒めたよな」

「……けど、あれは避けただけで……」

「避けるつて行動は重要だろ？ 食らつててみろ、今のお前なんて一気に動けないまで追い込まれてたはずだ」

「……」

「お前があそこで無事じやなかつたら、俺はお前とソルを守りながら戦闘することになつてたんだぞ？ お前が動けて、ソルを預かってくれたお陰で俺は不自由なく戦えたんだぜ？ お前が居たからつてのも、勝利の材料に入つてる」

「……そ、か……」

同時発言に驚いた表情が、意外な答えに驚いた表情に変わり、最後には顔を背けたレイスの変化を、クレージュはしつかりと見取つて

いた。僅かに眉をひそめ、少しからかう様に声を掛けた。

「お前、調子よさそうな性格にみえるけど、実は人との付き合いで薄いだろ?」

「は? って、ちょ、何すんねん

髪を荒く撫でられて、レイスは慌ててその手を掴み頭から離した。手をつかまれたまま、ニヤリと口元で笑うクレージュを軽く睨み見る。

「いらんことすんなつ

「褒められたときにされるだろ? そう照れるなよ」

「余計なお世話やで言つてんのや」

「お前・・・スキンシップ薄い上に悪い癖ついてるな。照れ隠しとはいえ、好意をはねるなよ?」

「放つとけ。オレもう寝るしつ」

「はいはい。おやすみい

掴んだ腕を軽く投げ離して足早にテントに戻ったレイスを、クレージュは困った笑みで見送った。

萌生えた焦燥（後書き）

「」一読ありがとうございました。

見た目そんなに変わらない。

レイスはクレージュを見てそう感じていますが、細かいことを書つと、根本から鍛え方が違います。

筋肉のつき方とか…脱いだら違いが分かる。脱がないけど…あ、でも、クレージュ、背は確かに低いです。

日が昇つてすぐテントをたたむと、クレージュが空中に魔方陣を描き、別空間に一式を片付けた。レイスは野宿準備の時に見ていたため驚かなかつたが、変わりにソルが目を丸くした。一連の動作を見届けた後、クレージュに質問を投げかけ始める。それを会話しながら三人は、スカイゲートの城へと足を向けた。

来た道を戻つて城に帰還した三人は、まっすぐにスイの部屋へと向かつた。

静かな部屋の中でベッドに横たわるスイは、当然迎えの言葉を発してはくれない。

クレージュは魔法球を入れておいた袋を取り出すと、封を開いた。その袋は昨日、魔法球を拾つたレイスに、クレージュが入れておいてくれといつて渡した袋で、少し特殊な布で作られているのだと聞いた一品だ。魔法力が漏れにくくなるのだという布の説明に、レイスはなんとなくだが、魔物達に魔法球を持つていることを分からなくするためなのだと理解した。

本体が近くにあるのを感じてか、魔法球が光を発していた。それは袋の口から光が溢れて見えるほどだつた。

クレージュがレイスを見ると魔法球の入つた袋を差し出した。

「お前が見つけたんだ。お前がスイに戻してあげてくれ

「戻すつて…どうやつて

「スイに残つてゐるナイフの刃に魔法球を触れさせてあげるだけでい

い
「わかつた」

まさかこんな重要な役割を任せられるとは思つていなかつたが、断る理由も無いため、レイスは魔法球の入つた袋を受け取つた。魔法球を取り出すと、スイの胸に刺さつたままの魔法封じのナイフに接

触させようと近づける。すると触れる寸前に、魔法球は緩やかな光の波となって、ナイフに流れ込んだ。

溢れた光はレイスの手をも包みこむ。

「レイス、怪我が！」

ソルが驚いて身を乗り出した。スイの魔法力に触れたレイスの手の裂傷があつという間に完治してしまったのだ。

「すげえ…」

魔法力が全てスイの体に入り込み、白い球体も光も消えてしまった。傷が治った手に少し感動して見入った後、スイの様子を伺い見るが、スイには何一つ変化は無かつた。

「さ、報告いかないといるさいから、レオンのとこ行くぞ」

少しばスイが動くとか、光るとか、そんな反応を期待していた二人は、拍子抜けた表情をしていた。クレージュに促されて、流されるように部屋を後にする。

廊下を歩く間、誰も何も喋らなかつた。レイスもソルも無反応だったスイに、ショックに似たような感覚を受けていたのだ。考えれば当たり前なのだが、あの時力は数個に分かれて飛び散つていた。それを全て集めなれば、スイには意味がないという事だ。

今はまだ、たつたの一個目。変化や動きなんて無くて当たり前なのだ。それは、テレビの画面に映し出されていたゲームとは違い、これが現実であるということを、一人に知らしめていた。

城の中央付近にある謁見の間に着くと、秘書が一人立っていた。

「あれ？ レオンは？」

クレージュが秘書に尋ねると、少々驚いた顔をして秘書が答える。

「クレージュ様、お忘れですか？ 今日は・・・」

「あ！ そうか。じゃ、帰つたら俺達が帰つてること伝えておいて」

「わかりました」

秘書に伝えて3人は部屋を後にした。レイスとソルは、先ほどの会

話の意味が分からずクレージュに問いかける。

「逢わんでええんか?」

「ああ。とりあえず、お前達は休んでおけよ。次、いつ出発かわ
かんないからな」

言い捨てるクレージュはその場を去ってしまった。仕方なく、二人は部屋に戻る事にした。

たつた一日と少し出でいただけだつたのに、久しぶりのような気がする広い部屋は相変わらず塵一つ無い。

「俺、もう一回寝るー」

朝が早かつたせいでふらふらとベッドに向かうソルを見送り、レイスは返事をする。

「そつかー、ゆっくり寝てくれ。俺は風呂に入る」

その言葉に、ソルが素早く反応した。

「お風呂？！ 入りたい。俺が先に入る！」

言つが先か、行動が先か、ソルは浴室に駆け込み、個室を占領した。

「・・・ほんまに我慢な奴やな・・・」

仕方が無いとレイスはソファに腰を落とした。が、数分も持たないうちに時間をもてあまし始める。当然と言えば当然だ。テレビどころか、娯楽アイテムが何一つ無いのだ。しばらく考えたレイスはすることを思い出して自分の荷物をあさつた。

中から取り出したのは小型の音楽再生機だ。かなりの数の曲が入る優れもので、小さいし邪魔にもならないため、鞄に詰めてきていたのだ。けれど、この荷物は自分と同じ高さからの落下を経験している。壊れているかも知れないと、諦め半分に再生してみる。

「・・・やつた」

やわらかいものの間に入れておいたのが功を奏したのか、無事に動き、久しぶりに聞く音楽が鼓膜に響く。好きな音楽を集結させたデータは、久しぶりに聞くとなんと新鮮な事か。まるで、元の世界の自分の部屋に戻った感覚にとらわれる。

「極楽やー…」

手足を広げてベッドに転がると天井を見上げる。音楽に再生ボタンを押されたよう、脳内に元の世界の風景が思い出されて、ふと思いつ立つ。

「…待てよ。この調子で行つたら、オレも行方不明か？それは、かなりまずいなあ…」

ポツリと一人つぶやいたレイスのイヤホンが急にはずされた。見るともう風呂から上がつたソルが自分の耳に持つていつていた。

「いいもの持つてくるじゃん！ わー！ 久しぶり！」

「あほか！ 返せ！」

「いいじゃん！ 貸してよ！ あ、これ俺知らない、新曲？」

「話聞いてんのか？ これは、俺のや」

「レイスがお風呂の間だけかしてよ…ダメ？」

「…風呂上がつたら返せよ」

「わかつた」

笑顔で頷いたソルを見届けて、レイスは浴室に向かつた。

それから数時間後、夕食を伝えに来た女官が見たのは、イヤホンを片方ずつつけ、気持ちよさそうにベッドで眠る二人の姿だった。貴重なアイテムがすっかり充電切れになつている事にレイスが気が付くのは、もう少し後になる。

「—— 読あつがむ。」やれこました。

「えええ… マジでえ？」

レオンハルトに次の行き先を告げられたクレージュが珍しく嫌そうな声を上げた。

その小さな島は共通して、鉄くずの島と呼ばれていた。
島には一応、人が住んでいるとされている。『されている』というからにはもちろん未確認の情報たちであるし、人が住んでいたとしても、大陸のスラム地区よりずつと性質の悪い状態だろうと予想される。

船を付けられる場所があるのは分かつてるので、島には船で向かう事となつた。

島に近づくにつれ、明らかに海の色が透明度を失つていくのが見て取れた。そして、この世界に似合わない匂いが鼻腔をつく。ソルとレイスはその匂いを元の世界で嗅いだ覚えがあつた。

街中の汚水の流れる川だ。

臭いのせいではとんど甲板に出ず、船内で到着を待つのはとても退屈だった。

都合よく眠気がきてくれるわけもなく、退屈をもてあまして数時間、ようやく到着して、上陸すると、その状況を見て二人は啞然とした。積み上げたコンテナこそ姿は無かつたが、錆びてほぼ全壊した鉄筋の倉庫跡に、どうしても、元の世界の港が重なつて見えてしまったからだ。

けれど、そこが同じ場所であるはずが無い。

錆びて曲がった倉庫、その奥に見えるのはやはり錆びた鉄骨。何本も何本も重なり、土に吸収されることなく、鉄の山になつてゐるそ

れらがいくつも見受けられる。

壊滅状態の元の世界に戻ってしまったような錯覚に襲われて、ソルとレイスは、顔を見合せた。

空が恐ろしく高く広く見える。吹き抜ける鏗びた匂いが、鼻腔をかすめる。

違和感が拭えなくて周囲を見渡していたレイスが、そうか、と納得の声を上げた。

「背の高いもんがないんやな。違和感はそれか」

「あ！ そうだ、なるほど。すつきりした」

声にソルが同意した。鉄材なんかを目にしてしまうとつい連想して見慣れたビルを思い出していたが、それが目に付かなくて違和感が拭えなかつたのだ。

そして、違和感の正体はそれだけではない事に気がつく。あたりまえにあるべきものがここの大地上にはなかつたのだ。

木々、雑草、昆虫から動物まで、自然というものの姿が見当たらなかつたのだ。

視界に見えるのは鉄の山と地面、そして空と海。それだけだ。

その景色は眺め続けていると、心を重くするものだった。

「とりあえず、離れて歩くな。何があるかあまり予想が付かない」

「え、う、うん」

クレージュの声に少し慌てて、ソルが傍に寄つた。

相反して周囲を見渡しながら歩み寄るレイスが、ソルの代弁も兼ねてたずねる。

「その警戒ぶりはなんなん？」

「ここの島本当に分からぬところだから・・・」

「つて、誰も住んでないかも知れんのやうう？」

「ああ。地上には・・・な」

「地上には？」

「.....」

クレージュが動かした視線の先に、数人の人影が見えた為、会話が

止まつた。ゆつくりと近付き、数メートル先で足を止めた集団は、10人ほどの子供の団体だつた。

中心に立つ少年が、目の部分を覆つているゴーグルを押し上げて声を掛けた。

「・・・そんな驚くなよ、竜騎士様がここに来るのは、俺達、とつに知つてたぜ？」

少年が小ばかにしたよに言葉を吐くと、他の子供達もクスクスと笑みを漏らす。なにやら不穏な雰囲気が周囲に漂い始めた。

ほんの少し間をおいて、クレージュが小さく肩を竦めて答える。

「それは失礼、まさかお目にかかるとは思つてもいなかつたので、なんて、正式な挨拶をしたほうがいいのかな？ ジュン」

「いらねえよ、そんな物。腹の足しにもならねえ」

クレージュの行動に、自分達に対しての余裕を見つけたのか、ジュンと呼ばれた少年の声に少し棘が見え始めた。そんな会話の最中にも、三人の周りを子供がぐるりと囲みだす。

「・・・こんな場合はどうすんの？」

ソルが小声でクレージュに問い合わせる。相手は、自分とそう大差ない年齢なのが見て取れる。戦闘なんてものにはならないだろうが、なるべくなら争いは避けたいと思う。

「もちろん、戦闘は避ける」

不安げなソルの顔にはつくりと言葉を返すと、クレージュはもう一度ジュンに目を向けた。赤茶色の前髪から覗く瞳は、その視線を真っ向から受けた。逃げない。強く意思を秘め、輝いていた。

「突然…ああ、失礼、もう知つてたんだつけ…、とにかく、無断で立ち入つて申し訳ない。少し探し物をしてるんだ。君等のテリトリーには迷惑をかけないよ」

風竜の騎士として笑顔で言つたクレージュの言葉が終わると、すぐに、準備されていたかのような言葉がジュンから返つてくる。

「探し物つてのは？」

「…白の魔法球だ。それももう、知つてるんだろ？」

「素直に答えるんだな？お前らは、そういうた自分達の落ち度や汚点を言うのを嫌うと思ってたんだが」

「敵意の無い事を証明するには、そういうのが一番と思つたんだけど？」

「…まあね。お前達、もういいぞ」

ジユンが声をかけると、仲間の子供達が3人の包囲を解いた。同時に警戒が解かれたのか、周囲の空気が軽くなる。

「相変わらずだよな。俺達をビビリもしない」

先ほどまでの刺々しい空気を振り落として、ジユンが呆れたように息を付いた。声色が少し、子供らしさを取り戻しているのがレイスにも聞き取れる。

「いろんな意味での差を図りきれずこ、噛み付いてくる野良じやないだろ。お前らは」

「…・それ褒め言葉あ？」

「一応そのつもりだけど？」

「まあいいけど…」

言いながら、ジユンはポケットから小さなりモモンを取り出してボタンを押した。

何を作動させたのかはすぐに分かった。少し離れた場所の地面が口を開けたと思つたら、そこから鉄の塊が姿を現し始めたからだ。それを作動させたのは分かつたが、その場で驚いて声が出ないのは、そんなところから、そんな物が出てくる訳が無いと思つてソルとレイスだ。

ガコソ、と、鈍い音をさせて、出てきた鉄の塊の姿は、縦長の長方形。正面のドアが左右に自動で開く。

それを見て、二人の脳が連想したのは、エレベータだ。

取り巻いていた子供達が鉄の箱へと向かい、歩き出す。

「もう日暮れも近い。ついてきなよ、俺達の城に招待してやるよ

「それはありがたいね」

言われるまま後ろに付いて歩き、鉄の箱にまもなくとこうとこう

で、ジュンが足を止める。

「…ああ、そうだ・・・」

ワザとらしい言い方をして、ジュンがニヤリと笑った。

「最高位の魔法球なら、ある場所知ってるけど、教えようか?」「?!

「この島、くまなく探すほど危険な事は無いと思つぜ?・・・どう? 風竜の騎士様」

さすがに驚いたクレージュに満足したのか、ジュンの笑みが深くなつた。

それを見返しながら、クレージュは返答までの間を、ほんの少し要した。

彼等の情報網は膨大であり、きわめて正確であるのをクレージュは知つている。この場で嘘をついて、いい事があるとも思えない。ただ、彼らの情報には必ず見返りが必要となるのも事実なのだ。

「…情報の見返りは?」

「もちろん、お金。野暮な事聞くなよ」

ジュンは満足そうに勝ち誇った笑みを見せた。

「三の魔法球（後書き）」

「—— 読あつがといひやれこました。」

アンダーグラウンド

ジュンの案内の元、訪れたのは『アンダーグラウンド』と呼ばれる場所だった。

名の通り、地下に出来た都市である。

頑丈な壁に囲まれた町は、地下とは思えないほどしっかりしていて、普通に建物が並んでいる。

エレベータから降りて連れられるまま、道を歩く。

その町並みは足元から建物のほとんどが打ちっぱなしのコンクリートだった。

地下に巨大な要塞が出来上がっている。そんなイメージだ。ビルまでとは呼べないが、3階建てまでの建物なら建築可能らしく、時折ある店らしき建物の看板にはちゃんと電飾もついている。

興味深く周りを見て歩くレイスに、一番後ろを歩くソルが小声で話しかけてくる。

「ねえ……？」

「どうした？」

小声で声をかけられたため、レイスはソルに歩調を合わせ、軽く腰を折つて小声で聞きかえした。列の一一番後ろで、ひそひそと話が始まる。

「…男子、だよね？あの子」

ソルの視線が指す先にはジュンと名乗った少年の後ろ姿があった。レイスはその言葉を聞いて苦笑いした。

クレージュと会話をしていた様子を見ていると、度胸も据わっている大人びた少年だ。

だが、その見た目は、どちらかといつとまだ少女といつても通用するような容姿なのだ。

瞳は少し大きめだし、背も今周囲に居る子供たちの中でも低いほうに位置する。

中学生男子の平均身長を大幅に下回るソルより小さいのは確かだ。離れて回りと見比べればその比率はよく分かるもので、体つきもかなり華奢なのではないかと想像できる。

よくよく思い出してみれば、変声期も迎えていないのではないかと思つ声をしていた。

考えれば考えるほど年齢性別不詳だ。

「…男やろ…と思つてるけど」

「…けど、だよね」

「ちょっと話してみよか?」

「え?なんか危ないからやめといたほうが…、それに初対面だし」

「初対面やから適当に触れるだけの会話が出来るもんや。お子様は後ろで控えてる」

「レイスつてば…!」

引き止めるソルを置いて、レイスは集団の中のジュンに近づいた。ほかの子供に妨害されるかと思っていたが、案外あっけなくその横にたどり着いて見下るす。

近づいた自分を見上げてくる視線は、やはり深い光を放つていて。遠目に分析して、この瞳がまだ幼いと知つていなければ恐ろしいほどの底光りだ。

「…何か用?」

視線が合うと、ジュンは短く問いただしてきた。それにレイスは天井を指して問い合わせる。

そこには地下とは思えない青空が広がつていた。

「あの上の空はどうしてるん?」

「あれは天井に、機械で実物そつくりな映像を映し出してるんだ。ま、スカイゲートから来た人間には理解できないだろうけど」少し得意気に言つたジュンに、レイスから予想外な言葉が返つてくれる。

「よつするに、バーチャルつて事やな?」

「お前、理解できるのか?」

「仕組みまでは知らんけど、なんせ高度な技術で幻影を映し出してるって事くらいは理解出来るで」

その答えをもらつて、ジュンは表情を僅かに変えた。

「お前、あれか、異世界から来たつていう・・・」

「そうそう。それ、オレとあいつの事」

そう言ってレイスはソルを指した。そのレイスの腰布をクレージュが引っ張る。

「余計な情報は回さなくともいい。黙つてる」

「はいはい」

小声だが強い口調で声を掛けられて、レイスはそれ以上のジュンとの会話をあきらめた。列の最後尾、ソルの元へと戻つて報告を始める。

「男で間違いないわ」

「どうして？」

「…俺らだと同じ文化やつたら、シャツのボタンが右についたから「そんなの決定打にはならないじやん」

返答を聞いてレイスが口元を緩ませた。

「決定打を聞きたいか？」

「そりやもちろん…」

「あいつをお前と同じくらじやと想定したら、女子やつたら多少、上半身に男子との違いがでてるやん」

「は？」

「なかつたのが残念や。まあ、子供に興味はないけどなー」

「…つ何見てきたのさ！バカじやない！？変態！」

「お前、ほんまガキやなあ。そう興奮すんなつて」

団体の最後尾で空氣を済し崩す笑い声と叫び声が起こつた。思わず全員が足を止めて後ろを振り返る。

からかわれて必死に抵抗するソルとそれをかわすレイスが視線を気にすることなくじやれ合つていた。

ため息混じりにジュンが呟く。

「目的の割には案外、楽しそうな旅路みたいだな。クレージュ」

「はは…いや、そんなはずないんだけどな…」

「もつと暗い顔でくるかと思ってたけど…あの二人はスカイゲートの王に連れて行けって言われたのか？」

「ああ、そうだけど？」

「なるほどね。役に立たなさそうな人間を連れてるのは、そういうことか」

「…？」

「なんでもない。先を急ごうか。目的地はすぐそこだ」

ジュンが再び歩き出したため、クレージュは一人に駆け寄り、それぞれの頭を一度ずつ軽く叩いた。はたそのまま、問答無用で一人の背を押す形で、はぐれな様に集団の後に続いた。

アンダーグラウンド（後書き）

「—— 読あつがといひやれこました。」

たどり着いた先は、周りのどれより敷地の広い建物だった。もちろん、最大である3階建ての立派な建物だ。

無機質なコンクリートの廊下を歩いて行き当たった扉に、ジュンがIDカードを通して入室した。後ろを歩いていた子供達も続いて入室すると、無駄口一つきかずに全員が椅子に向かつた。

レイス達も続いて部屋に入つて、周囲を見渡す。子供達の前には大きな机、そして、パソコンの画面が3～5台分。奥には全てのパソコンから配線がつながっていると思われる巨大なハードディスクが見える。ハードディスクの巨大さはものすごく、一見するとすぐにそれとは判断できない。実際、部屋に入つて数分はハードディスクとは分からなかつた。広い部屋の端から端までの長さが、その本体の大きさだつたのだ。

クレージュにとって苦手なこの空間も、ソルとレイスにとっては興味心を駆り立てる場でしかなかつた。

ジュンが部屋の一番奥にある机に席を置いた。その机の周りにはパソコンの本体や小さな機器などが数十個、所狭しと積み上げ、置かれていた。クレージュより機械慣れしているソルとレイスが見ても、そこだけは少し異様だつた。

特有の電源が入る音が鳴り、熱を逃がすファンの音が僅かに部屋に響く。ジュンの前に積み上げられている画面全てに文字が羅列し、本体が稼動し始める。数秒すると、全ての画面に何かのソフトが起動した。

ジュンは今額にあるゴーグルをはずし、机においてあるもう一つのゴーグルで目を覆つた。他の子供達も、各自、ゴーグルをつけてパソコン操作を始める。青白い光を受けながら、ジュンは三人を椅子越しに振り返る。

「今から中央のモニターに映し出すから、しつかり見ておいて」
ジュンが喋りながらとは思えないほど早さでキーボードを叩く。
ジュンのパソコンとハードディスク、子供達のパソコンデスクの群
れ、その一つの塊の間に床から自動で現れた巨大なモニターに光が
伝えられた。

モニターに映し出されたのは、『グラウンドゾーン』、先ほどまで
居た地上だつた。そこに、たつた一つ、崩れずに建築物として残つ
ているビルが映つた。建物の映像は画面の半分に狭まり、残りの半
分に黒い羽根の生えた生き物が映つた。見るからに剛毛そうな体毛
が体中を守るように生えている、皮布を服の代わりに体に纏つた、
ゴリラのような姿。その体躯の背筋が伸びた。そんな感じの生き物
だ。

その映像を見て、クレージュが訝しげに言葉を吐く。

「魔獸？」

聞き取つたジュンがこちらを振り返つた。ゴーグルをはずして机に
置くと、クレージュの独り言に返事をする。

「ご名答。彼の名は『ゴウム』 地上、『グラウンドゾーン』に、
いつからか居座りはじめた」

「地上に人はいなか？ 襲われたりしてるんじや……」

「あんたでも、確実にそこの情報は掴んでないんだな。いいよ、教
えてあげるよ。グラウンドゾーンには人間っていう生物が残つてい
るとは思えないぜ。形はそうだったとしても・・・人間としての
一番大事な部分が欠落した魔物みたいなもんだらう」
「それはどういう・・・」

「そのままさ。だから地上で何かに出会つたら容赦なく命をとつて
良い。統治者が許可する。・・・話を戻すよ。データをだしてくれ
「はい」

指示された子供が間違う事無く、画面を映しかえる。
画面が先ほどの魔獸、ゴウムの鋭い牙の見える口元と、頑丈そうな

腕の拡大に切り替わる。

「ゴウムの武器はもちろんその筋力からのパワーと、よつぼどのものでない限り噛み碎いてしまう顎の力。爪や牙で裂かれるより噛み付かれたり、殴られたりするほうが致命傷を負う。つまりは、ただの筋肉馬鹿の魔獣……そのゴウムが、最近魔法を覚えだした」「……スイの力を利用してるって事か？」

「それしか考えられない。魔獣が魔法を急に覚えるなんて、あまり聞いたことがないし。それと、ゴウムの左腰の布袋から、魔法力が感知されるんだ。おそらく力の源は肌身離さず持ち歩いている」「感知ってどういうことだ？」

「さっき俺がつけてたゴーグルは、相手の魔法力を感知することが出来るんだ。上手くいけば属性も解明できる。残念ながら、ゴウムの魔法属性までは解明できなかつたけど……。でも最高位の魔法力だとしたらそれも頷ける。彼女の魔法力は、世の中で唯一のものだから、分析にかけていいし」

そこまで話すと、ジュンは肩から力を抜いて、椅子を回して3人のほうを向いた。

「ゴウムが棲家にしてる廃ビルまでは、バイクを使えばそんなに遠くないから、明日の朝ここを発てばいい。そう立派な部屋じゃないけど、寝るには困らない場所なら提供できるぜ？」

「……そうだな。なれない船旅で一人も疲れてるだろうし……」

「話が決まるとき席を立つた少女が、ゴーグルをはずして3人に歩み寄つてきた。

「あたしが部屋まで案内してあげるよ」

少女はそう告げると、まだあどけない笑顔を見せた。
そこに、ジュンの声が割つてはいる。

「クレージュはちょっと残つて欲しいんだけど。別に話があるんだ」「わかった

クレージュは短く返事をすると案内を買って出た少女に田線を合わせて声をかけた。

「この一人、旅慣れしていないから迷惑かけるかもしれないけれど、案内よろしく」

「はい！」

「良い返事だ」

クレージュに頭を撫でられると、少女は少し照れくさそうに笑った。

「一読ありがとうございました。」
今回は予想以上に長くなつたので、2話に分けました

少女に連れられてソルとレイスが部屋を出ると、クレージュはジュンを振り返った。

パソコンの電源を落とすと、ジュンは他のメンバーに退出を促す。全てのパソコンの画面が消えると、部屋の奥の巨大なハードディスクがその役目を終えて働くのをやめた。

機械音がなくなり、部屋の中が静まり返る。

「見せたいものがある」

そういわれて、クレージュはジュンの傍に歩み寄った。ジュンは右手を乗せた机に黒い小さな錠剤を転がした。視線がクレージュを見る。

「あんたは、これを知ってるよな？」

「・・・知ってるも何も、『ディープブラック』だろ？」

「そう。飲む人間の深くにある負の部分を沸きあがらせる麻薬さ。自分の闇を知るために精神の治療薬に使われるものもあるけど、これは正真正銘、裏業界に出回る麻薬の錠剤だよ」

背もたれに体重をかけながらジュンはそれを見つめて言葉を続ける。「この薬は、グラウンドゾーンに大量に出回ってる。・・・正確には出回つてた。現状はもう逐一調べていない」

2、3秒ほど間を空けて、ジュンが顔を上げてまっすぐクレージュを見た。

「オレは、仲間内にも公表してない情報を沢山入手してる。『ゴウムは魔獣の中でも知能も高い。 言葉も理解してるし、話もするようだ。元が動物だから、野性的勘も鋭いし、種別を嗅ぎ分ける鼻もかなり利く』

そこまで言つてもクレージュが表情を欠片も変えないために、ジュンは次の言葉を選ぶため時間を要した。その間の意味を汲み取ったクレージュがジュンを見据え話を促す。

「・・・それで？」

聞き返されるように話を促されたジュンは、一瞬のうちに少し圧力を増したを空気を感じ取りながら言葉を続ける。

「オレが握ってる情報は、確証の無いものもある。・・・といふか、信じ難いものもある。もう何を言いたいのかも分かつてるとと思うけど、この薬は稀に、人を魔族に変える事も、また、元魔族の人間を、魔族に引きも戻すことも可能にするとされている。その奥にある負の心を呼び覚まして・・・・・・ゴウムはこれを誤って動物が大量に摂取したために、魔獣になったと思われるんだ。だから、麻薬中毒者のようにこれを携帯してると思つ。触ることなんてないと思うけど、何があつても、あんたはこれを体内に入れるべきじゃない。万が一にもそんなことになつたら

「いい子だから、そこまでにしとこ」

クレージュが穏やかにジュンの言葉を制した。その裏にある圧力に押されて、ジュンの言葉が止まつた。

「その情報、誰かに売つた？」

「まさか。さすがに世の中に出ないほつがいい情報かどうかぐらい判断できる」

「じゃあ・・・それ、嘘つて事で」

「・・・は？」

そんな無茶苦茶な。そう付け足すジュンを無視して、いつものクレージュが笑顔を作る。

「それに、心配しなくとも大丈夫だつて。俺はディープブラックには飲まれないよ」

「心まで強いやつなんて、人間にそうそつ居ない」

「オレには風の精靈がついてるし、そつならないとスイに誓つたしさ。何より、『オレ達』の意思がそうだ」

その言葉の意味を理解したジュンが驚いて言葉を飲んだ。全てを否定しない、むしろ肯定したのだ。ジュンの髪をクレージュがそつと撫である。

「だから何も、不安があることはないよ、ジュン。大丈夫だ」「やめるよー！」

ジュンはクレージュの手を強く打ち払った。激しい嫌悪の色が瞳に宿る。

「勘違いするんじゃないよ！結果として割のいい情報交換になつたぜ。まさかはつきりと本人の肯定がもらえるとはな」「俺の事でスイを助ける一步になるなら、安いもんだ」「俺はあんたのそういうところが心底嫌いだ……！」

「……気分を害したならすまない。で、話は終わつたな？そろそろ部屋に案内してくれよ」

クレージュは席を立つピアに向かって歩き出した。

「」— 読あつがむ「」やれました。

一晩泊めてもらえた部屋は4人部屋だった。そして客用の部屋があるわけではなく、皆同じような部屋が各自分け『えらべて』いると、少女は話した。

部屋の壁はコンクリートに類似していて、部屋にある家具などもほとんどがステンレスに似た素材で出来ていて。やはり元居た世界とそつくりだと言うのがレイスとソルの感想だった。

「なんか、腹減ったなあ・・・。食い物はあるん?」

案内してくれた少女に問いかけると、ポケットから出した大判の地図を手に詳しく教えてくれる。

「ここにあるのは部屋が固まっている棟だから、一番奥のエレベーターでB2階まで上がって、渡り廊下を歩くとショッピングフロアに出るんだ。食べ物から生活用品まで全て買えるよ」

「ショッピングフロアで・・・もしかして店?」

「そうだよ?あたりまえじゃない」

当たり前といわれて押し黙つた。レイスはこちらの世界の金銭など持ち合わせていない。

思わずベッドに転がっているソルを見る。

「お前、こっちの金とかもつてるか?」

「もつてるわけないじゃん。衣食住、全部無料だよ」

「...」

「お金ならなくても大丈夫だと思つよ」

声にレイスは再び少女を見下ろした。

「金がないとさすがに買い物できへんやん?」

「できるよ。クレージュ様の付き人でしょ?」

(付き人で...)

「だったら、クレージュ様の名前借りてサインしておけばいいよ。

ツケつてこうんだよ」

（「いやいや、それってあいつの借金勝手に作るつて事や。大体ツケつて言葉どこで…）

幼い子供からの発言とは思えない言葉にレイスは途中から返す言葉を失つていたが、変わりに胸中では収集がつかないほど、突つ込みどころが満載だった。

そこにソルの声が入つてくる。

「それでいいんじゃない？ カード切ると思えばや。元の世界では俺も父さんの名前借りたりした事あつたし、クレージュも空腹を我慢しろなんていわないでしょ」

「…世間一般はそんなもんなんか…？ お前はどうする？ 一緒に行くか？」

「オレ行かない。 疲れたー」

寝返りを打つてスプリングが硬いとか文句を言いながらも、ソルはベッドに沈んだまま起きる気配を見せない。 レイスは一人でショッピングフロアを目指す事にした。

途中まで一緒に来た少女が渡り廊下まで来てくれたとき、地図を差し出して尋ねてくる。

「この地図、良かつたら使う？」

「いや、ええわ。 もう大体ここに入つてるから」

そういうつて自分の頭を指差したレイスに少女は驚きの声を返す。

「大体つて、…この地図全部？！」

「さつき見せてくれたやろ？ ま、そーゆう事やから、気持ちだけで十分」

じゃあ、と、軽く別れの言葉を残して渡り廊下を歩き出したレイスを、少女はしばらく呆然と見送つた。あまりの驚きに手から滑り落ちた地図には、この建物の全域がプリントされていた。

ショッピングフロア

そう呼ばれるだけあって、一応な店構えがずらりと並ぶ。思つたほど店舗数は多くはなさそつだが、生活に関連するあらゆるもののが売

られている。若干暗いが、照明も施されていて申し分ない。

ただ、店に立っているのがほとんど中学生程度の少年少女だと囁くことを除けばである。

とりあえず食欲を満たすため食品コーナーを目指していたレイスの耳が、不思議な音を捕らえた。

今居る場所はいわゆる十字路で、左右前後、どちらにも道は伸びている。音はその左側、道一本向こうから聞こえた。

興味本位でそちらに足をむけ、道を覗き見る。

そこはさつき歩いていた道とは違い、かなり細い道だった。通りの奥は壁で行き止まりで、その道の店舗は数えるほどしかない。そしてそこは、まるで別空間のように武器や防具の店ばかりが集まっていた。

表通りと裏通りなんて言葉は、こんな場所でも有効らしい。先ほど通りとは明らかに空気が違うその場所で、レイスは音の発信源を見つけて足を止めた。

その店は少しだけドアが開いたままだった。そのために音漏れをしてしまつたらしい。

『射撃場 銃器取り扱い店』

看板を見て入るのをためらつてしまつた自分が少し情けない。

けれど、それはレイスにとつては当たり前なのだ。元の世界では銃器どころか強靭な刃物さえ一般人が持つのは違法だ。

それでも興味心が勝つたために、レイスは足を踏み入れた。

入るとすぐにフロントのような小さなカウンターがあり、そこに少年が座っていた。細身で小柄、前髪を逆立てていて、目つきもあまり良くない。そんな少年は客の姿を見て、少し口角を上げた。まだまだ悪戯好きな子供の印象を残す顔付きた。

「へえ、珍しい客が来たな・・・見ていくの？ スカイゲートの人間だろ？」

カウンターのイスに座つたままで問いかけてくる少年の言葉に、レイスは少々驚いた。さつきここに着いたばかりなのだ。自分がスカ

イゲートから来た人間だと、まだ知らなくてもおかしくない。

「・・・なんで知ってるん?」

「ジュンの奴から全員に情報が同時通達されてたからさ。アンダー グラウンドにあんたの存在知らない奴いないと思うぜ」

すんなり入つてくる言葉がここでは良くなつかわれる。同時通達、といつ言葉は電子メールのようなものだらうと連想できた。どうやら分化自体は元の世界と近いものと思って間違いないらしい。

「もうすぐ射撃大会も始まるぜ、やってく?」

少年からの言葉にレイスは素直に聞き返す。

「大会?」

「丁度、参加締め切りの時間だ。これも運命つてな」

少年が椅子から立ち上がった。身長はまだ、レイスの胸元にも届かない子供だった。

特に声をかけずに、少年が部屋の奥へと歩き始める。

その手が、おそらく愛用のものなのだろう、じく自然に凶器を一丁、腰のベルトに収納した。

目の前で見ていて、不思議な感じがしていた。

とてもリアルなのに、まるで現実離れしている。

レイスにとつては、テレビや雑誌、インターネットでしか見たことがない、それらから得た知識しか持ち合わせていない凶器だ。触れたことも、間近で見たこともない。

ただ、脳裏をよぎったのはとても強力なイメージだった。ニュースなんかで良くなつていた、人をあつさり殺してしまう強さ。それに触れられる興味心が奥から聞こえる銃声に煽られて誘惑となり、レイスは少年の後に続いた。

一つドアをくぐると、広い部屋へと出た。部屋に入るとまず、射撃練習のレーンが続く。動物やら、魔物やらが映し出されたスクリーンを弾丸が貫いている。的の敵をたおすと、スクリーンには新たな生き物が映し出される仕組みのようだ。バッティングセンターのよう

に並んでいる射撃レーンは、ゲームセンターのようにも見えない。子供達が群がつてレーンに居るものだから、そう見えるのもなお更だつた。

右手側にそれらを見ながら歩いていくと、部屋の一番奥に小部屋が設置されていた。

少年が小部屋のドアを開いて中を見せてくれる。そこは部屋全体が真っ白に塗りつぶされた部屋だつた。床や天井まで真っ白な部屋というには、実際初めて目にする。あつさりを通り越して、冷ややかな印象を受けた。

「ここに一人チャレンジャーが入つて、戦闘することになるんだ」

「戦闘？」

「そ。バーチャルの敵と戦うんだ。この部屋全体が戦場になる」

「戦場……ねえ……？」

「実際死ぬわけじゃねえし、殺すわけでもねえんだけど。四方八方囮まれると相当リアルだぜ」

出店の射撃のようなものを想像していたレイスは、大会の内容に少々引いてしまつた。

そんなレイスなどお構いなしに少年は説明を続ける。

戦場となる部屋を一旦出た一人は、小部屋の傍にある長テーブルの前に来ていた。テーブルの上には大小さまざまな銃器が置かれていて、それらを管理しているらしい人の姿は、やはり少年だつた。レイスはここに来て、これまで結構な道のりを歩いたと思っている。けれど、大人の姿に一度も出くわしていないことに気が付いていた。まさかと思っていたが、周囲を確認してもう一度考えがよぎる。ここには子供しか居ないのか？

銃器を置いているテーブルの向こうから、レイスを連れてきた少年に声がかかつた。

「おいおい、ジン。誰を連れてきたかと思つたら、スカイゲートの客じゃねーか

「露骨に嫌がるなよな、マコト。お前の悪い癖だぜ、それ」

「嫌いなモンは嫌いなんだよ」

マコトと呼ばれた少年は、ジンと同じような背格好だった。それだけなく、声質も顔も実によく似ていた。

下から上へと遠慮なくレイスを見て、マコトの言葉は続く。

「…今日銃を初めて握るような奴にバーチャルに入れつて言つのか？」

「大丈夫だろ。本人の意識の中の敵が敵と映るだけだ。 戰闘経験も大して無いみたいだし、それ相応の敵が映るさ」

「ま、別にいいけど。・・・で？おにーさん。どれにする？」

とても子供のやり取りには聞こえない会話に呆然と聞き入つていたレイスは、問い合わせられて我に返つた。

「・・・触つても・・・？」

「とりあえず弾は抜いてるから気にせず触れば？」

「・・・」

正直、緊張していた。

レイスは一番近いところにある小型の銃を右手に取つた。

鉄の塊はズシリと重い。これに弾丸を込めて相手を打ち抜くのだ。いわば命をとる凶器。

元の世界のゲームセンターのものとは全く違つた。

そして、現在武器として使つてゐるナイフとも当然違つ。ナイフはまだ、元々の生活でもそれなりに馴染んでいた。カッターナイフや、果物ナイフ、包丁。それらの延長上だという認識があるため、さて恐怖も無く、それに引きずられる使つてみたいという誘惑も感じない。例えばナイフで相手を切つたとしても、その傷も、程度も容易に想像がつく。けれど、自分が今手にしているものに関しては、全く想像がつかない。本当に使つてもいいものか、やめてこの場を去るべきなのか。そんな迷いさえ沸いてきてしまつ。

「なつさけないなあ。オレよりずっと年上なのに」

マコトにそう悪態をつかれても、怒る気持ちなど全く湧き出てこない。出でくるのは手にしているそれに対する興味と、恐怖ばかり

だ。どれほど解りやすい顔をしていたのだろうか。マコトが一ヶと口の端をあげて笑うと、レイスを突き動かす一言を口にした。

「撃つてみる?」

返事を口にしないが、マコトは言葉を続ける。

「しつかり手に合つものを見いだよ。イベントとはいえ、一緒に戦う相棒だからな。俺達の年齢の奴等がほとんどだから、小さいのが多いかも知んないけど…」これとこれがサイズ的にはベストかな」勧められた銃を持ち比べてみて、一つを選び抜き、あの射撃場へと向かう。一本のレーンの中でジンが教えてくれる。

「初めてだろ?両手で構えて・・・弾は・・・うん。そう。で、しつかり標準をあわせて・・・ここであわせるんだ。よし、じゃ、オレ出たら射撃開始するから。適当に撃つてくれ」

ジンが去っていく間も、高鳴る鼓動を押さえにかかる。得体の知れない高揚感に襲われていた。

(…落ち着け…)

やるなうば、全てをやりこなしたい。

『風来』の中にある根本的な気持ちが湧き上がつてくれる。深く深呼吸すると、これまで生きてきた間に、もう癖のよつになつていてる偽りの呪文を唱える。

(・・・出来る。オレは出来る。出来ない事は無い。ここに居る誰にも負けたくない。何に対しても強くありたい。・・・大丈夫。やれる)

気圧されるな 負けるな

俺は何にも負けない

もう一度深く深呼吸すると、レイスは銃を構えた。

「」— 読ありがとうございました。

アンダーグラウンドは、細部まで想像がいきわたるほど、書き込むほど難しくなるところです。皆様に少しでも伝わっていれば嬉しい限りです…！

数分後、射撃を終えて囲いから出たレイスは盛大に息を吐いて力を抜いた。

「やるじやん！動かない敵相手とは言え、弾込めの後の遅れ以外全部当るなんて」

驚きを隠せない様子でマコトが話しかけてきたが、レイスは先ほどまで敵が現れていたスクリーンに目を向け、悔しそうに愚痴をこぼした。

「全然や。急所はずしすぎたし、弾入れ替えにももたついた。 . . . あーくそつ。腹たつ！」

射撃場に立つ前の戸惑いが消えて、レイスは笑っていた。

マコトにアドバイスをもらうと、一度目のチャレンジに取り掛かる。レイスの中では、まるつきり新しいゲームのように楽しい状況になっていた。

その表情は、爽快さに似た物が見えていた。

その変化を見取つて、ジンは一抹の不安を感じていた。

いい加減練習の時間は打ち切られて、少し遅れる形で大会が始まつた。

部屋の中で繰り広げられる戦い。自分の番を待つ参加者も、観戦者もそれに食い入るように見入る。

バルチャルの敵は戦う本人が耳につけるチップが作用し、記憶の中から引き出される。つまりは自分がこれまでに戦った相手か、それらの特徴を混ぜ合わせた敵が目の前に現れることになる。

部屋の中の戦いは、外の大判スクリーンに映し出されて観戦される。見ている人間が評価し、すばらしい戦いだと思ったものに票を入れる。その投票数が多いものが、優勝となる。システム自体は簡単な大会だ。

ただし、バーチャルといえば、かなりのリアルさなので、精神的にも肉体的にもあの部屋に居る間は疲労するし傷も負う。が、部屋の中の事、全ては自分の記憶が起こしている錯覚に過ぎない。そういう部屋なのだと分かっていても、主催者のマコトの手元には緊急停止ボタンが常についた。頃合を見てバーチャルシステムを止めないと、時折、精神的に負けてしまう人間が出てしまうからだ。

数々の強敵と戦つていく参加者の動きを、レイスは食い入るように見続けた。少しでも自分のためになる事柄を盗めるように必死だった。ジンやマコトが話しかけても、声に気がつかないこともしばしばあるくらいだった。目の前の大画面で繰り広げられる戦闘は銃の強さをレイスに見せ付ける。

レイスの番は一番最後だった。エントリーが一番最後だったのでしかたの無い話だったが、ようやくといった感じで真っ白な部屋に入る。バーチャルといえ、これから繰り広げるのは戦闘だ。レイスは武器を確認した。

ナイフは腰の後ろ、腰布に沿うようにセッティングしてある、そして、未だ借り物だが、最強の武器、銃は右の腰にセッティングした。部屋の中心に立つと、レイスはイメージを膨らませるために目を閉じる。

（俺が、勝ちたい相手。勝負したい相手はただ一人や）

バーチャルの相手がそれになるように、記憶をなるべくリアルに思い浮かべる。四方の壁に映りだしたのは、石壁の暗い城。少しじつとりとした空気、明かりは蠟燭。少し高くなつた場所に王座がある、そこに・・・。

部屋の外でスクリーンを見ていた観客にざわめきが起つる。ジンとマコトが、お互いを困惑した視線で見合つた。止めるべきか迷いながらも、映り行くスクリーンを見守る。

そこに現れたのは、紫の目をした子供だった。

（違う。俺が、挑むのは・・・）

レイスが目を開いたそこには、プレイジの真の姿があつた。

周りの風景が明るい部屋に変わる。舞台はスカイゲートの密室だつた。手も足も出せなかつた、あの場所。あの時だ。周りの人間までは、バー・チャルに現れない。当然だつた。あのときレイスは、自分のことだけで精一杯で、周りの事など見えていなかつた。記憶などあるはずもない。本当に何も出来なかつた、許せない時間。

銃を構える。

構えたレイスを見て、プレイジが嫌な笑みを見せた。直後に視界が光つた。

「・・・?！」

反射的に閉じてしまつた目を開けると、景色は元の白い部屋に戻つていた。マコトの声がスピーカーから届く。

「はい、ゲームオーバー。よくもまあプレイジなんてバー・チャル創つたな。今のは、あいつのお得意の爆発系の魔法だぜ」

「魔法?」

『お前直接魔法くらつたことないだろ? よかつたな。下手すりや怪我どころじや済まなくて、精神ショックから死んでたぜ』

『お前が森に飛び降りたとき! 俺が上空でプレイジに睨みをきかせてなかつたら、お前は森の一部と共に、魔法で欠片も残つてなかつたんだからな!』

プレイジを倒した祝いの口、クレージュが言つたことを思い出してレイスは舌打ちした。

不機嫌にそうなレイスの表情を見て、マコトの呆れ声が続く。

「しかたないじやん。実力の差つて奴だぜ。早く出て来いよ、残念賞の商品、多めにやるからさ」

スピーカーを通じて観客の笑い声を聞きながら、レイスは白い壁を睨んだ。

そんなレイスの様子を、ジンは黙つて伺つていた。

（こいつは、打ち抜く弾丸の強さに心が負けはしないだらうか）ジンは密かに、そんな不安を感じていた。

手に持っているものは、武器だとちゃんと理解しているだらうか。レイスは銃より使い慣れているはずのナイフを一度も使おうとしなかつた。プレイジ相手にナイフなど通用しないと判断したというならまだ分かるが、銃なら倒せる、と思ったのなら問題ありだつた。プレイジは魔物の姿をしていない、人間だ。彼を倒すということは、人間の命をとるということに繋がる行為だ。

（・・・大丈夫、だよな・・・？旅の目的は魔法球集めだし、人間に向けることはもうねえよな・・・？）

考え込んでいるとマコトが棚から特殊な銃を持ち出しているのを見つけ、声をかける。

「おー、マコト。それ、どうするつもりだよ」

「ああ、銃買つてくつていうから、クレージュと旅するらしいし、多少強力な奴のほうがいいだろと思つて。こっちのほうが高額だし」半分は思いやり、半分は収入のため、面白そうにマコトは笑つてレイスの元へ駆けていった。

結局、自由な時間をかなり割いてしまつたレイスは、残念賞を手に部屋へ帰つた。

ドアを開けると一眠りして元気を取り戻したらしいソルが「お帰り」をくれた。奥の椅子では、クレージュがワインを優雅に飲んでいる。

「手土産や」

そう言つて残念賞でソルの額を軽く叩く。

「何？」

受けとつたソルの目に映つたのは一冊の魔法書だつた。表紙を読み上げようとして首を傾げる。

「召喚・・・？これ表紙さえも読めないんだけど・・・使いこなせないよ？俺」

「そりなんか。ま、精進しろや」

「・・・むー・・・」

なにやら眉間にしわを寄せながら本をぱらぱらとめくるソルに、もう一つと、レイスが袋を手渡す。

「今度は何？」

小さなフェルトの袋から出てきた三つの指輪を見て、ソルはますます首をかしげる。それぞれ大きな輝く石が一つずつ付いているが、装飾品としては少々派手すぎるデザインをしていた。ソルの手の平から、指輪を一つ取り上げるとレイスが説明を始める。

「この宝石の部分にお前が持つてる魔法書を封じることが出来るらしい。宝石を本に当てる、魔法力が共鳴するらしい。そしたら、本がこの宝石に読み込まれて、お前が使いたい魔法をイメージするだけで、脳に直接魔法の一文が出てくるんやつて」

「マジで？！なんかすごいじゃん！ ホントなら、あの分厚い本、もう持ち歩かなくていいんだよね？！」

「魔法使いはよく使うって聞いたで。旅するんやつたら、なおさらやつて」

「うわーマジでうれしいかも。サンキュー」

笑顔で本の封印作業を試みるソルを横目に、レイスは一番に浴室を占領する事に成功した。

脱衣所で腰布の影に隠れている銃を手にとつて、眺める。

その後、マコトが面白い銃を渡してくれた。それは通常の弾丸以外に魔法弾丸というものを使える、特殊な銃だった。

化学反応で相手に弾丸が当たると炎が出るのだという。

アンダーグラウンドでも数の少ない銃でとても高価らしいが、クレジューと旅をするなら強いものを持つたほうがいいと勧められたのだ。

レイスはブレイジとのバーチャルの戦いを思い返す。

そして、巨大な花の魔物との戦いを思い出して眉を寄せた。ここにきてから、負けごとばかりだ。

強くなりたいと願つて止まない自分がそこにいた。

『お前に決めた』

不意にプレイジの囮の言われた台詞が思い出されて、鳥肌が立った。誰よりも近くで聞こえた、心臓を抉り取るような低くおぞましい声。首を持たれた感覺がよみがえった気がして、銃を収め鏡を見る。

「・・・なかなか消えへんなあ・・・痣」

少し伸びた長めの黒髪のお陰でぱつと見には分からないが、つかまれた際に出来た痣が未だ消えていなかつた。鏡で確認しながら痣を緩くさすつてみるが、独特の鈍い痛みや熱っぽさなどは感じ取れなかつた。

痣というものは経験上なかなか消えないことも承知しているが、これに関しては少し消えなさ過ぎるよう感じていた。

だが、違う世界に来てしまつて、時間間隔がずれているだけだとレイスは自分を納得させていた。そうでも思わないと、何かあるんじやないかという不安に苛まれてしまつて仕方がないからだ。
(そのうち消えるやろ…)

レイスはいつも通り不安をかき消した。

凶器2（後書き）

「一読ありがとうございました。

ちょっと書き方が不満な点があるため、後々修正するかもしれません。

そのときはまた承ください。

残念賞でレイスが一番不満だったのは、魔法アイテムばかりだったことだそうです。自分が使えるものが一つもない！と…。
だって、残念賞だもの…

余談ですが、アンダーグラウンドで残念賞とは自分に不必要的ものを指すらしいです。だって残念だから（もういい）

その日の夜、アンダーグラウンドである事件が起きていた。統括者のジュンの前に、一人の少年が俯き立っている。

「…本当に、ごめんなさい…」

腰を折つて深く謝罪する少年は、ある部屋の管理を任せていた人だった。

詫びている理由は、部屋の鍵であるエロカードを失ったからだ。

「ジュン、許してやれば…？誰だつて物失くす事くらいはあるだろ？」

一向に言葉を発することなく少年を見るジュン。その様子を見るに見かねて、傍に居たマコトが言葉を挟んだ。

「俺どジンもまた明日一緒に探してみるし…」

「一緒に探す？そんな暇は一人にないだろ」

睨むではなく、じつとりとした視線を向けられてマコトは思わず表情を引き攣らせた。この表情のときのジュンは、とても機嫌が悪い。「甘い。反吐が出るほど甘い」

「いや、でもさ…」

「紙やペンを失つたんじゃない。鍵だぞ。…わかってるよな？その辺の重大さ」

マコトに向けられていたジュンの視線が少年へと向けられた。縮められた小さな肩が少し震えて、俯いた顔から涙が落ちた。

それを見てジュンが盛大にため息をついた。

「泣けば問題が解決するわけじゃないぜ？許してもらえるわけでもない」

「…はい…つ、ごめんなさ…つ…」

「もういいよ、部屋に帰つて。マコト、送つてやつて

「ああ。わかつた」

マコトに背中を押されて部屋から去り際に、少年がもう一度ジュンを振り返つた。ジュンがそれに気がついて視線がかち合つた。

「あの…」

「謝罪はもう聞き飽きたから要らないよ。俺はエロキーのプログラ

ム書き換えと再発行を行つ。君は何をするのか、よく考えてみなよ

「…」

ボロボロに泣きながら部屋を出て行つた少年も、ジュンとさほど年齢は変わらない。

体格で言えば彼のほうがジュンよりずっと立派だった。

「…次から次へと問題ばかり起こしてくれる…。世話が焼けるのもほどほどにしてほしいよ」

一人愚痴りながら、ジュンは巨大なハードディスクに手のひらを付けた。

そのままゆっくりともたれ掛かる。

ひんやりとした機械の肌に人肌の体温が吸い込まれていく。

とても心地がよくて頭が冴える。

瞳を閉じて静かに考える。

今まで起こったことのない、IDカード消失。

来客のあつた今日に起こったのは偶然だらうか？

『仕組みまでは知らんけど、なんせ高度な技術で幻影を映し出しているつて事くらいは理解出来るで』

薄く瞳を開くと、ジュンは静かに声をかけた。

「『マザー』、今夜は少し大変な作業になる。プレイジの使用していた電波を拾うよ」

返事をするよつて巨大なハードディスクが運転を開始した。

その夜は遅くまでクレージュがワインを飲んでいた。深夜になつてようやく浴室に入つてくれたので、レイスは計画を実行するため部屋を抜け出した。

本当はクレージュが眠つてしまつてから動く予定だったが、どうも今夜のクレージュは長時間眠りそうに無い。行動時間は、クレージュが浴室から出でくるまでという短時間に大幅に縮小された。その間に自分がしようとしていることを済ませて、部屋に帰つてこなければならぬ。

レイスは部屋を出ると、赤い省電力の蛍光灯が照らす廊下を走つていた。夜は動いていないエレベーターを無視して階段を駆け上がる。頭の中に広げた地図をたどり息を潜めて走り到着した場所は、パソコンがすらりと並ぶ部屋だつた。

射撃大会のあと部屋に帰るときにその場所を見つけていた。通りすがりに部屋を覗いてみると数人の子供達がパソコンを触つて居るのが見えた。同じ画面を指差して楽しそうに笑いあつたりして、遊んでいるらしい雰囲気が見受けられた。様子からして、どうやら自由にパソコンを使える部屋のようだつた。

レイスはそつと窓から部屋の様子を伺つた。深夜の今、当然部屋には人影など無い。確認すると部屋を見つけたときにくすねていたIDカードをポケットから取り出した。後から持ち主が子供だと思うと少々心が痛んだが、カードの差込口の上に置きつ放しになつてたのを見つけた時には手が動いていた。思いついた計画には、部屋の鍵が必須だつたのだ。

IDカードを差込口に入れてみると、予想通りドアロック解除の音が鳴つた。見当違いでなければ、うまく行けば計画が実行できるはずだ。

「・・・・・」

数秒様子を見てどうやら警報などは無いようだと判断し、足を進める。念のため柱に隠れる場所のパソコンを立ち上げる。見た感じ、つくりは自分が元の世界で使つていたものと変わらないため、触つてみれば操作方法は分かるだろうと考えていた。

プレイジはこの世界から自分達の世界にアクセスしていた。

もしかしたら、ここにあるパソコンでもアクセスできるかもしれない。

椅子に座って暗闇の中で画面からの光を浴びる。まぶしさを感じてデスクにおいてあるゴーグルを装着した。思った通り、目を保護するゴーグルはまぶしさを軽減してくれる。重くなっていたまぶたが、軽くなつた。

それらしいソフトを手当たり次第に立ち上げてみる。万が一、大変なものに触つてしまつて見つかつたらそれはそのときだと、レイスは腹をくくつていた。最後までばれないよう最善を尽くすが、ばれてしまつたらそこまで。悪い事をするときはいつもそんな感じだった。

思ったほど手間と時間を要さずに回線が繋がり、アドレスを入力する箇所が表示された。

慣れた手つきで入力したのは、良く通つていたホームページのアドレスだ。

「・・・頼むでえ・・・繋がれよ」

ENTERキーを押し、焦れながら表示を待つ。マークが出ればそこでおしまい。連絡手段は無くなる。

『斎藤 風来』は行方不明、ましては勝手に死亡説などに巻き込まれては困る理由をもつていたのだ。なんとしても連絡をつなげたい。どうか、現実の世界も深夜でありますように。どうか、チャットに友達が居るよ。どうか・・・つながりますように。

画面が切り替わり少し懐かしい画面が表示される。

思わずこぶしを作つた手をコードレスマウスにかけ、わき目も触れずチャットルームの参加者を表示すると、懐かしい名前が数個連なつていた。その中に田口のハンドルネームを見つけると、思わず口元に笑みが浮かんだ。

(よし!)

ハンドルネーム、『レイインストーム』

いつしか、レイスという愛称で呼ばれるよになつた名前で入室する。

入室すると部屋の全員が文字で驚きを表示した。それらに、さりげなく挨拶せずレイスは言葉を送る。

レイнстーム・悪い。久しぶりに来てなんやけど、リッグ以外今日は勘弁してもらわれへんか？頼む

ハンドルネーム、『リッグ』は同じ高校で仲の良い友達だった。チャットで一人以外に退出してくれと頼むなんて、実際のところはルール違反だろ？だが、既に電波では数ヶ月は一緒に話をした仲間の集まりだ。他のチャット仲間が渋りながらも、レイスの頼みならと次々に退室した。無事でよかつたと笑顔の絵文字をくれながら。チャットルームにレイスとリッグの名前だけが残る。まるでリアルに会話しているように、空気が沈黙を漂わせた。

リッグ ……人払いまでして、なんやねん？お前、今どこに居るねん？もうすぐ期末テストやぞ？

レイнстーム・悪い・・・オレの状況はどうなつてる？

リッグ ……状況？それは、オレが聞きたいことぢやうんか？

レイнстーム・ええと、オレは、元気。

リッグ ……チャットに来た時点ではそれは解るわ。そうやなくて、どこに居るねん？家にも何回行つても居らんし。どうしてん？レイнстーム・ああ、話したらめつちや長いし、正直信じてもらえんと思つ。だから、とりあえず世界旅行中つて事で。

リッグ ……はあ？ますます訳解らん。なんか事件にでも巻き込まれてるなんか？例の見入つてた中学生の失踪事件か？

レイнстーム・ちやうぢやう！あれとは全く無関係や！
リッグ ……

不思議なものだ、と、いつもレイスは思う。画面を通して声はもちらん表情すら伺えていないのに、入力された文字を見て嘘がばれたと直感した。

沈黙を表す『・・・（三點リーダー）』が帰ってきたのが何よりの証拠だった。画面の向こうから疑いの視線が突き刺さるよつだった。

リッグ ・・・ 意味分からんわ。お前、警察動き出すで？
先生もどいしょうかつて話してるとこ見たで。

レインストーム・それは、困る！なあ、英次。オレの真面目なお願いや。休学届け、代わりに出しどいてくれ！無理やり渡されたとか、ポストに入つてたとかでもいいから！マジに、真剣に。

リッグ ・・・ 風来？お前、どうしてん？

レインストーム・今は、聞かんといってくれ。頼む。

リッグ ・・・ 訳解らんいうてんねん。そんな頼み聞けるかつて。レインストーム・お前しか頼まれへんのや！お前しかオレの状況知つてる奴おらんし、お前しか信用できへん！オレの身内や言う奴が来たら、連絡あつた言つて、のんきに世界のどつか旅行してるつて言つといってくれ。

リッグ ・・・ 風来・・・・？お前、ほんまにどないしたん？
レインストーム・頼む！オレは、あいつ等に全て奪われたくないんや！わけ合つて戻られへんけど、死んだ事にされたりしたら、それこそあいつ等の思つままや！それだけは嫌や！頼む！頼む！

リッグ ・・・ セめて、今どこに居るかぐらい教えろや？
電話もつながらへんし。心配やんけ。

リッグ ・・・ 風来？

リッグ ・・・ おーい？

リッグ ・・・ どうした？風来？！

レインストーム・」めん。すぐ、今日の分のチャットのログ、消してくれ。

現実は？（後書き）

「一読ありがとうございました。文頭のジュン達の一こまは、今、まさしくアドリブで挿入しました。GAMEは何度かリメイクしてますが、このバージョンで初公開のシーンです。

2011.09.25 午後 修正

気が付けば本名での会話になり、ひどく一方的な文字の会話をしてしまっていた。

レイスは相手の返事を待たずにチャットを中断して画面を即座に消した。

近くに人の気配を感じたのだ。

視線を向けると、今頃浴室にいるはずのクレージュがドアを背もたれに立っていた。

普段のクレージュからは想像できないほど、冷たい双眸がレイスを見ている。

ゴーグルを額まで押し上げて椅子から立ち上ると、レイスはクレージュを見返した。

「もう用事はおわったのか」

「…」

「そうしてそこに立つてると、ついついこうこう世界から来たんだなって思うな。お前」

パソコンの青白い光に背中から照らされたレイスは、スカイゲートの城内にいるよつしつくくる。そんなことを一々言葉にする言いまわしにも、クレージュの怒りが込められているように聞こえるのは、自分に非があるからだろうか。

「何かたぐりでるなとは思つてたけど・・・」

その言葉でレイスの頭はどうしてここにクレージュが居るのかをはじきだした。

「はめたんか…」

浴室を使う振りをしたクレージュにまんまと騙されて、レイスは部屋を出てしまつたと言つ訳だつた。少し距離を置いて尾行された事も知らずに。

「はめた? オレから言わせれば騙されるまつが馬鹿なんだ」

「嫌な奴やな。お前」

「それはどーも」

会話が止まつた沈黙の中、パソコンの機械音だけが僅かに響く。空氣に耐えかねて、レイスは会話の内容を主題へと移動させた。

「俺にも抱えるもんがあるんや。何言わっても、この行動は俺には絶対やつたんや」

「……言い訳はそれだけか？」

「……」

「……ふうん……」

言いながら近寄られ、レイスはこぶしの一つや二つが飛んでくる事を覚悟した。が、襟元を持ち上げられて、眼前で小声で怒鳴られる。「終わつたらさつさと電源落とせ！俺以外に見られたら言い訳どころじやすまないだろうが」

言葉と同時に少々乱暴にパソコンに向かされたレイスは、意外な言葉に驚きながらも電源を落とした。クレージュから間髪をいれずに次の指示が飛んでくる。

「さつさとゴーグルもはずして元の位置に戻す！」

「あ、ああ」

言われてゴーグルをはずしデスクに置いたのを確認するとクレージュは出口に向かって歩き出した。

「部屋に戻るぞ。早くしろ」

「お・・・・い？」

怒られるどころか全く無視されて、レイスは後味が悪いまま足を進めた。廊下に出て足早に歩くクレージュに追いついて肩を引く。

「なんか言いたいんやないか？ 黙つてられる方が気持ち悪……」

言葉の途中で肩の手を払い落とされたレイスは、振り返ったクレージュと視線が合い息を飲んだ。赤い光に照らされて、クレージュの髪も、瞳の色も、元の色と混ざり紫に変わっている。それをプレイヤーのものと一瞬ダブらせて見てしまつたレイスは、思わず言葉を止めてしまつていた。

一秒にも満たない時間の後、クレージュが言葉を切り出す。

「言つておかなかつた俺にも不備はある。他国の物を勝手に触るな。これは常識の範疇だ。それから、この世界で別の世界に影響することを許可なしにするのは重い違法行為だ。良く覚えておけ」自分から言いたい事を言えと追求したが、実際に歯切れ良く言われてしまうとレイスは言葉を失つた。返事を待たず歩き出したクレージュの後ろを付いて歩く。

「・・・悪かった」

背中に向かつて言つた言葉に、クレージュは振り返らずに返事をする。

「何に対しての侘びだ・・・？」

「・・・何も考えずに行動して」

「お前をつき、自分には不可欠な行動だつたつて言つたよな？ どうしてもやらなくちゃならなかつたんだろ？」

「そりなんやけど・・・」

「じゃあ聞くけど、お前先に俺の言葉を聞いてたら今の行動は起きたなかつたのか？」

「・・・いや、やつたと思つ」

「だつたら行動に対する謝罪はおかしいだろ。 やつたことに 대해서悪いなんて、お前は僅かにも思つてない。 取つてつけた謝罪なんて、オレは受け取らないから」

「詫びも受け取らんつてじゃあどうしろつて・・・」

「取つてつけた侘びは要らないつて言つたんだ。 少しは頭で考える」そこでレイスは押し黙つてしまつた。 確かに、先に違法だと色々聞いていても、元の世界へのコンタクトは必須だつた。だからどんな状況でもレイスは今の状況を作り出しだらう。

どつちにしても迷惑を掛けてしまつていた。だから、行動自体に詫びたというのにそれが却下された。

「・・・意味分からんわ・・・」

レイスが背後で苦々しく呟いたのを聞いて、クレージュが盛大な溜

息と共に振り返った。

「お前さ、少しさは俺に相談しようとか思わなかつたわけ？」

「・・・は？」

問い掛けにレイスは目を丸くして返事をした。クレージュは大きく肩を落とすと脱力した声で会話を続けた。

「一人で動いてる訳じやないんだぞ？ オレに行動したいと相談してくれれば、俺だって少しさは顔が利くんだ。ジュンに話を持ちかけることくらいやつてのける。なにも行き成りこんな強攻策どることないだろ？」「うう」

言葉を聞いて、レイスは本氣で驚いていた。誰かに行動を相談するなんて、今言われるまで頭に浮かばなかつたのだ。

「そうしてくれてれば、少なくとも行動に、他国に対しての問題は発生しなかつたはずだ。こんなにこそこそとしなくとも良かつただろうしな」

そこまで言われてレイスはようやく気が付いた。

自分という立場をクレージュは決して軽視していない。スカイゲートの中と外ではクレージュがまとう雰囲気が違うのは、おそらくそんな意識から来るものだ。スカイゲートの風竜の騎士と広く知られている彼にとって、全ての行動はスカイゲート全域を掲げて動いているようなものなのだ。別の国でその国の中を勝手に使うなど、おそらく許される行動ではないはずだ。

「・・・悪い・・・俺お前の立場とか全然考えてなかつた」レイスの口を割つて出た言葉にクレージュは目を細めた。

「・・・四十点だ 他は？」

問われてレイスは自信なさ気に答えを続ける。

「相談しなくて・・・？」

「五十点。 あとは？」

連續の質問にレイスは口を閉じてしまつた。他に回答が出てこない。「じゃあこれも言つておく。お前をつれて歩くつて決めた瞬間から、お前の取る行動には俺にも責任があると思つていい。つまり、こん

な行動が公になれば俺とお前は何かしら処分を受ける。少なくとも処分が決まるまでの謹慎は免れない・・・お前のせいでスイの一大事に俺まで謹慎とかくらつてたまるかつての

「それって完全にお前の都合やん」

「・・・少しでも反省してるなら黙つて部屋に戻れ」

再び一人は部屋に向かつて歩き出した。

レイスはクレージュ自身にも好都合になる理由があつたことに、自分の罪悪感を削つてもらえた気がしていた。

けれど先ほどの問答でクレージュが納得していないのは嫌でも感じ取つた。頭の中で会話を反芻はんすうしてレイスは後の五十点を考えた。会話中に、少しだけ引っかかつたところがあつたのだ。

普段のクレージュを見ていると、他人のせいで謹慎の処罰を受けたとしても、それをきつく責めるような人間ではないはずなのだ。なのにどうして、今回はそこにこだわつたのか。

レイスは知つてはいる限りのクレージュという人間について思い出し、違和感の答えを探つた。

そして、クレージュのスイに対しての思いにたどり着いた。

今回の一件は下手をすると処罰を受けてしまい、『大切な思いの人』を助けるための旅を中断させてしまうところだつたのだ。

スイが今の状況に陥つてしまつたときのクレージュの落ち込んだ姿が思い出された。レイスは真剣な恋愛など、まだしたことがない。その思いは想像できないが、あの時のクレージュの姿はとても痛々しかつた。

クレージュは一日でも、一分一秒でも早く、スイを助けたいはずだ。それなのに勝手な行動で、クレージュにとつて最悪の状況を起こしかねなかつたのだ。加えて、それは他国のものを勝手に使い、下手をすればこの世界の違法行為に触れるという、普段のクレージュではありえない重大な事を起こさせてしまつた。それらの行動は、公になれば間違いなくスカイゲートの名を傷つける。

クレージュ個人の抱えたスイへの思いと、スカイゲートへの思いを、

レイスが踏み込み荒らしたのだ。

自分が大切にしているものへの思いが、他人の自分本位な行動で崩される。それはどれだけ怒りがわいてくるものだろうか。

クレージュはレイスが行動に出たとき後を付けていた。いつでもとめることが出来たはずなのに、それをしなかった。

それどころか、レイスがクレージュを見つけたとき、彼はなんとと言つたか。

『もう用事は終わったのか』

レイスが自分の行動を終わらせて居なければ、おそらく彼は終わるまで待つたのだろう。

総じて自分のことより、レイスの事を尊重してくれたのだ。その言葉を発するのに、その行動に、どれほどの葛藤があつただろうか。

クレージュの思いをたどることで、レイスは心臓が痛む感覚を覚えた。

「・・・泳がさんと先に止めればよかつたのに・・・」

それは丁度部屋の前に到着したときだつた。考えた結果の答えが、レイスにそう言わせた。

クレージュはドアに伸ばし掛けていた手を止めて、表情を緩めた。
「お前言つただろ？ 抱えるものがあるつて。 お前にだつて譲れない事くらいあるだろ？と思つたんだ。 満点おめでとう」

クレージュがレイスに笑いかけた。本当は怒つているはずなのに、とても柔らかに笑いかけて見せた。

「忘れるなよ。 お前は一人じゃない。 もう少し、周りを頼つて良いんだ」

クレージュは子供をあやすようにレイスの頭を撫でた。いつかの夜のように、レイスは手を払うことをしなかつた。

相手の心の柔軟さに、心臓がジクジクと痛む感覚がする。傷を消毒液に付けたような、ジワリと沁みるような痛みだ。

この感覚に、レイスは覚えがあつた。先ほどチャットで会話をした

友人が、一年近く前に『えてくれたものだ。

レイスは眉を顰めた

（・・・俺の目的は・・・）

それこそあいつ等の思うままや！それだけは嫌や！
チャットに入力した言葉を思い出してレイスは唇を噛んだ。
(スイは命がかかってるんや…その回復に比べたら、俺の事情なん
か…)

心臓が握られたように痛む。

自分の思いとその感覚に焦り、慌てて心で首を横に振る。
(…違う。あかん。流されるな…！このためにオレは生きて
るんやから…！ オレはオレのために生きてるんや、他人なん
か関係ない！)

心を無理やりに塗り替える。生きている為の目的を忘れるなど、解
れてしまつた箇所を硬く塗り固める。

レイスはクレージュに続いて部屋に入りドアを閉めた。その僅かな
時間の間に、湧き上がってきた感情を自分の奥に押し込め封じてい
た。

「」一読ありがとうございました。

ちなみに、今回のレイスの行動は、ギリギリ違法行為にならないうつです。

異世界に闖入はしたけど、悪いことはしていないから、もしくは、事件、事故を起こしていないから。という逃げ道で。でも、バレてしまつたら何かしら罰則はうけるでしょう。

部屋に帰ると寝ていたはずのソルが起きて椅子に座っていた。その横のテーブルにはワインがあり、しつかりと手にはグラスを握っていた。

「お前何飲んでるんや」

まだ中学になつたばかりの体なのだ。さすがに少し焦つたレイスがグラスを取り上げに走つた。意外とあっけなくグラスを取られたソルだつたが、明らかに拗ねた表情を見せる。

「別に初めてじゃないよ。向こうでもアルコールは飲んでたし、いいじゃんか」

「あほか。何してんねん、おまえは」

「未成年だからどうとか言われても無駄だからね。ビーセレイスも飲んでるくせに」

「お前とオレとは明らかに年齢の差があるやろ」

「でもレイスも未成年じゃん！」

「それはそうやけど…お前ちよつと飲みすぎやぞ」

叫び返されてレイスは少々言葉を濁した。どう見てもアルコールに飲まれている雰囲気が見て取れる。

とにかくと、取り上げたグラスをソルの手の届かないところにおいて向き直る。すると、ついさっきまで絡み具合だつたソルが酷く俯き加減になる。

「大体、レイスが悪いんだから」

「は？」

突然つぶやかれた言葉の意図がつかめずに困る。そんなレイスに気づかず、ソルは言葉を続ける。

「親の気持ちなんて話するから悪いんだ……帰りたいよ。母さんと父さんに会いたい」

声が震えだしたと思つたら、ソルの膝に重が落ちた。

「え、おい…？」

「ひとたび一度泣き始めると、ソルは堰を切つたように泣き始める。

他人に近くで盛大に泣かれるなど、レイスにとつて初めての経験だつた。困惑するレイスを知りもしないで、ソルが声を絞り出す。

「…俺つ…いらないんだと思つてた、けど、もし心配かけてたらどうしよう…俺のこと待つてくれてるなら早く帰らなきや」

「ちょっととまてつて…」

「もし迷惑かけてたらどうしよう！仕事にも影響出してたらどうしよう！俺ほんとに要らない子になっちゃうよ…！」

「落ち着けつて、そんなことあるわけない…」

「嫌だよ！父さんと母さんと一緒に居たいよ！一人はやだよ…」

「…つ」

ソルの言葉にそれまで困惑と動搖を見せていたレイスが大きく息を飲んだ。

少し離れた場所で様子を伺つていたクレージュは、僅かな空氣の揺れからそれを感じ取つた。反射的に見たレイスの表情からは悲觀しか読み取れない。

すぐにレイスの表情からそれは消されて、落ち着きを取り戻したようになつた。

だがそれは表面上の話で、クレージュの耳には必死に平常を取り戻そうとするレイスの呼吸音が届いていた。

先ほどの悲觀の表情から、徐々に表情が変わっていく。

眉を顰めて歯をかみ締める。

レイスの手が強く拳を作つていた。

クレージュはレイスに近づくと背中にそつと手のひらを触れた。瞬間、背が大きく竦んだ。

すぐにレイスが一つ大きく深呼吸することが出来たのを感じ取つた。

顔を見ると視線が合う。レイスは居心地悪そうに顔を背けた。

何も言わず手を離して、クレージュはソルに目を向けた。先ほど命一杯不安を吐き散らしたソルからは嗚咽が止まる様子がなかつた。

椅子の前に両膝を付くと、クレージュは躊躇なくソルを抱き寄せた。

「どうした？…大丈夫だ、誰もお前を一人になんてしないぞ」

背中を緩く叩いてやりながら声をかけると、ソルの体から緊張がほぐれていく。

ソルはクレージュの服を掴むと、顔を埋めて呟いた。

「…俺、ほんとは、戦うの怖い。出来ると思ってたけど…怖いよ」「画面で見ていたゲームとは何もかもが違っていた。怪我をすれば痛いし、敵は恐ろしい。

脳裏から消えない、雷に打たれて倒れたプレイジ。

魔法はもつと綺麗なものだと信じていた。敵が倒れるときもゲームでは綺麗に消えて無くなつた。

腐敗臭も立たなければ、血も流れない。争う音も、何かが倒れる音も、空気の振動も張り詰めた雰囲気も、声色も、モニターの中では綺麗にしか変化しなかつた。

目の当たりにしたら、それらはとても恐ろしいものだつた。

「戦うのが嫌なら、戦わなくとも良い。スカイゲートでおとなしくしてろよ。誰もお前を非難したりしない」

「…だつて、スイがいなきや帰れないし、待つてるだけなんて、俺、やつぱり必要ないって事だよね？…それは、やだ」

「どうしてそう思つんだ？誰もお前を不要だなんて言つてないぞ」「俺まだ魔法も実践で発動させられた事ないし…邪魔なだけなのかなつて…」

酔つている上に気持ちが高ぶつてゐるせいで、ソルの言葉が少し支離滅裂だ。

だが、言葉を順序良く並べられない今だからこそ、言葉の全てが、内々に仕舞つていた事なのだろう。

幾分落ち着いてきたソルを少し押し離して、顔を見る。
頬から涙を拭つてやると、クレージュはあえて碎けたものの言い方をして話し掛けた。

「あのや、戦闘に関して言わせて貰えば、お前の活躍なんて、俺は

これっぽっちも期待してないんだ」

親指と人差し指で少しだけ隙間を作つて言われて、ソルの涙腺が再び緩みだす。潤んだ目で見てくる顔にクレージュはその指を近づけて軽く額をはじいた。

「痛つ……」

パチン、と良い音が響いて、ソルははじかれた額をさすつた。

「期待もしてないけど、別に足手まといだとも思つてないよ。考える暇があるならイメージトレーニングでもして、今より少しでも先を目指す努力をするといい。目指す自分になるためには何が必要か、考えて、求めていこう。それが、不安を払う方法のひとつだ」

「……出かけるかな？俺に

「できるさ。人間つて、生まれた瞬間から努力してるんだぞ」

「？」

「生まれてすぐは歩けないだろう？言葉も話せない、自分で何も出来ない人間が、一つ一つできるようになるために努力を繰り返して成長してるんだ。生まれて間もない頃からお前もやってることだぞ。出来ないはずが無いんだ。帰るためにも、頑張ってみないか？」

「……うん…俺やってみる」

優しい笑顔で言われた言葉に、ソルもつられて少し笑顔を取り戻す。小さな子供にするように宥めあやして、やがて寝かしつける事に成功したクレージュがソルをベッド運んで一段落がついた。

「…・・・慣れてるなあ？」

「慣れてなんてないさ。ただ、少しでも俺が和らげてやれるのなら、そうしてやりたいだけだ。…お前は、大丈夫なのか？」

問われて一瞬返事に迷つた後、何食わぬ顔で言葉を返す。

「大丈夫や。ところで、数時間で夜明けなんやけど、今日出発？」

「当たり前だ。少し遅くまでソルを寝かすけど」

「お前つてさ子供に甘いよな」

「俺の中では女と子供は特別」

「あつそ」

「言ひとくけど、お前も微妙なところだからな

「どうこつ意味や」

「そういう意味だよ」

まだまだ子供だといわれたレイスの反応があまりにも予想通りで、
クレージュは小さく笑った。

ホームシック（後書き）

「一読ありがとうございました。」

不安を抱えていたら、それがたとえどんなに小さなことでも、そこから弱くなっていく。

人間ってそんな生き物のような気がしています。

マイナスは吐く事が大事。でも、相手から期待通りの言葉が返っこなかつたら満足しない。自分と全く同じ人間なんていないって知っているのに。

人間って結局どんな生き物なんだろう。って考えたりします。

10/01、一行だけですが、修正加えました。

魔獸というのは、獸が黒魔法、もしくは負の力の『闇』『黒の力』に飲まれた後の姿。その上の魔族は人が持つている『負』『闇』の力の塊のような人間。魔族は背に黒い翼を持ち、強力な魔力を持つ。魔族にはまた別の種族があるのだが、それは知らなくていいと説明を飛ばされた。

簡単に話を聞いたレイスは、魔族は悪魔、魔獸はやはり、元の世界のゲーム内で見ていたモンスター、と自分で整頓した。昨日酔つ払つてすつかり思いを言葉にしたソルは寝起きこそ元気が無かつたが、会話をするにつれて徐々に前を向くようになった。正午近く、アンダーグラウンドを出発する頃には、ソルはいつもと変わらず楽しげに歩を進めていた。

三人はジン達の操縦するバイクに乗せてもらつて、一気に廃ビルの入り口まで到着した。

タイヤなどは無い、空中に僅かに浮き上がる不思議なバイクだつた。地面を直接走らないため振動などが無く、とても不思議な乗り心地だ。

帰りの迎え連絡の為、小型の無線をレイスが受け取ると、笑顔でお礼を言つたクレージュを先頭に魔獸が住むといわれているビルに入る。

中は無機質な鉄骨と鉄壁で、一切窓も何も無い通路だつた。

迷う事も無い、気持悪いほど一直線の通路と階段のみだ。薄暗い空間、壁の高い位置に設置された蝋燭が唯一の光源だつた。

視界が悪いため、前と足元を確認しながらゆっくり足を進める。体に感じる鉄を踏む感覚が、ソルとレイスに懐かしさを感じさせた。

コツコツと足音だけが響く。外では建物が太陽に熱されているのか、じつとりと汗をかくが、特に敵が出てくるわけでもなくスムーズに

事が進んでいく。

ひたすらに最上階へと、まるで誘われるかの様に道が出来ている。

「・・・ほんとに何もないねー？」

一気にラスボスまでいけるんじゃないの？
そんな楽天的な考えをソルが言葉にした。だが、反面、クレージュは少し焦っていた。

ここには風が無い事に。

空気の通り道が非常に少ないこのビルは、人が一人通れるかどうかの細い通路のみ。それゆえ非常に空気の通りが少ない。

クレージュが通常使う魔法は風を媒体とする。風と魔法力を融合させるのでが つまるところ、風が吹いていなければ力を発揮しない。

だが、その特性を知っているのは魔族の者だけだ。

たまたま魔獣が居座つた建物がそんな造りだつただけならいいが、もしかすると背後に魔族の影があるかもしれない。
もし万が一にも、魔族が付いていたらどうする？この2人を守りながら戦う事など出来るだろうか？

風を自分で作り出すことは出来る。

だが、それは、出来る限りやりたくない事だった。

(…どうやら、そうも言つてられないみたいだな)

階段を上がりきると、初めて建物内で見るドアがあつた。
ノブを握る前にクレージュは嫌なものを感じて左手に剣を召喚した。
少し大振りな、何とか片手で扱える大きさの剣だ。柄の先の飾り紐の搖れが落ち着くと、クレージュが静かに二人に声を掛ける。

「二人とも、階段を…30段ほど降りている」

戦う前から剣を召喚するクレージュを初めて見た二人は黙つて頷いた。それを見てから、クレージュは静かに剣を構えた。

二人の足音が遠ざかり、やがて止まるのを聞き届けると、剣を強く握り締める。

「…風だ」

下からクレージュを見上げていたソルが、頬をすり抜けていった感覚に言葉を口にした。

だが、その風がレイスにはわずかにも感じ取れなかつた。不思議な顔をしてソルを見ると、緊張したような表情でレイスを見返していく。

「クレージュから、風が発生してるんだ」

ソルには感じ取れてレイスにはわからない。この状況はクレージュの魔法力が作り出しているものだからだ。

魔法力はよほど強大なものでない限り、魔法力を持つものにしか見えないし感じ取れない。ソルが感じ取つた風は、クレージュの魔法力の流動だつた。

そのため、レイスにはわからなかつたのだ。

（でもなんだろう？この風、少し冷たい…）

ソルは冬の風のよつた魔法力の温度に、無意識に腕をさすつた。間もなくクレージュの魔法力が完全に風へと変化し、レイスの肌がそれを感じるようになつた。

同時に、クレージュはドアの外から剣を振り下ろした。

破壊音と共にドアから反射した風圧が、二人の頭上を通り抜けていつた。クレージュと同じ場所に居てあれをあびていたら、耐え切れず吹き飛んで、狭い通路の壁に打ち付けられていただろう。風が收まると二人は階段を駆け上がつた。

「…！」

ドアは真つ二つに折れて、その先の部屋の奥の壁まで吹きとんでもいた。

ただし、吹き飛んだのはドアだけでなく、アンダーグラウンドの映像で見た、魔獣、ゴウムも一緒にだつた。

壁に打ち付けられてドアごと二つにされたゴウムは腐る音を立てながら溶け、ゆっくりと生存自体を消していった。

いつもと何かが違うと感じながら一人はクレージュの後に続いて部

屋へと進んだ。めり込んでいた「ゴウム」という物体をなくして鉄のドアが音を立てて床に落ちる。

ゴウムが腰につけていた布袋が音もなく落ち、緩んだ口からスイの魔法力の球体が床に姿を見せた。

ゴウム以外、誰も居ないはずの部屋なのに、その魔法球を拾い上げた手が三人の目に映つた。

長い真紅の爪を持った女性の手だつた。

手をたどつて視線をあげると、妖艶な女性がそこに居た。

ただし、腰から下が蛇である、情報には無い蛇の魔獸だつた。

布が数枚、乱雑に巻かれているだけの、女性の裸体といつても過言ではない上半身。

それに続くのがうねる極太い蛇の尻尾だとしても、他人を魅了する容姿をしていた。

なにより、綺麗な肌色とほのかな薄紅色で出来た尻尾を覆う鱗は、ぬれた様に艶やかな色彩を帯びていて、とても美しかつた。

僅かに鱗に走る濃紺色のラインが、より妖しさを誇張させていた。その姿を視界に捕らえたと同時に、部屋に満ちている甘い独特的の香りを鼻腔が嗅ぎ取る。

ゴウムの事も、魔法球の事も忘れて、一人はその姿に魅入つっていた。そんな二人とは対照的に、クレージュは普段となんら変わりない表情で嘆息した。

「なんだ、ラミアかよ…はいはい、落ち着けお前ら。だらしない顔すんなつて。下半身をよくみろよー 蛇だぞー」

クレージュは振り向いて二人の頬を順番に軽く叩いた。一言一言、二人から文句が返つてくるが、二人の意識がラミアに魅了されていなかつたことに一安心する。

ラミアの魅力に一度捕らわれると、敵味方の判別がつかなくなり、とても厄介なことになるためだ。

そんなやり取りをまるで気にもせず、ラミアが独り言のよつに言葉を発した。

「嫌ねえ。唯一、奇襲かけるくらいしか能の無いような獣だったのに…それすら出来ずに殺されるなんて。どうして待ち伏せがわかつたのかしら?」

「…教える義理はないな」

ドアノブを握る前に、クレージュにわずかに届いたのは獣の呼吸音だった。そして、ドアの隙間から漂ってきた、僅かに鼻腔を掠める不思議な香り。

今にして思えば香りはラミアのものだったのだが、そういう出会いう種類の魔獣ではないために、すぐには分からなかつたが…。
(まさか人に似た姿を持つラミアがいるとは…)

クレージュは昨夜、恐怖を口にしたソルを気にしていた。
どうせなら多少強くても異形の姿をしていてくれたほうが、今の状況では助けになつていた。

戦闘を始めれば否応にも血生臭い姿になる。

「ここに居れば風竜の騎士がくるのは本当だったのねえ。若い男ばかり、食べれば寿命が5年は延びそうだわあ」

長い舌で口元を舐め、唾液をすすつたラミアに対して、クレージュは黙つたまま剣を構える。それを見て、ラミアは妖艶な笑みを浮かべた。

意志の弱い異性ならば、その魅力に己の意思を奪われてしまつと言われている笑みだ。その表情でラミアはクレージュを見続ける。

「風竜の騎士を食べれば不老長寿になるつて本当かしら? 私にそ

の身を差し出してみない?」

「悪いけど、あんたは俺の趣味じゃないんだ。魅力の欠片も感じやしないんで、論外」

はつきりと拒絶を口にしたクレージュの言葉に、ラミアの表情から笑みが消える。

「そんな口を利いていいのかしら?」

言葉にあわせて、ラミアの両手に黒い靄が発生し始める。

それはあつという間に巨大な雲になると床に落ち、やがて液体とも

固体ともいえないものへと変化した。

「スライム？！」

クレージュが物体の正体を見抜いたと同時に「一体のスライムは、恐ろしいスピードでレイスとソルめがけて飛び掛っていた。

「何？！」

「ソル！ 法衣を頭にかぶれ！ 顔を巻かれるな！」

スライムに襲い掛かられて、床に体を沈められたソルにクレージュの声が飛んだ。

スライムはからうじて固体を保っているが、ほとんどが液体で出来ているため、顔を塞がれると溺死してしまう。

咄嗟の声にソルが動いたのはわかつたが、法衣を頭に被れた今まではクレージュからは距離があつて確認が出来ない。

「早すぎやー、スライムの癖に…！」

一撃目をかわして飛び去っていたレイスも思わずスライムの素早さによけるのがやつとの状態だつた。飛び掛られたときに、ナイフを抜きスライムを分断するが、半液体のスライムは一つの固体を二つに分かつ事で生きながらえ、今度は一対になつてレイスに襲い掛かる。

「ありえへんつて！ まじかよ！」

それらをなんとか避けているレイスを見るクレージュは、ラミアの視界の中に居た。

下手に動けば自分がラミアに狙われる。
「お得意の風の魔法も、この空間じゃあまり上手く構成出来ない見たいねえ？」

クスクスと笑いを響かせるラミアを睨んでクレージュは言葉を返す。
「あんまり調子に乗るなよ、魔獣」ときが

クレージュの言葉の後、部屋に銃声が響いた。音に目を向けるとレイスに襲い掛かっていたスライムが一体、溶け出していた。思わず口元に笑みを作ったレイスがもう一弾、飛び掛ってきたスライムに向かって打ち放つた。

弾力性のあるスライムに丸め込まれたかに見えた弾丸が、次の瞬間、炎を放ちスライムを蒸発させていく。

シリンドラーが小さな音を立てて、弾丸一つ分、回転する。

レイスは、銃口をラミアに向けた。

「スライムは俺にはもうきかへん

人型なら、急所は同じだろうか？

レイスは高鳴る心臓を必死に無視して照準をラミアの額に合わせた。これを撃てば、殺傷行為だ。

唾を飲んだ。

そんなレイスを見ていたラミアの目が少し細められた。

「なにかしら、あの武器。少し面倒ねえ…！」

ラミアの肢体 尻尾がグンと伸びた。と、レイスは思った。だが、ラミアの移動の加速が早くてそう思えただけだった。

次の瞬間にはレイスの眼前に真紅の爪があつた。

その爪がレイスに触れる直前で、横から何かにさらわれた。右から左へと流れた空気に釣られるように、レイスの顔もそちらに向いた。

自分から数メートル離れた場所に、剣と爪を合わせているクレージュとラミアの姿を確認する。

ラミアの爪は今の一瞬で恐ろしいほど伸び、申し分ない武器と化していた。

遅れて、レイスの顔に横筋の傷が数本現れた。
深くはないが、切り傷特有の痛みを感じてレイスは傷に指で触れた。血液が少し指に付着する。

よつやく、現状を把握して、背筋に悪寒が走った。

「もう少しで頭を潰せたのに…」

ラミアが呟いた。だが、クレージュはその時すでに魔法力で風を作り出していた。

「ちょっと遊んでる暇はないみたいだ」

大量の風が、一気にクレージュから巻き起こった。

レイスは突風に吹き飛ばされそうになつて、数歩後ずさつて何とか踏みとどまつた。

前を直視できないほどの強さだった。腕を顔の前に持つてきて防がなければ、目を開けることもままならない。

同時に聴覚も完全に風の音に奪われていた。その風の音に恐ろしい悲鳴が混ざつた。

声に肩をすくませた後、レイスは嗅ぎ取つた臭いに吐き氣を催した。恐ろしいほどの血の臭いがした。

手で口元を覆つて、こみ上げる気持ち悪さを必死にこらえる。

どれくらい経過したのか体感する余裕もなかつたが、やがて風がやむと、ラミアの姿は部屋のどこにも存在しなかつた。

何も見えなかつた時間だったが、クレージュの後姿を見て、レイスは驚く。

クレージュは、全身血にまみれていた。

瞬間、クレージュが怪我をしたのかと思ったが、即座に違つと感じ取る。

あれは、返り血だ。

そう理解して、レイスは全身に震えが走つた。

クレージュは剣を仕舞うと、背中からマントを取つた。裏表を逆にし、体を覆つように巻きつけ、片方の肩で留める。

袖口で顔を拭いてから、レイスに向き直つた。服の汚れは裏向けたマントのお陰でほとんどの箇所が隠されていた。

それでも足元や袖には、乾ききらない生々しさが見え隠れしていく。レイスはどこに目を向けていいのかわからず視線を逃がした。

「平氣か？」

「…おう…なんとか…」

「そうか」

敵を倒した後だからか、クレージュの感じがいつもと違つていた。平坦な声色の会話が終わると、クレージュはソルへと歩み寄つた。ソルはスライムに全身覆われたまま、うつ伏せに床に押し付けられ

ていた。

僅かにスライムを透けて見える頭の部分には、魔法の法衣が見える。どうやら上手く、頭部だけは免れているようだ。

横に膝を着いてソルに声をかける。

「返事は出来るか？ソル」

「…出来る、けど…重いよ」

くぐもつた声が返ってきた。

水の塊ともいえるスライムの重量は意外と大きい。体を圧迫されているため、呼吸がつらそうな声をしている。

「いいか？外からはスライムはどうにも出来ない。お前が助かるためには、炎の魔法でスライムを焼くしかない」

「そんな…」

「出来るはずだ、ソル。炎の魔法は、お前が一番に覚えだした魔法だろう」

そう、初めて使った魔法は炎だった。

レイスがいない間も、ソルは何度か練習で魔法を使った経験がある。出来ると信じていた、信じているから魔法は発動するのだと、その気持ちが魔法をより強くするのだと、スイが言っていた。

「お前は出来る」

頭に被つた法衣の中で、ソルはクレージュの言葉を聞いていた。スライムはとても重くて、どんどん重量を増してきていたように感じていた。

怖くて法衣を掴んだ手は震え上がっていた。

「魔法…炎の魔法…炎…」

声を発して呟いていると、指輪が赤く光をともし始めた。

魔道の書を封じた、指輪だつた。

指輪が光るというのは、ソルが魔道の書を開いたのと同じことを示す。

魔法発動のための言葉が、頭に流れ込んでくる。

我、魔道の力を使い現の具現化を可能とする者なり
炎よ！

外からソルを見ていたレイスは、ソルが炎に包まれた瞬間を見ていた。

だが、魔法の炎はスライムだけを蒸発させると綺麗に消えていく。
「すげえ…」

初めて目の前で炎の魔法を見たレイスが思わずそう口にした。
重圧から解放されたソルが勢いよく跳ね起きる。

「よくやつたな」

クレージュが頭を撫でると、こわばっていたソルの表情がぱっと笑
顔になつた。

「やつた、俺、今魔法使つたよね！出来たし！」

うれしくてソルは両手を握り締めてガツツポーズを作つた。その表
情のままレイスを見上げる。

「見た！？俺の魔法見た！？」

「見たみた。やるやんけ」

「でしょー！俺やつたし！」

笑いあう二人の傍から離れると、クレージュはスイの魔法球を回収
した。布に包み、専用の袋に收めるとよつやく肩から力を抜く。

「さあ、帰ろうか」

二人の背を軽く押して出口へ促すと、三人は元きた道を戻り始めた。

「—— 読ありがとうございました。」

ソル、クレージュ、レイスの順で、来たときはあの部屋に導いた一本道を出口へと歩く。

思えば道のりというのは、来る時よりも帰りがより長く感じるものだ。

薄暗い中、歩くに少し飽きたレイスは先ほどの戦闘を思い返していた。

強風の中で何があったのかと想像をめぐらせる。

剣でラミアを斬つたのだろうか？いや、返り血はクレージュの全身についていた。

背中にも、髪にもだ。

魔法を使えたことに興奮していたソルが落ち着いた時、驚いて目を見張つたくらい、それとわかるくらいだ。憶測だが剣で斬つたのでは、あんなに返り血は浴びないんじゃないだろうか？

浅はかな知識だが、知っている限りのロールプレイングゲームから想像すると、風で相手を斬つた、としか思えなかつた。

風で？

今、全身が触れている空氣も、ある意味風といふんじゃないだろうか？

まさしく、360度触れている大気が刃に？

想像して、少しそつとする。

レイスの耳には、まだラミアの断末魔が残つていた。

幸い、ソルは法衣を被り、その上にスライムも被つていたためよくわからなかつたそうだが、それを見越した上で行動だろうか？

前を歩くクレージュを見詰める。

強くやさしく、笑顔を絶やさない。

だが、厳しくないわけではない。

先ほどのソルに付いたスライムだって、本当はクレージュなら何と

か出来たのじゃないかと思つてゐる。

けれどあえて、ソルに魔法を使うチャンスを与えたのではないだろうか。

魔法を使えたソルを褒めたクレージュを見ていて、レイスは直感的にそう感じた。

いつもは笑顔で褒めるのに、あの時だけは笑えていなかつたからだ。だから、魔法を発動した後、言つべき台詞だと準備していたんじゃないかと思った。

その直感は、ラミアを倒した直後に感じた、いつもと違うクレージュにつながつていた。

違和感、というものだろうか。言葉では上手く表現できない何かが、レイスに付きまとつていた。

ソルをほめた時、たとえ準備していた言葉でも、クレージュという人間は笑顔で言葉を発するはずだ。

そう思つて違和感の正体に気がつく。ラミアを倒した後からじけり、クレージュの自然な笑顔を見ていない。

そして、今、歩いている最中でも、レイスはある事に気がついていた。

クレージュが、時折、まるで呼吸を整えるように、大きく肩で息をしているのが見て取れたのだ。

少し休むかと声をかけようかとずつと迷つていた。今も迷つている最中だ。

そんな、歩く音だけが響く階段に、ソルの声が響いた。

「思つてたんだけどさー、こここの蠅燭つてめずらしいよね」

言われて、クレージュもレイスも両側の壁の高い位置についているそれらを見上げた。均等に配置された燭台の上に、一本づつ、太目の蠅燭が火を灯している。ただでさえ暗いため、目を凝らす。二人が見上げたのを背後で感じてかソルが得意げに続けた。

「俺、目がいいんだよ。こここの蠅燭、色が黒いんだ。あんなものの

色一つでもちよつと気分暗くなるよね。どうして魔つて付くものって黒色が好きなんだろ？・・・って、おーい

言葉の途中で後ろからの足音が途切れた事に気が付き、ソルが振り返った。後に続いて階段を降りてきているはずのクレージュが蠅燭を見上げたまま、数段上で立ち止まっている。

その後ろで前が止まつた為に進めないレイスが口を開く。

「止まんなつて。俺まで進まれへんやろ」

「あ、ああ、悪い」

「何や？ なんかあるんか？あの蠅燭」

「いや、ちょっと珍しかつただけだ」

再び歩を進め始めたクレージュに続いてレイスもソルも歩き出す。

『何があつても、あんたはこれを飲むべきじゃない』

ジュンが言つた言葉がクレージュの脳裏で反芻する。はんすう

（そんな事は知つてゐる。飲むつもりも、飲まされるつもりもない）
そう、実際、薬の姿も言葉も出てくる前にゴウムを一掃した。たとえ待ち伏せされていなかつたとしても、最初から即座に倒す計画をしていた。

それほど警戒をしていた。

（だけど、これは・・・）

クレージュは胸中毒づいた。この建物に入つてから、ずっと感じていた体内の違和感があつた。風が無い事でいまいち魔力が安定しないせいだと思っていたのだが、違つたようだ。

黒い蠅燭など、この世界で初めて見る。ビックの国でも、表立つて生産されていなはずだ。

確信という名の推測だが、あの蠅燭は、ほぼ間違いなくディープブラックを盛り込んで出来ている。火を灯す事により成分は大気に溶け込む。酸素を取り込むために呼吸しても、そして、肌からもディープブラックの成分を体内に取り込んでいたことになる。

クレージュは先ほどのラミアとの戦いを思い返す。たとえ己の属性のものだとしても、魔法力で何かを発生、召喚し操ることは、当人にとっても負担になる。魔法使い達が魔力を引き換えに炎やら雷を呼び出すだけで操る事をしないのはそのためだ。

実はラミアを倒したとき、思いのほか楽に風を召喚できていた。故に、思つていた以上に残虐な倒し方をしてしまつていた。

倒した後、しばらく気分を浮上させられなかつたのはそのせいだ。いくら魔獣とはいえ、惨い事をしてしまつた、と自分で自分の行動に驚き、打ちひしがれていたのだ。

だが、今なら対ラミアに対して、そうなつてしまつた事にも頷けた。人を魔族にするくらいの驚異的な力があるティープブラックの成分を取り込んだせいで、自分の中の封印が緩んでいる。

気が付いてしまつたせいでクレージュは認識してしまつ。

自分の中に生きる、もうひとつ魂の鼓動を。

自分では制御しきれない力がそこに秘められている。

せめて小さな窓でもあればそこから風を呼び込んで大気を浄化させるのだが、この通路はまるで計算づくのようにそれをさせてくれる隙がない。

部屋までたどり付いた時間を考えると出口まではもうしばらくかかりそうだが……絶えられない距離ではないはずだ。押さえ込めない時間ではない。

あの薬は効果は高いが、即効性ではないはずだ。

『心配しなくとも大丈夫だつて。俺はティープブラックには飲まれないよ』

ジュンに言つた言葉が思い出される。

そう、飲まれない。飲まれてはいけないのだ。

自分は自分を固持しなくてはならない。それが、もう一人の自分との絶対の約束なのだから。

クレージュは唇を強く結んだ。

出口にたどり着いて、外に出た瞬間、頬に触れる風にクレージュは安堵した。とにかくも、ティープブランクの充満した建物から開放されたのだ。これ以上の攝取は、まず無くなつた。

そんなクレージュを横目にレイスが小型の無線機を取り出し、ジン達に連絡を取る。

軽量化された無線機はイヤホンとマイクをつなぐ線だけで構成されていて、耳につけるだけでその機能を發揮してくれる優れものだつた。

「おわったでー、迎えにきてー。もう建物の外に居るから」

軽口で無線と会話をしてから、レイスは一人に報告する。

「すぐ来るつて、空飛ぶバイク」

「あのバイクかつこいいよね。どうやって飛んでるんだろ」

「確かに。動力は謎やな。なあ？クレージュ、船乗る前にシャワー借りるんやろ？」

「え？…悪い何かいつたか？」

「船乗る前にシャワー借りるやろって言つたんや。お前血まみれやし…」

「ああ、そうだな。確かにこの姿のままじゃ乗船拒否されそうだ…」

レイス、スカイゲートに戻るまで預かつておいてくれないか？」

差し出された袋を受け取つて、レイスは少し驚いた。

「ええけど、これつて…」

「スイの魔法力」

「…お前自分で持つとかんでええんか？」

「シャワー浴びたりする間、その辺においておくわけにもいかないからさ。頼む」

「別にええけど…ちょっと顔色悪いぞ、大丈夫なんか？」

「心配ないさ。少し戦闘を派手にやつたからな、疲れただけだ」

「そか…」

嘘だとわかつたが、相手が嘘で済ませたいのならレイスはそれ以上追求したりしない。

現実世界でもそうだ。深く相手に入り込む追求は、レイスにとつてあり得ない行動だった。言いたくないならそれでいい。言いたくなつたら聞く。簡潔な考えがレイスの中にはあった。

しばらくすると迎えが到着して、三人はアンダーグラウンドへと一旦戻った。クレージュが浴室に入っている間、レイスは弾丸の補充のためにジンの店を訪れていた。相変わらず数名の子供が狙撃の練習をしている部屋の隅のテーブルで、ジンが銃を受け取る。

「助かつたで。この銃なかつたらスライムの相手、俺には出来へんかつた」

「そうか、役に立つて何よりだぜ。ついでに状態見ておくから少しだけ時間くれよ。もつてくんだろ?」

「もちろん持つていく」

間違いなく、ジンは自分より年下だ。

だが、彼が今行っている作業はレイスには出来ない銃のメンテナンスだった。

一度使つただけなので、中まで開けて部品を触るわけではないが、銃のどの辺の調子をみているのかさつぱりわからない。

「…何を調べてるん?」

「言つたつてわかんねえだろ。黙つてな」

なんとなく予想はしていたが、やはり軽くあしらわれてしまった。仕方なく近くにあつた椅子に座つて、ジンの作業が終わるのを待つことにした。

それから数分が経過した頃、入り口のほうが少しづわめいた。ジンとレイスがつられて顔を向けると、ジンがこちらに歩み寄つてきていた。

「え？… めずらしきな、お前が出来くなんて」

「うん」

少し驚いてジンが声をかけたが、ジュンは愛想のない返事をさらりと返した。そのまま、言葉をつなぐ。

「奥の部屋、借りるよ？」

「いいけど… 散らかつてゐるぞ」

「人が入れれば十分だ。あと、レイス。君も来て」

「え？俺？なんで」

「問答無用だ 黙つて従いな」

「…しゃーないな…ジン、銃のメンテよろしく」

「おう」

一連の出来事は珍しいことらしく、その場にいた全員があつけにとられた顔のままレイスとジュンを見送った。

部屋の中は本当に散らかっていた。

壁沿いのいたるところに金属の部品が入った箱が積み上げられていて、そこに入りきらなかつた部品や收まらない大きさのものが床に転がつている。

中央にある大きめの机は作業台、といったところだらう。

がつしりとした鉄製で出来ていて、脚は床に固定されていた。

そこにおいている電球の明かりを、ジュンが点灯させた。

レイスはドアを閉めると部屋全体の電気を探したが、スイッチをつけられなかつた。

仕方なく、光源がある作業台の傍に歩み寄る。その際、ジュンの姿を改めて見たが、やはり可愛らしい子供の姿をしている。

（見た目だけで言えば、どっちかつて言わんでも女子…）

そんなことを考えていたレイスに、ジュンは作業台の傍にあつたパイプ椅子を組み上げて差し出してきた。

そのまま質問が飛んでくる。

「何を言われようとしてるか。わかるよな？」

声も容姿も、誰もがだまされそうな愛らしい姿なのに、田の色だけが、鋭くレイスを見てくる。

このギャップには何時までも慣れない。ともあれ、話に集中するべきだ。

レイスは一呼吸、間をおいた。差し出されていたパイプ椅子には座らず、背もたれを軽く掴んだだけだった。

話に集中し始めるど、少し焦る。

何を尋問されようとしているのかはわかつている。

IDカードだ。

レイスは戸惑つた。

たとえば、元の世界で教師に悪事がばれた場合、堂々とやつたとい張り、悪びれない。はいはいと説教を聞き流し、開放されるのを待つだけだ。そこには、罪の意識は無い。

だが、今回は自分を優先してくれたクレージュの存在が思い出された。それだけでもう、罪悪感という文字がレイスの中に生まれている。

「ばれてるから、とりあえず返してくれないか

言われて、レイスはすつと持ち歩いていたIDカードを作業台に置いた。

謝れば何か変わるだらうか？少なくともクレージュに影響は及ばなくなるだらうか？

だが、謝罪という行為には慣れていない。タイミングも、切り出しこもわからなかつた。

更に間を要して、視線が揺れ動く。

「…ちよつと興味で…元おつた世界にも同じようなのがあつたから

…」

「『ちよつと興味』くらいで盗まれちゃたまらないんだよ

「そこらに置いとくほつも悪いかと思うけど」

「自分のことは棚に上げて管理体制の指摘か。いい『身分だな』

ジュンがIDカードを手に取つた。手で遊ぶように机に軽く角を当

てる。

コン、と小さな音が立つた。2回、3回、ジュンはカードを机に当てる音を鳴らした。

その手の動きが止まつた。音も止まり、部屋に静けさが帰つてくる。

「本来なら重罪だ。盗みも、違法行為も」

言い放つて、ジュンはレイスと視線を合わせた。

視線を捕らえられたレイスは、そこから外せなくなつた。

感情が読み取れそうにない、暗い暗褐色の瞳が捉えて離さなかつた。

「簡抜け、なんだよ。アンダーで起こる事はさ。特に機械事に関しては、俺から何一つ逃れる情報はない」

「…」

「事の隠蔽に協力した相手がいることも知つてゐる」

どうにかして、クレージュが一緒にいたことだけは知られないようにな出来ないか。そう考えていたレイスの言葉を先回りして、ジュンが言い切つた。

文字通り、ぐうの音も出なくなつたレイスに、ジュンが思わぬ言葉をかけた。

「取引をしようか」

「取引？」

「あることをやつてくれれば、昨夜の違法行為はすべて闇の中。悪くない話だろ」

「…取引内容による」

「これを、肌身離さず持つていてくれるだけでいい」

カードをポケットにしまつた代わりに台の上に出されたのは、レイスの手のひらにすっぽり収まる大きさの黒いフェルトの袋だつた。口は紐で締められて、開かないように硬く結ばれている。

「中身何や？」

「ちょっとしたレアアイテムさ。まあ、特別効果があるわけでもないけど、一つだけ。元の世界に帰るまでの事は他言無用というのが約束事だ」

「つまり黙つてこいつちの物、持つて帰れつて事か。これも違法になるんぢやつか？」

「心配しなくとも、そちらの世界が滅びるとかそういうことはないはずだから。害は及ぼさない。直接、手も出していない。だから違法行為にもならない。…だろ？」

「…含みのある言ひ方やな？」

「そう？」

「しかも、これを知つてゐるのがお前と俺だけやとしたら、俺が勝手

にもとの世界に持つて帰つたアイテム。つて筋書きが完成か」

「意外と頭が回るんだな。それともこいつこいつこいつにだけ経験が豊富

なのか」

ジユンが少し愉しそうに瞳を細めた。幼い少女に見える少年のその表情は、少しだけプレイジを連想させた。

「共犯者は多少罪の意識が無ければ簡単に裏切るからな。これで事が表ざたにならないなら、簡単な約束だと思つけど？」

「…わかった。それでクレージュの足ひつぱらんで済むなら、ええわ」

「それじゃあ、よろしく。俺の用事はこれで終わりだから」

最後の最後まで淡々と用事を済ませると、ジユンは部屋を後にした。

「—— 読あつがといひやれこました。」

帰路に着く。

アンダーグラウンドに、普段から国交船が立ち寄る」とはない。その事を知ったのは、帰りの船を三人揃って部屋で待っていたときだつた。

ほかとは明らかに違う国、さらに地上はある有様のうえ、めぼしい資源も作物もない。

どの国もあえて港を作れと要請もしないし、国交をしようとしたまま数年が経過しているのだといつ。

地下に彼らが住んでいることすら知らない国だつてあると、クレージュが言つた。

アンダーグラウンドには、もともと作物などが育てられる高度な機械があるらしい。

そして、それの加工も、食品にするまでも、すべて機械が行つてくれるそうだ。

どうしても足りないものは、彼らがどこからか手に入れているのだろ。

ジュンは自分たちの情報をアンダーグラウンド外にもらうことがないため、多くが謎に包まれている。

それがまた、ほかの国との交流を遮断してしまう理由となつていて。どこも、どんな人間が住んで、そんな生活をしているのか、全くわからない相手とは手を取り合いたがらないものだ。

そんな状態であるから、船を準備するにはそれなりのやり取りが必要になる。

前もつてジュンが立ち寄りを要請した船は、クレージュを乗せると、いつ条件があるため立ち寄りを受諾した。

スカイゲートが絡んでいなければ、やはり好んで立ち寄る場所ではないといふことだ。

国交もない、流通経路もない。

彼らは普段どうやって足りないものを手に入れてるのかとレイスが訊くと、クレージュは少し寂しそうな、複雑な顔をして返事をした。

「わからない」と。

子供ばかりが集う場所だ、手の一つや一つ、差し伸べる気では居た。力になりたいが撥ね付けられるといつのは、なんとも表現に苦しいものだった。

スカイゲート行きの船に乗り、三人はその日の夜には波の上に居た。

人数分のベッドと小さなテーブルセットしかない簡素な船室で、ソルは暇をもてあそんでいた。

ベッドで転がりながら、同じく隣のベッドに転がっているレイスに話しかける。

「今現実って、どれぐらい時間たつてるのかな?」

ソルと顔を合わせながらレイスはチャットを思い出した。元の世界とコントакトを取ったことは内密にして置くべきだと判断し、曖昧な返事を返す。

「さあ。期末辺りちゃう?」

「期末つていつ?」

「ああ、そうか。お前つて中学成り立てやから知らんか。十一月中旬や」

「・・・そつかー、もうすぐクリスマスなんだあ・・・」

「お前、出席日数足りんかったらどうなるんや?・・・義務教育中やから関係ないか?」

「どうだろ?知らないよそんなこと。まあ多分、親の名前で学年上がれるけどね」

「親の名前? 親は何してるんや? 長期の外出が多いって一ヵ

スでゆうてたけど

「大手の社長。両方社長だよ。オレが継ぐ頃に合併するらしいけど」

「ほんなら将来は合併した超大手の社長ってことか、お前。 . . . 」

「うう? 良くわかんないよ。金には困らないんだなって思つけど」

その悪気のない少年の台詞に少し顔を引きつらせたレイスが、今度は興味たっぷりの質問に答えるめぐりになる。

「ね、レイスは?」

「何が?」

「元の世界で退学にならないの? 高校生でしょ?」

「べつに、高校なんてどうでもいいし」

「やうなの? 世間じや高校と、出来れば大学も出たほうがいいって言つじやん」

「一般論やろ? それに大学出たほうがいいのはお前みたいに、大会社の社長のイスが回つてくる奴だけの話やと思つけど?」

「え? なんで?」

「例えば職人なんかは、学歴より腕つて事や」

「職人になるの?」

「例えばの話や。将来のことなんか考えた事無いわ。まともに働いたつていい目見るとは限らんしな。視点を変えたら弱みに付け込んでぎりぎりのラインでヤバイ商売してる奴らの方が生活水準ええ見たいやし?」

「でもそれって、つかまるリスクもある。つて事だよね?」

「ううや。けど、金が欲しいんやろ? 遺産にしたつて、取り合いでなる世の中やから」

「……そりこえば『両親亡くなつてるんだよね。それこそ、遺産とかあつたんじやないの?』

「そんなもん残つてたらオレがこんな真面目に学校とか行つてると

思うか？遊びまくるで

「そんなものかな？」

「多分な…俺ちょっと外でるわ

「外？もう真っ暗だよ？」

「そうだね…まつて、俺もいく！」

「夜の海のど真ん中つて、そろそろ行かれへんやろ？」「急に一人になりたくなつた。そのための「外に出る」発言だつたのだが、ソルが付いてきた。

お陰でひとりになれなくなつた。

だが、それを思ったほど自分が嫌悪しないことに、レイスは少し驚いていた。

そして一瞬、元の世界の一一番近い存在だつた友人が思い出された。もともと友人はチャットなんかに頻繁に参加する人間ではない。昨夜アンダーグラウンドからアクセスしたときにある場に居たのは、レイスがよく参加していた場所だつたからに違ひない。

探してくれていた…のかもしれない。

チャットで並んだ言葉が怒つっていた事を思い出して、レイスは少しだけ口元を緩ませた。

どうしてこんなことになつている？

知るかよ、俺だつてこんな状況招きたくないつての。

大体にして、最高位が眠りに落ちるとは何事だ。お前、騎士になつたんだらうなつたわ。

ではどうしてこんなことになつている？

だから知るかよ！わざとじやないし！一時的なものだし、しばらくじつとしといてくれよ！

その頃、甲板で。

クレージュは満月の映る海を見ていた。昼とは全く違う黒い色の海。

夜の海は月が太陽の代わりに地表を照らしているのだとよくわかる。船の際でそれを見下ろしてから中央に設置されたベンチに座り、夜空を仰ぐ。

「・・・はあ・・・」

大きなため息がもれる。海風が冷たいが、それは高まる気持ちを抑える協力をしてくれる。未だディープブラックの効力が完全にぬけ切つていらない体は、熱を帯びていた。

日が暮れると人の気配がなくなつた甲板は、クレージュが全身の力を抜ける格好の場所となつた。途切れることのない風がクレージュを包むようにやさしく触れていく。

心地よさに身を委ねて無言で夜空を見上げていると、横に誰かが座つた気配を感じてそちらを見る。

「こんばんは。いささか、お疲れのようですが大丈夫ですか？」柔らかな雰囲気をかもし出す青年が同じベンチの端に座つていた。すつきりとした顔立ちで、歳も若い。まだ三十手前程だと思われる。こぎれいに細かい刺繡をされた法衣からの香りが鼻腔を掠める。
「別に、心配されるほどでも無いけど・・・。珍しい人には会つもんだな、僧侶？ 祭司？」

「祭司です。もっとも、今は各地を回つておりますが」

孤児院や教会で見るシスター や神父に似通つた姿だが、根本で違うのは斜めがけの襷たすきと、それに染み付いた独特な香の香りだ。スカイゲートではあまり見かけない信仰が伺える。

「・・・宗は？」

「今は、私の思う神を崇拜しております」

「属さない祭司つてわけだ。それがどうしてこのスカイゲート行きの船に？」

「先ほども申しましたが、今は、各地を回つておりますゆえ・・・」「何のために？」

「天より授かつた力で、人々を苦しめる魔の者達を封じて回つています。祭司という職は、今の私には合いませんね」

「スカイゲートには活躍の場所は無いと思うけど？」

「ええ、存じております。道は違うとはいえ、魔道の最高位、スイ・レン様の加護の大地でありますから。 ただ、その地を訪れて見たいというのは、道の違う者の中でも夢描く事なのです」

落ちてきそうな星空の下、ゆつたりと語られた言葉が終わる。

夜の海が静けさを取り戻し、波が数度、緩やかに船を揺らした。

その直後、突如として船が大きく揺れ、爆発音が響いた。

「何だ？！」

ベンチにしがみついた後、辺りを見渡していると、なおも爆発を続ける船体の側面から炎の色が夜の闇を染め上げてきていた。炎は瞬く間に燃え広がり、甲板は助けを求めて逃げあがってきた乗客で一杯になり始めた。先刻までの静けさが嘘のように、悲鳴が周囲に広がる。クレージュが船室に残してきた一人を探し始めた刹那、船が大きく傾き始めた。

長く持たない。

直感で感じるが、決して、小型とは言えないこの船の乗客全員を助ける方法など到底思い浮かばない。

炎の前では風の力は無力に等しい。力を増幅させることは出来ても、燃え盛る炎を鎮圧することは出来ないので。それこそ、船を壊す勢いの突風でも作り出せば話は別だが、それは現状、何の得ももたらさない。

傾き始めた船体から、なおも爆発を繰り返す船は、闇の海に飲み込まれ始める。つかまる場所を得られなかつた人間、炎に巻き込まれ、水を求める人間、逃げ場を求める人々が競うように海に飲まれていく。

（・・・まずい・・・！）

恐怖の悲鳴と混乱の叫び、嘆きが風に乗り、痛く殴りつけるようにクレージュに流れ込みはじめた。普段から他人の感情が乗つた風に、己の感情まで飲まれてしまう事の無いように、クレージュは自分の周りに魔法防御を張っていた。それが打ち破られるほど、その場

の空気は荒れていた。

過去の経験が脳裏をよぎる。

ひどい感情に飲まれた時、自分の居た場所が竜巻に飲まれた後のようにになつていていた事がある。

純粹な精霊の力を継ぐ者ならありえない、力の暴走。

分かる。もう一人も、感情の風に吹かれている。

（まずい。まずい・・・！ 飲まれるな・・・！）

思考に入り込む荒れ狂う感情に飲まれないよう自分を保つ。そんなクレージュの耳に、近距離から空気を裂く様な叫びが届いた。

「イヤアアアツ！－！」

反射的に声のほうに手を伸ばす。視界に少女が映つた。指さきを掠めて、小さな体が黒い海に飲まれていく。

風竜を、『フウ』を呼び出したところで全員は乗れない。
打開策は見当たらない。

船体は脆くも崩れ去つた。

「—— 読あつがとひらりやれこました。」

アクシデント2

船の沈没は、スカイゲートの海域で起こっていた。

レオンハルトに沈没の報告が届いたのは、事故から数時間後だった。救援部隊の手配、医者の緊急収集、被害者の臨時収容場所。深夜にして、レオンハルトの周りは忙しく動き始めた。

「レオンハルト様！ フウが帰つてきました！ 事故に巻き込まれてしまつた様です！」

全速力で駆けてきた兵士の慌しい声を受けると、レオンハルトは中庭に走つた。到着すると、ちょうど全身海水にまみれた竜がゆつたりと降り立つたところだった。近づいて、背中にぐつたりと身を預けているクレージュの様子を伺つ。

大きな外傷はないが、気を失つてしまつてゐる様子だった。心配そうに覗き込んできたフウの額を撫でてやる。

「潜つたのか？ 水は苦手だろ？ ・・・。クレージュを預かるよ、ありがとう」

言葉を聞くと、レオンハルトの手を鼻先で小突いたあと、フウはその姿を消した。残つたのは、海水まみれでピクリとも動かないクレージュと、なぜか、一緒に乗つていた祭司。

「・・・すみません、無我夢中で、気が付いたら助けられていて・・・」

そちらも海水まみれで、一目見るだけで海上の事故に巻き込まれた事は理解できた。とりあえず相応の処置をとらせるように祭司を兵士一名に任せる。その後、用意された担架にクレージュを乗せ、部屋へと運ばせた。医師の診断を逐一聞いていたいのが本音だが、そつは言つていられない現実が次々と押し寄せる。レオンハルトの判断、指示を仰ぐ者は後を絶たない。

恐ろしく長くもあり、恐ろしく短くもあつた一夜が終わりを告げ、日が昇る。

船体は爆発と波を受け、形すら残つていなかつた。船の欠片にすがりつき生き延びた者は、運が良かつたといえるだろう。炎に飲まれてしまった者や、浮遊物にたどり着けなかつた者、未だ、行方不明の者達。

日が昇り始めた頃から、彼等の思い人達が収容所に到着し始めた。一様に涙を揃えて。

スカイゲートの城で唯一、電気機器に囲まれた部屋にレオンハルトは立つた。スクリーンの向こうに映るのは、船の経由地、アンダーグラウンドの統治者、ジュンだ。

相変わらずのゴーグルをつけた姿でジュンは声を発する。

「お忙しいところ、通信をお願いしてすみません。俺達の国に立ち寄つた船が爆発したと聞きました。詳細は大体お伺いしましたが、正直、驚くばかりです。何か不具合があつたのか、魔物が何かのせいなのか…、こうも船体がバラバラになつてしまつては、さすがに俺達の解析能力を持つてしても原因の見つけようも探しようもありません。…時に、風竜の騎士の一行は無事でしょうか?」

「残念ながら、レイスとソルの消息が判明していない」

「そうですか。こちらとしても、ゴウムと一緒に潜んでいたラミアまで倒していただいた借りがありますので、情報の収集に協力をしたいと思つております。よろしいですか?」

「手を貸してもらえるならありがたいことだが…」

「残念ですが、国際的な立場状況を考えても、表立つてこのアンダーグラウンドに何かしてもらつて喜ぶ相手はいないと思います。スカイゲートの王が願うよつた救護救助の助けは、俺達には出来ません。とはいへ、最大限の形で協力させて頂くつもりではいます。とりあえずは風竜の騎士と一緒にいた二名の救助をお任せ頂けませんか?位置が把握できるアイテムを、彼らは持つていています」

「…わかつた、では、そちらはお任せしよ。良い知らせを期待している」

「ありがとうございます。それと、こちらが普段使用している効果の高い薬品等はすぐに届けをせるので、少し自由に使ってください。ただ、あまりひびきのものだと書いて使用されるのは控えた方がいいと思います」

「それはどうして？」

「薬品がアンダーのものだと知れば、おそらく使用拒否する人が増えますよ。助かった後に問題定義する人もです。土地に踏み込むだけ足から腐っていくと思つていてる輩も居るくらいですから。…それでは、用件ばかりで申し訳ないですがこれで…」

「ジュン、一つ取り違えないでいてほしい。君たちの国に立ち寄つたからといって、君たちが全責任を負わなくてはならないことじやない」

「…ええ、当然でしょ。考えなくともわかる事です…多少は覚悟をしていますが」

ジュンが珍しく会話のやり取りに少しだけ間を要した。僅か一秒ほどだが、レオンハルトにはそれが引っかかった。

そんな空氣を読ませること事態、ジュンという少年を相手には珍しいことだったのだ。

言葉を選んで、レオンハルトが返事を切り出す。

「何があればすぐに話してくれないだろ？場合によつては助力することも出来る」

「もう何度目でしようか。その度に同じ答えをお返ししているはずですが」

「しかし…」

「分かりますよ。俺達に貴方方の衣を着ると仰つていいのでしょ。スカイゲートが付いているから手を出せない国になれと」

包み込んで話していたレオンハルトの考えを、ここまで的確に表現した言葉はほかにあるだろうか。それほどどの言葉だった。

今現在、アンダーグラウンドは恐ろしい場所だというイメージで知れ渡つているが、それはあくまで想像が走らせた噂の痕だ。

蓋を開ければ中身は子供ばかりで軍事も整っていない。そんな場所だと知れたら、彼らは恐ろしい将来を歩むことになるかもしない。レオンハルトは常にそれを気にしていた。故にこの手の事は何度も打診を試みているが、何度もかわされ続けている。

完全に配下に入れというわけではない。ただ、表立てだけでも繋がりを立てれば、今、スカイゲートに剣を向ける相手はない。つまり、アンダーグラウンドは安全になる。

ジュンがいつたん開こうとした口を閉じた。そして、間を置いた後、言葉をつなげた。

「人間というのは恐ろしい生き物ですよ。一を手に入れれば、二が欲しくなる。例えば、衣をお借りしたとして、貴方が俺達の全てを知つたとします。貴方は、アンダーに手を出さないでおけるとお思いですか？」

「それは…」

「ないつもり。ですか？断言できますよ、無理です。貴方はより良い生活を出来るようにしようと必死になるでしょう。スカイゲートを見ていればよく分かります。とても平和だ」

「…」

「どの国も口をそろえて精霊の加護、最高位の加護だとかいいますが、信じていないこちらからしてみれば全て貴方の政策のお陰だ。…強いて望むことを言わせていただければ、ここから旅立つた者がスカイゲートに渡ることがこれまでありました。これからもあります。彼らを受け入れていただければ、それが一番ありがたい事です」

「ジュン、君は行く末をどう見据えているんだ？」

「ここに住む人間の輝かしい未来を…？というところでしょうか。話が曲がってきましたね。お互い時間も惜しいですし、ひとまずこれまで失礼いたします。報告があればまたご連絡させて頂きますので

…」

言葉と共にスクリーンからジュンの姿が消える。

相変わらず、子供と思えない落ち着きと頭の回転の速さを見せるジユンとの会話が終わると、レオンハルトは大きく息をついた。

ジユンはスカイゲートとの通信を終了させると、モニタに別の画面を映し出した。そこには地上、グラウンドゾーンの映像が映される。モニタの中にはジン、マコトの一人の後ろ姿がある。そして、彼らの前、浜辺までの間に大人の姿が2名ほど、一人はご丁寧に訪問着まで着用している様子が見受けられる。

ジユンは機械類が置いてある部屋から繋がっている自室に入ると、衣類棚を眺めた。

実際は眺めるほどの数の洋服が掛かっているわけではないし、品質のよい衣装があるわけでもないが。

その中からアンダーグラウンドでは珍しい法衣を選んで身を包むよう体に巻きつける。

布が余る作りである法衣は、ジユンの細い体を隠し、深いフードを被ると性別を判断させる顔を隠す。

大人の目線から見れば、見えても口元くらいだらう。ジユンはその姿で地上に赴いた。途中、前を通過した姿見に、法衣で全身を隠した、少し不気味に見える子供の姿が写った。きっとレイスが見れば、見覚えのある彼に似た姿に驚き目を見開いたに違いない。そんな姿だった。

風は微風で、砂浜に定着させている小船は波に乗って揺れるだけだった。

沖合いには大きな船が泊めてある。目的の陸地に港がない為、砂浜に小船で近寄った、そして、大人達は上陸した。

一人は小船を漕ぐ為の下働きなので、いまだ小船に乗つたまま。一人は護衛兵だろうか。大層な鎧兜こそつけていないが、腰には剣を下げている。

そしてもう一人は、質のよい布で出来た訪問着を着用していた。

髪も乱れる隙がないほどに整え、表情は少し小難しい感じの中年男性だ。

左胸につけた國をあらわすバッヂは赤・黄・緑、三色に彩られた鳥の形をしている。

このマークは『マリエール』といつ國の国旗に描かれているものだつた。

その大人に対しているのが、アンダーグラウンドのジンとマコトだつた。

きちんと足を揃えて直立する大人に対して、子供の対応は何かにもたれ掛かたり、座つたりだ。

その上会話の対応は、下手をすると大人を小ばかにしているようだとられかねないものだつた。

「君達の統括者と言う者は何時ここに来れるのかね？」

「だから、だまつて待つて言ってんだる。何回言わせるんだよ」

「ではせめて、室内で待たせてもらつことは出来ないだろ？ どうもここは…」

そういうつて訪問着を着た大人 マリエール國の外務担当らしいが、とにかくその男性がハンカチで鼻と口元を軽く覆つて周囲に視線を動かした。

別段、何かが臭うわけではない。強いて言えば海が酷く濁つているが、数年前に比べれば悪臭も色も随分とマシになつてている。

先入観と噂と風評に、ただ、毛嫌いの念を露に男性の眉が顰められた。

相手の言葉と表情にマコトが面倒そうに答へ、ジンが続く。

「あのさ、勝手に上陸してきた奴を中に入れinいわないじゃん？ あんたらの國だつてそだろ」

「そんなんに心配しなくても数分で致死量に達するようなガスとか毒撒いてねえよ。そんな状態で俺らが出てくるわけねえし。大体、こがどんな場所か分かつてきたんだる。我慢しろよな、それくらい言葉に耐え切れず、兵士が一步步み出て剣の柄に手を添えた。

「お前達、いい加減言葉を正さないか！失礼の度が過ぎるだ」
一喝された二人は顔を見合わせた後、示し合わせたように笑いあつた。

「すげえ、聞いたか？今の。さうすが国の兵士つて感じの台詞だつたな！」

「あれか？国のためにには命も投げ出す…ってのも言つのかな？聞いてみてえー」

全く怯えず、それどころか悪態をつき続ける子供に兵士が剣を抜きかけたその時、ようやく全員が待つていた人物が現れた。

「お待たせして申し訳ございません。一人が失礼をしたようで… 一先ず、武器から手を離していただけませんか？」

ジンとマコトがいる場所の中央に、法衣をまとつた姿でジュンは現れた。

男性が手で制すると、兵士は渋々、剣から手を離して一歩下がつた。そのまま、男性はジュンへと向き直つた。

「…君が、ここ統括者、といつ者かね？」

「ええ。マリエールの方と存じますが、わざわざこの様な大地に、どういつたご用件でしうつか？」

しばらく、間が空いた。

出てきた統括者が子供の背丈、そして法衣で全身を覆つているのだ、相手が戸惑い、思考をめぐらせるのも、ジュンの想像の範疇だつた。「失礼、質問の前に名乗るのが常識ですな。私はマリエール国、外務に携わっております、デザート・クーペと申します。以後、お見知りおきを」

「じ…寧にありがとひざいます。統括者、ジュン・ハルカと申します」

「…お顔を拝見させていただいてもよろしいでしょうか？」

7割がた、そういわれるだらうと思ひながらも深いフードを被つてきた。

体つきは体质や種族で大小さまざまに変わるが、顔つきだけは人間

は成長度合いが大体表れる。

童顔や老け顔だって居るが、それにしたつて大体が前後の年齢が妥当となる。やはり年齢、性別が一番分かりやすいのはそこだ。

自分が相手にどういう印象を与える外見をしているか、知らないわけではない。だから出来ればこのまま話すほうがやりやすかつた。更に言えば、会話をするにあたつて、一番考え方を見抜きやすいのも相手の目だ。

顔を見せずに話を続けることも可能ではあるが、背景にあるのが船舶の事故だ。

断ると今の状況では不利を招くだけになる。

「お話をさせて頂くのに、これでも支障はないかと思つたのですが

…」
ジュンがフードを脱ぐと、ディザートと兵士、二人揃つて驚いた表情を見せた。

まさかと思っていたが、本当に子供だと判断したからだ。そして、顔つきからは女子だと思ったのかもしれない。

その間から容姿性別に関しての質問をされる前に、ジュンは言葉を切り出す。

「本題に入つていただきてもよろしいでしょつか?」

「ああ…それでは…。この度、私たちの国から出て、こちらに立ち寄つた船が重大な事故を起こしました。無論、国を出る際には船舶の点検など行わせているので、こちらで何か異常がなかつたか伺いに

「…」
言葉の最中に、ジュンの瞳つきが変わったのに、ディザートの言葉が思わずとまる。

ジュンの瞳からは表情の色が消えて、無感情な瞳が彼の目を真つ直ぐ見上げていた。

「今、ご自身が体験なさつたように、ここには港がありません。船は沖合いに停泊させて、小船で往復していただきて、乗船となります。クレージュ様が乗船された時も同じ方法です。従つて、俺達に

船の様子はわかりません」

「ではどこでこのような事故が起こる原因が生まれたのか、今後このようなことがないよう追求を重ねていかなくてはならないと私共は考えてあります」

「でしたら、わざわざお越しただかなくても、母国で調査を始められればよろしいのでは?」

「もちろん、技師達が総出で調査を開始しておりますよ。それについて提案がござります。過去、地上に存在したグラウンドゾーンは、それは素晴らしい独自の技術を持った国だった。あなた方は、それらの知識をお持ちなのでは? 数名の知識を持った者をわが国に派遣していただき、技師たちと力を合わせて…数名で心細ければ、在住の数によりますが全員をお迎えすることも…」

「… ああ、もういいよ、めんどくせえ」

デザイナーの言葉をさえぎったのは、先ほどまでと同一人物とは思えないジュンの一聲だった。

「? !」

「言ひ回しがめんどくせえって言つたんだよ。長つたらしい言い方すれば子供は付いて来れず、言い包められるとでもおもつたんだろう」驚くデザイナーを、ジュンが今度は強く睨みあげた。

「つまく言い包めて技術盗めるとこだけ盗もうと思いました。つてトコだろ? 見えすぎてやつてらんねえぜ。猫被るのもばかばかしくなつた」

「何を… !」

「それに何だ? 全員来いだつて? あんたらに必要なものだけ獲られれば、行き当たるといふは市民権も得られない下働きがいいとこだ。見え透いてんだよ」

「… つ」

「大当たり? 顔に出てるぜ? だいたいさーあ、あんたらえらく早い到着じゃないか? 事故からまだ一日と経つてないのに。どうして? 俺がそこ、見落とすと思った?」

「私達の乗船した船がたまたまこの近海に居ただけで

「ふうん？たまたま？100歩譲つて外交で外務担当が乗つた船があつたとして、だ？偶然、ここに立ち寄る分の燃料を積んでいて、偶然に『丁寧に小船まで乗せていた？すごいねえ？』

ジュンがそこまで言つたあたりで、兵士が耐え切れず剣を抜いて踏み出した。

「口を慎め！」

「抜いたな？じゃあ俺らも遠慮なく！」

それが合図のようにジンとマコトが銃を構えた。いくら鍛えている兵とはいえ、近距離の銃弾の早さから主と自分の身を同時に守るのは至難の業だらう。

銃を構えた一人の中央で、ジュンは微かに嗤つた。

「交渉は決裂です。どうぞ、お引取りください。お疲れ様でした」

アクシデント2（後書き）

「一読ありがとうございました。

まったく予定に無かつた新しい文章の登場となりました。

まさにアクシデント。（苦笑）

終了章がまた伸びてしまいそうですが、お付き合いいただければうれしいです。

翌日、クレージュはゆっくりと目を覚ました。

見慣れた天井が視界に映る。午後の緩やかな日差しが窓から差し込み、心地よい風が頬を撫でて行く。

「・・・」

クレージュの目覚めに気が付いた使用人が数人足音を立てて走り去るのが聞こえた。残つたうちの一人が声をかけてくる。

「クレージュ様、ご気分はいかがですか？」

そう問われて、クレージュは少し考えた。

体調的な気分は悪くない。だが、感じている感覚は重く苦しかった。そして、まだ体に力を込めるという行動が出来そうにない。心身共に、疲れていた。

「ありがとう、大丈夫」

上手く返せる言葉が見つからないクレージュは、そう返事をしてやり過ごした。

その場の空気があまりに穏やか過ぎて、あの惨事は夢だったのではないかと、願望にも似た思いを抱く。だが、数分と経たないうちにそんな思いは消えてなくなつた。

クレージュを気遣い、部屋の中に持ち込まないよう心がけられているが、スカイゲートの場内は慌しく動き回つていた。

廊下を歩く早い足音、呼吸の乱れ、少し耳を澄ませば、風がクレージュの元に運んでくれる。

皆、疲労困憊だった。

〔深夜になつて、ようやくレオンハルトがクレージュの元にやつて来た。〕

さすがに使用人も仕事を終えている時間だった為、部屋は暗く静かだつた。ベッド横のサイドテーブルに手持ちのランプを置くと、レ

オンハルトはクレージュを伺い見た。

「起きてるんだろ？ 目、開けろよ」

言葉に閉じていた目を開いたクレージュは、レオンハルトを仰ぎ見る。使用人達が居た頃には見せなかつた不安の色が、瞳に浮かんでいた。

「二人、まだ見つかつて無いんだつてな？」

開口一番、クレージュが訊いてきた言葉は、レオンハルトが想像した通りの言葉だった。

自分のことより他人を優先する。

クレージュとはそういう人間だと、レオンハルトは知つていい。この問いかけに対し気休めで嘘を伝えることも出来るが、それは何の意味も持たない。

「ああ、残念だがまだ見つかつていない」

「・・・俺は誰も救えなかつたよ。とても無力で・・・・・俺の手は、どこにも届かなくて」

クレージュは左手を顔の前に上げて見つめた。脳裏には、指先を掠めていつた少女が思い出される。

あの時、少女を助けに飛び込めばよかつたのか？

一瞬迷つた結果、何も助けられなかつた。後悔の思いに満たされてしまつているクレージュに、レオンハルトが声をかける。

「お前の手は一人の祭司を救つたよ。それから、レイスもソルも、行方は不明だが遺体は上がつていない。望みはあるはずだろ？しつかりしろ」

「俺は・・・今も無力だ 成すべき事が思い浮かばない。どうしたらしいだろ？あの船に乗つていた人達はどうしたら少しでも傷を癒せるかな」

「クレージュ・・・」

掲げられた左手首を掴みずらすと、少し伏せられた表情を見下ろす。そこにはいつもの風竜の騎士からは想像できないような、怯えに似た感情が見えていた。

「よく聞け、あの場にお前以外の誰が居ようど、結果は同じだったよ」

「・・・同じ？」

「同じだ。俺が居ても沈み行く船は止められない。乗客の証言からしても、間違いなく何かの事故だ。クレージュが責任を背負う事はない」

語りかけるように言ったレオンハルトをクレージュは少しの間、見上げた。

そして、わずかに眉を寄せてうめく様に言葉を返す。

「俺は風竜の騎士だ。特別な力を持つてる。俺が犠牲になつてでも助けないと・・・周りは納得しないだろ？」

それはレオンハルトがどこからか飛んできてもおかしくないと考えていた言葉だつた。けれど、まさかクレージュ本人から聞くとは思つていなかつた言葉だつた。

言葉に驚いた事を表面に出さないよう、出来る限り落ち着いて返事をする。

「馬鹿なことを言つた。誰かが犠牲になつて納得するなんて・・・」「ごめんな。スカイゲートに、悪評付かなかつたらいいんだけどな」「ぐだらないことを・・・」

「俺が非難されるんなら、それでいいんだけど・・・。つ、ほんとに、何も救えなかつた・・・それは事実だ・・・！」

会話の途中で、クレージュが強く眉を寄せた。それが涙を堪えているので知り、レオンハルトは言葉を止めた。

「あんなに荒れた風を感じたのに、あんなに悲鳴を聞いたのに、助けを呼ぶ声を聞いたのに・・・俺は無力だ！ 誰も救えない！ シイだつて、あんなに側に居たのにこんな事になつて・・・俺は、奪つた命分、償つて生きていく、救つていただきたい、あいつと約束した！ なのにこの有様はなんだ！？ スイもレオンも・・・あの時、俺を

「！」

「クレージュ！？」

羅列する言葉の最後をどうしても言わせたくない、レオンハルトの叫びにも似た声がそれをさえぎつた。滅多に声を荒げない相手の呼び声に、クレージュが大きく竦んだ。

クレージュの手首を握るレオンハルトの手に力がこもる。

『殺してくれればよかつたんだ』

続く言葉は、紡がれない。

スイの一件と、船の一件が重なり、クレージュは耐え切れず涙を流した。自分が居たのに、何も出来なかつた無力さに。そして、今生きていることを誰かのせいにしようとした弱さに。発しなかつた言葉は、きっと相手を傷つけてしまつた。

レオンハルトは掴んでいた手をゆっくりとベッドに戻した。その手でクレージュの涙をぬぐつてやる。

「魔族であろうと、なんであろうと、人のために涙を流す命を殺せらるか？」

「…レオン、俺は怖い…俺の血は、やっぱ『ティープラック』に即座に反応する」

出てきた単語に驚いたレオンハルトに、クレージュの言葉は続く。「グラウンドゾーンで、気が付いたらティープラックを吸い込む形になつてた。久しぶりにあいつの声を聞いた…間違いなく居るんだ、俺の中に…でも、俺は生きたいと思つてしまつ」

「命があれば生きたいと思う、それは当たり前だ」

「あいつは、純魔族だ。闇に飲まれてもないし、人の変異でもない。封じられたり、阻害されたりしなくともいい種族なんだ。なのに俺は、あいつを押さえ込んでも生きたいと思つてしまつ」

レオンハルトは、もうクレージュの言葉を止めようとした。ひとつずつ体に一つの魂が宿つている。それは生きる者として、どれだけ重大なことだろうか。

そしてその存在を自分という存在のせいでの無いものに等しくしてしまっているというのは、生きるうえでどんな重さだろうか。精霊の力により、不老長寿の種族となつた為、それは後何年続くのか。終わりすら見えない。

「俺が闇に、感情に負けてしまつたら… 風の力は恐ろしい破壊の力になる」

荒い使い方をすれば、破壊力では範囲も威力も頂点を争う風の力。突風はすべてをなぎ倒し、渦巻けばその場のものは何もかも奪つていく。

クレージュは過去、森の一部を暴走により破壊した経験がある。破壊した分、クレージュ自身も内面に傷を負つた。そしてそれは、ずっと収まることの無い不安に繋がつていた。

レオンハルトは、クレージュの言葉が途切れるまでずっと耳を傾けた。

「あいつもそんな事望んでいない。俺も一度としたくない。俺は、この先長い命を生きていいいんだろうか？みんなに笑つていてほしいのに、俺がそれを壊してしまつたりしないだろうか。怖くて潰れそうだ…！」

助けて。

そう叫ばれているような声だった。

レオンハルトは子供をあやすようにクレージュの髪を優しく撫でた。

「大丈夫だ、クレージュ。お前はそんなに弱くない。・・・どうしても不安なら、一つ約束をしてやる。完全に暴走を始めたら、俺がお前を止めてやるよ」

涙が溢れる瞳を見下ろして、レオンハルトが微笑む。

「俺はお前には負けないぞ？誰がお前に剣を教えたとおもつてんだ。お前は一人じゃないんだ、安心しろ」

そう、レオンハルトはおそらく自分を救おうと、必死になつて何度も

も手を差し伸べてくれる。

そんな人間だと知っていたはずなのに、言葉にしてもうつて初めて安心に包まれる。思いは、言葉にすることで初めて伝わり、心で触れ合つ。

クレージュの口元が自然に緩んだ。

「…」「めん、なんか、らしくない」としたな。明日にはちゃんとじてるから」

「気にするな。無理をせずにじっかり休養するんだぞ」

「うん。ありがとう」

程なくしてクレージュが眠りについたことを確認すると、レオンハルトは部屋を後にした。

クレージュは、一番最後に精霊の力を得た仲間だった。彼はある理由で最初、小さな子供の姿だった。

普通の子供とは成長度合いが明らかに違い、あつといつまに少年期を迎えた。

やさしく、よく泣き、笑う。悪戯もしたい放題で周りの手を焼かせた。

短い期間だったが、その愛らしさに子供の姿は、暗く長い戦いを続けていた仲間にひと時の安らぎを与えていた。

成長したクレージュは、更に笑顔を絶やさなくなつたが、代わりにあまり泣かなくなつた。

いつから笑顔だけを見せるようになったのか。気がつけば彼は誰からも愛され、誰をも愛す青年になつていた。

クレージュの髪を撫でて落ち着かせた事など、何年ぶりの事だか思い出せなかつた。

直接の子供ではないが、時折、親心に似た感情がわいてくる。

先ほどの出来事はおそらくディープブラックの影響が多い。あの薬は、いろんな形で閉じ込めていることを解き放つと聞いている。

本来は、もつとまともな形で話してもらえるのが一番いいのだが、成長すると人間はなぜかそれが難しくなる。

笑顔の裏側を垣間見ることができて、レオンハルトは少しだけディープブラックに感謝した。

それが少しでも彼の心の緩和につながっているといい。人はそれぞれ何かを抱えているといわれるが、一人ひとりの許容量は異なる。

同じものも個人によつて重さが変わつてくる。そして、それらを抱えすぎると光が見えなくなる。

レオンハルトはほんの僅かな時間、廊下の窓から見える夜の空を見上げ、思いを馳せた。

見上げた空は、光に色を変えられるだけで、本質は常に変わらない。雲の模様で有様を変え、光のお陰で存在する広大で不確かな存在。授かつた力から、人々に呼ばれるようになつた特別な敬称、『空の王』

人はそこに何を求めているのだろうか。

「…柄じゃないな。俺も」

一人呟くと小さく笑つて、レオンハルトは再び廊下を歩き始めた。

「—— 読あつがといひやれこました。」

クレージュの部屋を出た後、レオンハルトにはまだ事故の処理が残っていた。

そのため、自室に戻れたのは、間も無く夜明けを迎える時刻だった。

周囲の人間に半ば強制的に仮眠をとるようにと自室へと向かわされたのだが、本人はとても不服だった。疲れただの、休みたいだの言つた覚えもないし、まだまだ言える状況ではない。

だが、誰も居ない部屋に入ると体は途端に疲れを思い出した。それも当然だつた。それは数日ぶりの自室での休息だつたのだ。疲れを覚えてベッドに腰をかける。が、事故の処理に対して意識が張り詰めていて横になろうと思えない。

上に立つものは指示を出すだけで、後はその道の選び抜かれた人材に任せらるしかない。なんとも歯がゆい立場だ。

レオンハルトの脳裏からは、視察に行つたときに日に焼きついてしまつた被害者たちの姿が離れなかつた。何をもつてして恐怖と消失を補えるというのか、まったく見えてこなかつた。

このような船が爆発する事故など、ここ数年起ていなかつた。誰も、もうそんな事故は起こらないと思っていたのかも知れない。

そういう意味では、この事故は世界中に身の縮まる思いをさせただろう。

そして、もしこれが船内の事故のせいで無いとしたら、あの海域に船を沈められる魔物が出没した可能性も浮上してくる。やらなくてはならないことが、まだまだ山済みだつた。

それにしても、乗り合わせてしまつクレージュも運が悪い。

そう思つて、ふと、純魔族の姿を思い出す。

好んで争つことも無い、漆黒の種族。

力の強さに比例して大きくなる黒の翼は身の丈よりあり、その翼に負けず漆黒の髪と瞳を持つ種族。

肌の色は浅黒く、彼らを見た田で魔族とは違つと見極めるのは正直難しい。

そんな見るからに魔族の彼が涙を見せたときには正直驚いた。数十の遺体の中で佇む姿に、しばらく言葉を失い魅入ってしまったのを覚えている。

『殺してくれ』

そういわれた時には、何か裏があるんじゃないかと困惑したのも覚えていた。彼にまとわり付いていた風の精霊の力を借りて、スイだけが作り出せる浄化の水を何日も浴びる事で、ようやく魔から解き放されたというのに、残つた純粹な心は、殺めた命への罪悪感と、己の弱さをいつも嫌悪する。

今回の事故にしても、自分だけ助かることを拒否した結果の姿なのだろう。それでもしないと、フウが海水にまみれて帰つて来た説明が行かない。憶測に過ぎないが、海に深く飲まれたクレージュを、フウが救いあげたのだろう。早々とフウを呼んでおけば、クレージュが海水に浸かる事も、意識を失うほど深く海に沈む事も無かつたはずなのだから。

遠い空が白み始めて間もなく、レオンハルトの部屋にノックの音が響いた。

自室に誰かが駆けつけるなど、よほどの事ではない限り珍しい事だ。

「誰だ？」

ドアに向かつて問いかけると、外から一人の若い兵士の声がした。

「お休み中のところ申し訳ございません。正門の連絡兵でござります。緊急のご報告があり……え、あ……」

途中で兵士の言葉が止まってしまったのはレオンハルトがドアを開

けて出てきたからだ。

そこは本来なら連絡兵はもちろん、一般兵でさえドアを開けることすら叶う事など無い王の臥室なのだ、驚いて声が止まつてしまつのも頷ける。

そんな兵士の思いなど綺麗に無視して、王は不思議そうな顔をした。

「どうした？」

「ど、どうしたじゃないです、あの、申し訳ございません」

深く頭を下げた兵士はそのまま慌てて廊下にひざを付いた。

「大丈夫だよ。俺が開けたんだし。廊下だし、人目もないし、立つたままでいいけど？」

「滅相もないです！それに俺つああ、いや、私はまだ入隊して間もない人間ですしつ」

「そうなんだね、毎日お疲れ様。勤務ありがとうございます」

「……お礼なんて、もつたいない……！ありがとうございます！」

「それで？急ぎの連絡なんだろう？」

「あ！はいっ、実は……うわ……わっ……」

2度目、兵士の言葉が絡まつた。今度の原因は、廊下の角から猛スピードで飛んできた一羽の鳥が、兵士の頭に止まつたからだつた。兵士の頭に止まつた鳥は、少々大きめの猛禽類だ。生息国が南国で、赤、黄、緑、という派手な羽色をしている。この鳥の生息地はマリエール国。今期の王が少々癖のある困つた国だ。

なんにせよ、少々重い猛禽類が頭上に止まつたため、さらに頭を下げた状態になつてしまつた兵士が、情けない声で言葉を続ける。

「……」、「ご報告があります」

マリエール国は事故を起した船が出港した国だつた。何かしら連絡が来るとは思つていたが、レオンハルトの予想したのよりは、かなり遅い伝書鳥の到着だつた。

しかし、遅かるうと早かるうと、難癖のある王が送つてきた伝書内容だつたとしても、事故後の話だ、大よその内容には想像がつく。スカイゲートは、マリエールの船の救助を最優先に行つた国になる

わけで、問題が起ることとは無いだろ？

それが、普通の流れだ。

だが、兵士の報告はレオンハルトの頭を真っ白にさせるものだった。
「実は・・・マリエール國の伝書鳥、『マッハ』が先ほど到着しま
して、書状によりますと、あの船にレイキッシュ・王女様が乗船され
ていた事が発覚したそうです」

猛禽類の体重を首で支えながら何とか上を向き、兵士が差し出した
伝書を受け取り黙読する。

完全に読みきるまでレオンハルトが無言だったのは、驚きのあまり
だった。

兵士の手前、文書を読む間を利用して平静を装い、何とか言葉を口
にする。

「...一大事じゃないか」

「はい。それから、書面にもございますが、こちらの返信を待たず
して、マリエール國王、デジュメール様がこちらに向かっているそ
うです」

「なんて事だ...、それで、王女の消息は？」

「今、収容所や医院などをほかの兵が確認しておりますが、レイキ
ッシュ・王女がおられましたら、おそらく、よほどの事でもない限り
誰かが気がついているかと...」

レイキッシュ・王女。彼女はある意味各國に名前の知れ渡っている王
女だった。年齢はまだ十三歳ほどで、ソルと丁度同じくらいである。
彼女は王や王妃に黙つたまま、幾度となく自國を抜け出しても旅先
で探し出されると言つ事を繰り返しているのだ。

王女ということもあって、至れり尽くせりで育て上げられた彼女は
危険を知らず、好奇心で外へと旅立つ。

私生活においても、その我儘振りには付き人が逃げ出すほどだと聞
く。

そんな王女の特徴はなんと言つても、ほかに類の見ないほどの純色
に近いピンク色の巻き髪。そんな髪色をした乗客が収容所に居たと

したら、間違いなく日に留めた救護隊が気が付いただろ？
事故から数日経過した今、遭難した殆どの人の収容は終わっている。
なのに、誰も見たことが無いと言つことは、最悪の状況も考えられる。

「・・・テジュメール王は、いつ頃こちらに到着予定かな？」

「早ければ、本日の夕刻にでも到着されるかと・・・・・・あの、
レオンハルト様。それまでお休みになれますか？」

「大丈夫だよ。どうせ時間があつてもゆっくりしてられないだろ？
しね、報告を待ちながら仕事してるよ」

「・・・そうですか。どうぞ、あまり」「無理をなさらない様、報
告以上です」

「報告ありがとうございます。大変な中だけ、お迎えの用意だけは怠らない
よつにと、皆に伝えてもらつていいかな？」

「はい！必ずお伝えいたします。それでは、失礼いたします」
頭を下げて、その動きで肩へと移動したマッハをそのままに、兵士
はその場を後にした。

残されたレオンハルトは、兵士の姿がなくなると室内に戻り、文字
通り頭を抱えた。

王女が乗船した船が爆発した
船はスカイゲート行き

責任はどこにある？

船の経由地、グラウンドゾーンか？

今は、あんな廃れた国よりもスカイゲートだ
聞けば風竜の騎士も乗つていたと言つ
ならば、そこに責任を持つていけばいい

王に直接ではあまりに謀が知れる

風竜の騎士なら、一番近いところの地位を取れるだろ？

次の全世界を統べる王の座に

王と王が対面する部屋の椅子は、とてもゆったりと座る事ができる広々とした椅子だ。

だが、その椅子が小さく見えるような体が、窮屈そうに腰掛けている。

三十歳後半の男性、背は低くないがとても太っている彼、マリエール国の今期の王、デジュメールが開口一番、予想外の言葉を口にした。

「我が娘、レイキッシュュが無事見つかった暁には、この事態を收め切れなかつた風竜の騎士に責任を取つてもらひ」

「責任、ですか？」

「娘の心にはかなりの恐怖の傷が付いていよう。その傷は一生涯消えることが無いだろう。責任として、血縁を結んでもらひ」

「・・・」

デジュメール王が到着し、早速話しに入つたレオンハルトは、その言葉にまさしく返す言葉をなくしてしまつた。もつと違う意味で攻め立てられてしまうかと思っていたのだが、あまりにも考え付かなかつた言葉に頃垂れてしまいそうになる。お互い秘書のみを付けた二対一の部屋で、沈黙の時間がしばらく流れる。

「それは、事故の責任を取つたと言えるとは、思えませんが・・・」

「では、なにかな？娘一人の責任も取れないというのかね？」

「…それを言い出してしまつと、事故に遭つてしまつた女性全員のことはどうなるのかと・・・」

「我が娘と、一般階級の人間と一緒に考えないで欲しいのだが？」

「・・・しかし、王女はまだ成人もされていない。そのようなことを決めてしまわれるのはいかがなものかと」

「そうだな、とりあえずは婚約ということになるな」

「・・・」

自分の娘の生存すらまだ確認できていないと言つのに、盛大に笑う相手に思わず引きながら、レオンハルトはどうにか丸め込めないかと頭をめぐらせた。と、デジュメール王が、その太った体をテープルに乗り出して、覗き込むようにして言葉をかけてくる。

「時に、世継ぎの噂が一行に回つてこないが、スカイゲートの王はいかにお考えかな？」

「今は、そのようなお話では・・・」

「こんな状況は滅多に無いのでな、ついでに聞いておこうかと思つたのだよ。まあ、不老長寿と言われる種族柄、焦らないだろうが、上がりいつまでも同じ人間だと国の発展が止りますぞ」

「世継ぎの話はともかく、国の発展に関しては皆が精一杯やつてくれていますので、私は何も心配していませんよ。・・・今回の件に関しては、何よりもレイキッシュ王女の無事の確認を最優先にいたしますよう。当然、お話はそれからでもよろしいですね？」

「・・・つむ、ではそうしてくれ」

「では、御心配も尽きないと思いますが、お部屋をご用意させて頂いていますので、そちらで少しでも旅の疲れを癒してください」命を軽んじ、私欲が先にである。

この席でのデジュメールは、レオンハルトが今まで見た彼の中で一番最低な姿だった。

その思いが声色に出てしまつたのか、デジュメールと秘書はその場から逃げるよう退室していった。

謀（後書き）

「——読みありがとうございました。」

レオンハルトさんは、この後、遠い目をして心で一言呟きます。

「俺もまだまだ我慢が足りないな……」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2624v/>

GAME

2011年11月29日20時45分発行